

上大屋南部地区遺跡群

上大屋下組遺跡

上大屋中組遺跡

上大屋天王山遺跡

団体営日光道東土地改良総合整備事業  
に伴う埋蔵文化財発掘報告書 III

## 序 文

平成4年度から開始されました団体営日光道東地区土地改良総合整備事業に係る一連の埋蔵文化財調査も平成9年に終了し、第3集の報告書を刊行いたします。

事業該当地区は、荒砥川左岸の高燥台地に広がる水田と桑畠が広がる農業地帯であり、遺跡の希薄な地帯と考えられておりましたが、ここに紹介する上大屋下組遺跡、同中組遺跡、同天王山遺跡からは縄文時代から中世に至る遺構・遺物が調査されました。これらの遺跡は、南方は前橋市の荒砥北部遺跡群に続き、北方にも続く広範囲な遺跡地帯と考えられます。

上大屋下組遺跡では縄文時代の土坑と弥生時代から古墳時代への過渡期の様相を知る住居跡、同中組遺跡では、中世の堅穴造構から約一貫文（千枚）に近い枚数の渡来錢が出土し、同天王山遺跡は中組遺跡に拘わる遺構や古墳時代の住居跡が検出されました。

調査の実施に当たりご協力・ご指導をいただきました各位に感謝申し上げます。今後、本報告書が多くの方々に活用され、当町並びに本県の歴史の解明を探る資料として学習の一助となれば幸いです。発掘調査・整理作業に携われられた多くの方々に感謝の意を表して序といたします。

平成11年2月

勢多郡大胡町教育委員会  
教育長 松 本 浩 一

## 例　　言

- 1 本書は、団体営土地改良総合日光道東事業の実施に伴い事前に発掘調査された大胡町大字上大屋地区に所在する上大屋南部遺跡群の下組遺跡・中組遺跡・天王山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の名称は、大字名小字名を併記して上大屋〇〇遺跡と呼称する。
- 3 発掘調査は、大胡町教育委員会が直営で実施したものである。
- 4 調査組織及び本書の作成組織は、下記のとおりである。

### 事務局

教育長	剣持平三郎 (平成9年9月退職)
	松本浩一 (平成10年10月着任)
社会教育課長	山口 豊 (平成9年5月退任)
事務局長	井上健児 (平成9年6月着任) 機構改編に伴う
課長補佐	真藤 孝 (平成9年5月退任)
課(局)補佐	天沼和男 (平成7年4月着任～平成10年3月退任)
局長補佐	小林行夫 (平成9年6月着任) 機構改編に伴う

### 文化財担当

係長	山下歳信
主任	藤坂和延
主事	小沼安美 (平成10年8月退任)

- 5 本書で扱う三遺跡の調査・整理事業は下記のとおり実施した。

#### 〈調査〉

平成8年度	上大屋下組遺跡	調査担当 藤坂和延
平成9年度	上大屋中組・天王山遺跡	調査担当 山下歳信

#### 〈整理〉

平成10年度	上大屋下組遺跡	山下歳信・藤坂和延
	上大屋中組・同天王山遺跡	山下歳信

- 6 上大屋下組遺跡のテフラ、プラントオバール分析は株式会社古環境研究所による。
- 7 発掘調査によって出土した遺物については、總て大胡町教育委員会文化財事務所に付設する収蔵庫で管理・収蔵している。
- 8 発掘調査から本書作成の過程で、下記の方々や機関からのご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。(順不同、敬称略)

群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県埋蔵文化財調査事業団、群馬県埋蔵文化財センター  
前橋市教育委員会、太田市教育委員会 尾島町教育委員会、下仁田町教育委員会、  
技研測量設計株式会社 株式会社測研、須賀工業株式会社、株式会社古環境研究所  
相京建史 坂爪久純 谷藤保彦 新井和之 須永光一 大工原豊 新井善昭

- 9 発掘調査作業員・整理作業員は次のとおりである。(順不同、敬称略)
- 菅田ツル 大原きみ子 井上美代子 石井よね 小沢チズエ 萩原秀子 勅使川原幸枝 神尾 茂  
若林俊次 山下雅江 五十嵐文江 鈴木久美子 田村志づ江 北爪珠美 内藤典子

## 凡　　例

- 1 位置図（第1図）は建設省国土地理院発行の5万分の1の地形図「前橋」に加筆して使用した。
- 2 遺跡周辺の現況図（第2図）は大胡町役場発行の2千5百分の1、周辺の遺跡図（第3図）は建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図「大胡」と「鼻毛石」に加筆して使用した。
- 3 遺構番号の略称は、住居跡はH、土坑はD、竪穴遺坑はT、縄文時代の遺構にはJを頭に付した。
- 4 本書挿図の縮尺は次のとおりである。

### 《遺構》

上大屋中組・天王山遺跡全体図(第13図)は1:1,000。上大屋中組遺跡全体図(第14図)は1:400  
2号柱穴群と上大屋天王山遺跡A区全体図は1:120。上大屋天王山遺跡全体図は1:500。  
竪穴遺構・土坑は1:60を基本とした。

### 《遺物》

- 出土遺物の大半は1:3としたが、適宜スケールを添付している。古銭拓図は3分の2、参考資料は5分の4。
- 5 遺構図中に記した断面基準線は、標高である。
  - 6 遺構図中に示したN方位は、座標北である。
  - 7 上大屋中組・天王山遺跡のグリットは国家座標IX系に基づき、5m方眼のグリットを設定。
  - 8 縄文土器の胎土中に鐵錐を含むものは、断面に●を付している。
  - 9 計測値の( )は残存値を示す。
  - 10 写真図版の出土遺物番号は、挿図番号に一致する。

## 目 次

- 序文
- 例言
- 凡例
- 目次
- 挿図目次
- 挿表目次
- 写真目次

第Ⅰ章	発掘調査に至る経緯	藤坂	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と周辺の遺跡	山下	1~6
第1節	遺跡の位置		
第2節	周辺の遺跡		
第Ⅲ章	上大屋下組遺跡		
第1節	遺跡の立地と概要、調査の方法	藤坂	7
第2節	検出された遺構と遺物	山下・藤坂	7~13
第3節	自然科学分析	古環境研究所	14~19
第4節	遺跡周辺の古環境復元とまとめ	藤坂	20
第Ⅳ章	上大屋中組遺跡	山下	21~68
第Ⅴ章	群馬県内出土の埋納錢（備蓄錢）と上大屋中組出土錢について	山下	69~80
第Ⅵ章	上大屋天王山遺跡	山下	81~97
第Ⅶ章	成果とまとめ	山下	97
写真図版			
抄録			

## 図 版 目 次

第1図	上大屋下組・中組・天王山遺跡位置図	2	第2図	遺跡周辺の現況図	3	第3図	周辺の遺跡図	4
第4図	〈下組遺跡〉グリット配置図	7	第5図	〈下組遺跡〉A区全体図	7	第6図	〈下組遺跡〉戻土坑と出土遺物	8
第7図	〈下組遺跡〉遺構外遺物	9	第8図	〈下組遺跡〉1号住居跡・出土遺物	11	第9図	〈下組遺跡〉トレンチ土壙圖(1)	12
第10図	〈下組遺跡〉トレンチ土壙圖(2)	13	第11図	〈下組遺跡〉トレンチ土壙住状図	18	第12図	〈下組遺跡〉プランツ・オパール分析結果	19
第11図	上大屋中組・天王山遺跡全体図	22	第13図	〈中組遺跡〉全体図	23	第14図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構・古鉄出土分類図	24
第16図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(1)	25	第17図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(2)	25	第18図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(3)	27
第19図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(4)	28	第20図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(5)	29	第21図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(6)	30
第22図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(7)	31	第23図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(8)	32	第24図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(9)	33
第25図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(10)	34	第26図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(11)	35	第27図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(12)	36
第28図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(13)	37	第29図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(14)	38	第30図	〈中組遺跡〉1号竪穴遺構出土古鉄(15)	39

第31図 《中庭遺跡》1号竪穴遺構出土古銭 (16) ——40	第32図 《中庭遺跡》1号竪穴遺構出土古銭 (17) ——41	第33図 《中庭遺跡》1号竪穴遺構出土古銭 (18) ——42
第34図 《中庭遺跡》1号竪穴遺構出土古銭 (19) ——43	第35図 《中庭遺跡》1号竪穴遺構出土古銭 (20) ——44	第36図 《中庭遺跡》1号竪穴遺構出土古銭 (21) ——45
第37図 《中庭遺跡》1号竪穴遺構出土古銭 (22) ——46	第38図 《中庭遺跡》1号竪穴遺構出土古銭 (23) ——47	第39図 《中庭遺跡》1号竪穴遺構出土古銭 (24) ——48
第40図 《中庭遺跡》2・3号竪穴遺構・出土遺物 ——49	第41図 《中庭遺跡》4号竪穴遺構・5~8号土坑 ——58	第42図 《中庭遺跡》1~3・9~10号土坑 ——59
第43図 《中庭遺跡》土坑出土遺物 ——50	第44図 《中庭遺跡》1号井戸 ——62	第45図 《中庭遺跡》1号柱穴群 ——62
第46図 《中庭遺跡》1号井戸出土遺物 (1) ——63	第47図 《中庭遺跡》1号井戸出土遺物 (2) ——64	第48図 《中庭遺跡》2号柱穴群 ——65
第49図 《中庭遺跡》2号柱穴群出土遺物 ——66	第50図 《中庭遺跡》1号溝・出土遺物 ——67	第51図 《中庭遺跡》遺構外遺物 ——68
第52図 《中庭遺跡》1号竪穴遺構出土古銭 (1) 75	第53図 《中庭遺跡》1号竪穴遺構出土古銭 (2) 76	第54図 《中庭遺跡》1号竪穴遺構出土古銭 (3) 77
第55図 《天王山遺跡》全体会 ——82	第56図 《天王山遺跡》A区全体会・1~3号住居跡 ——83	第57図 《天王山遺跡》1号住居跡出土遺物 ——84
第58図 《天王山遺跡》4号住居跡・出土遺物 ——85	第59図 《天王山遺跡》5号住居跡 ——86	第60図 《天王山遺跡》6号住居跡 ——87
第61図 《天王山遺跡》6号住居跡出土遺物 (1) ——88	第62図 《天王山遺跡》6号住居跡出土遺物 (2) ——89	第63図 《天王山遺跡》7号住居跡・出土遺物 ——91
第64図 《天王山遺跡》8号住居跡 ——92	第65図 《天王山遺跡》1号溝・1号井戸 ——94	第66図 《天王山遺跡》1・2号地下式坑 ——95
第67図 《天王山遺跡》1号地下式坑出土遺物 ——96	第68図 《天王山遺跡》遺構外遺物 ——96	第69図 (参考資料) 牛田出土器の復元十二種・加工部等
付表-1 上大屋南面遺跡群と周辺の遺跡分布図 ——5		
-2 上大屋下部遺跡構外出土の石器観察表 ——10		
-3 上大屋下部遺跡におけるプランツ・オベル分析結果 ——18		
-4 中庭遺跡 1号竪穴遺構出土古銭一覧 ——55		
-5 銭種比率 ——74		
-6 出土遺物量年代区分表 ——79		

## 写真目次

PL 1	1 上大屋下組遺跡 A 区全景	2 1号住居跡土層	3 Aa-C堆積状況
	4 1号住居跡	5 1号土坑	6 2号土坑
PL 2	植物珪酸体の顕微鏡写真		
PL 3	1 上大屋中組遺跡全景	2 同主要部	
PL 4	1 1号竪穴遺構	2 古銭出土状況	3 2号竪穴遺構
	4 3号竪穴遺構	5 4号竪穴遺構・土坑	6 2号柱穴群石列
PL 5	1号竪穴遺構出土古銭銭種		
PL 6	出土遺物		
PL 7	1 天王山遺跡全景	2 A調査区全景	3 1~3号住居跡
	4 1号住居跡遺物出土状況		
PL 8	1 B調査区全景	2 4号住居跡	3 5号住居跡
	4 6号住居跡全景	5 住居跡遺物出土状況	6 7号住居跡
PL 9	1 6号住居跡遺物出土状況	2 同 8号住居跡	3 1号地下式坑
	4 2号地下式坑	以下、出土遺物	
PL10	出土遺物		
PL11	出土遺物		

## 第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

平成4年度から開始された「団体営土地改良総合事業日光道東地区」に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査は、同年度に大字河原浜字日光道東地区的日光道東遺跡、翌5年度には大字樋越字浅見に所在した浅見遺跡を実施し、平成5年度に第1集日光道東遺跡、平成6年度には第2集浅見遺跡の報告書を刊行した。

その後、1年間の休止をおいて平成8年度になり事業実施隣接地及び用水受益地区であった上大屋地区から土地区画整備の同意がまとまり継続事業となった。事業に伴い事前の埋蔵文化財発掘調査も同8年度に上大屋下組遺跡、翌9年度に上大屋中組遺跡及び上大屋天王山遺跡を実施した。

資料整理及び発掘調査報告書の刊行は平成10年度に実施し、本事業に伴う発掘調査及び資料整理・発掘調査報告書の刊行までの一連の作業はすべて終了した。(藤坂)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の遺跡

### 第1節 遺跡の位置(第1・2図)

勢多郡大胡町は、カルデラ型火山赤城の南麓裾部上に位置し、県都前橋市とは西方から南方、北方に宮城村、東方に粕川村と接し、南東方向では伊勢崎市と隣接する。前橋市、伊勢崎市とも10kmほどのエリアにあり、近年はそのベットタウンとして人口増加が見られる。

境域は最北端を赤城山の中腹標高640mの最高所として南北に長いヤマトイモ形を呈し、最低所は最南端で約120mである。

当町のほぼ中央を南流する荒砥川は、赤城山の荒山を源として宮城村、当町そして前橋市東部を経て伊勢崎市で広瀬川と合流する。その支流である神沢川は当町を流れる能満寺川と西能満寺川を合流させ、さらに東神沢川と合流してから荒砥川に注ぐ。荒砥川流域は基盤岩層である大胡軽石流堆積物を侵食し、高い崖をもつ台地地形と谷底冲積地を作りだしている。能満寺川は宮城村に源を発して、町境で西能満寺川と能満寺川に分岐し、西能満寺川は千貫沼に注ぎ、能満寺川は当町樋越地区で神沢川と合流する。開折された低地部は小規模な水田が開けているが、その多くは畑地帯で桑園が広がる。

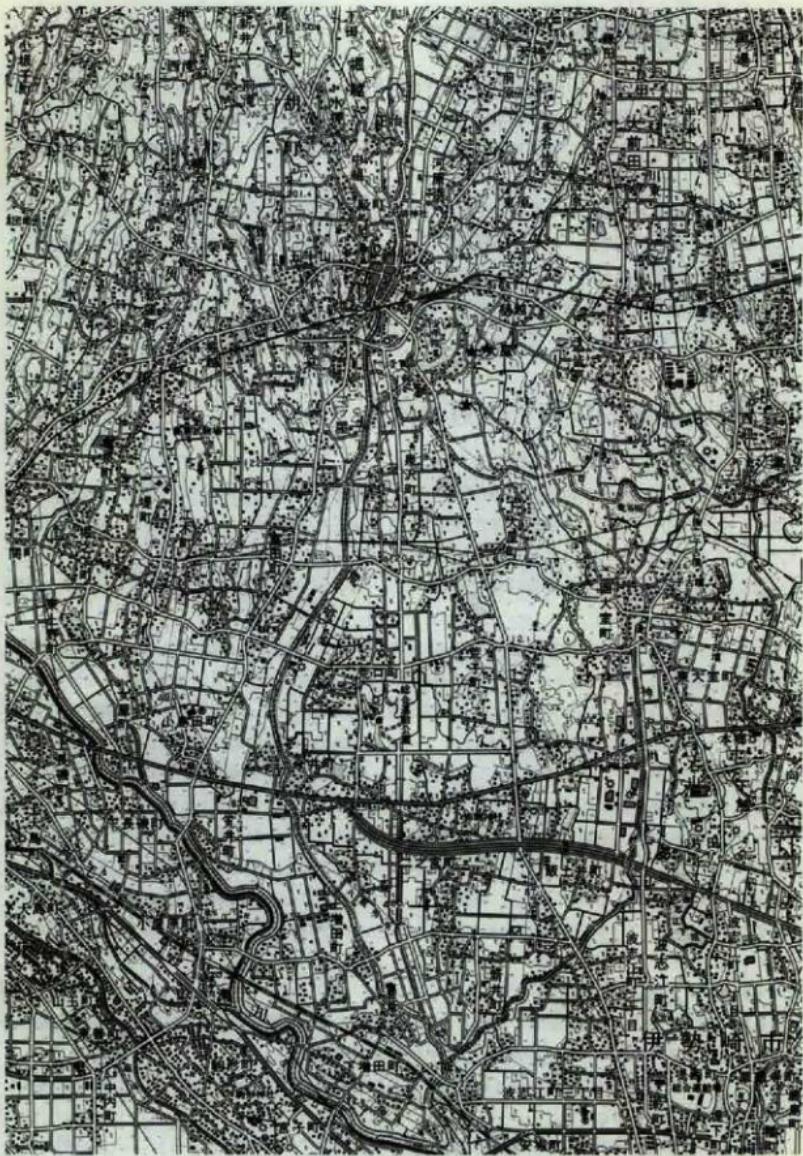
上大屋南部遺跡群は、県都前橋と桐生を結ぶ私鉄上毛電鉄大胡駅の南東約1.3km、標高150m前後の洪積台地上に位置し、水田と畑地帯が広がる。畑地帯は桑園が主体を占めていたが、近年は大胡バイパスの開通後に宅地化が進んだ地区である。遺跡の広がりは主として台地部を選地し、東は能満寺川と西は千貫沼、北は大胡バイパス周辺までの広がりに縄文時代から江戸期の遺跡が点在するものと推察される。

### 第2節 周辺の遺跡(第3図)

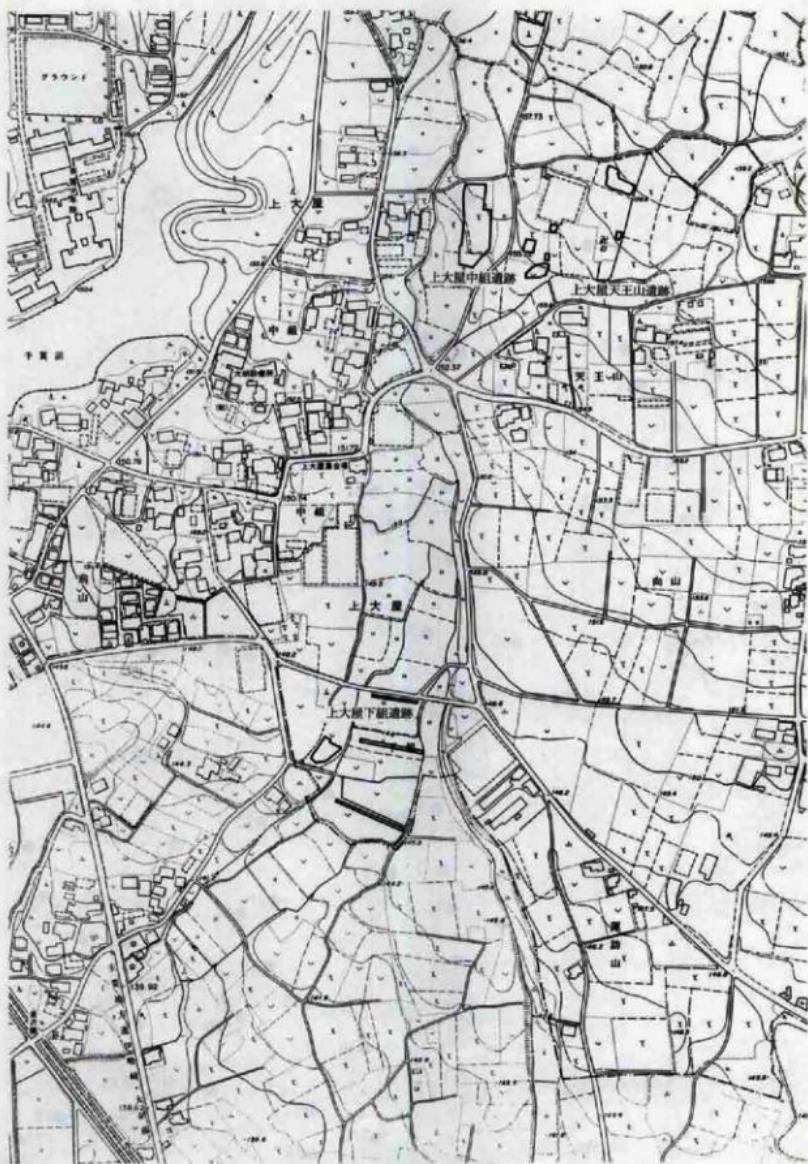
旧石器時代は、先ず三ッ屋遺跡(42)が知られているが、その他は遺物の出土に止まっている。細石核を出土した日光道東遺跡(21)、横沢新屋敷遺跡(8)等がある。

縄文時代は早期押型文系土器等が多く出土しているが、その大半は包含層からの出土であり、明確な遺構との共伴関係の事例はない。

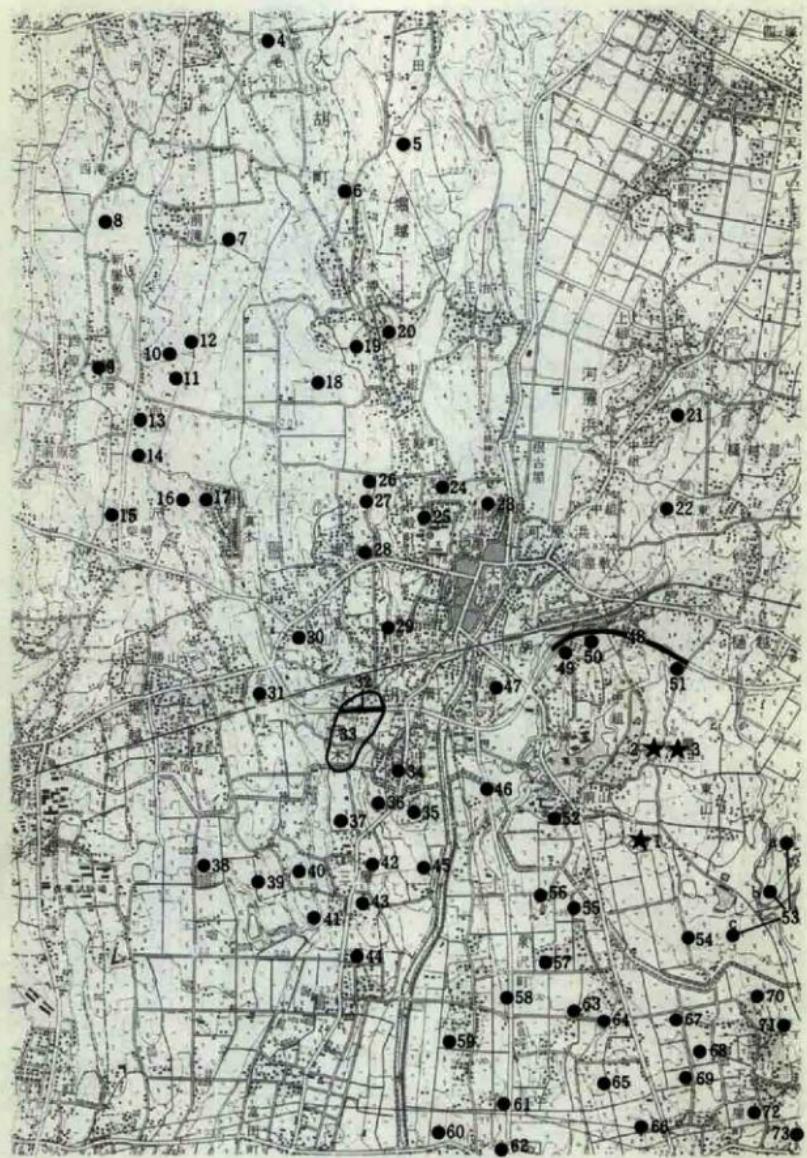
前期に入り遺跡数は増加を呈し、花積下層式期～ニッ木式期では新屋敷遺跡(8)、ニッ木式期は芝山遺跡(7)と中道遺跡(19)が調査され、その分布は標高200～230m前後にあり、住居総数は県内唯一を数



第1図 上大屋下組・中組・天王山遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の現況図



第3図 周辺の遺跡分布図

第1表 上大屋南部遺跡群と周辺の遺跡分布図

番号	遺跡名	遺跡の主な時代と概要	参考文献
1	上大屋下組遺跡	興文時代前縄土坑、古墳時代前期住居	本報告書
2	上大屋中組遺跡	中世窯窓遺跡 4基・土坑・井戸・柱穴跡	本報告書
3	上大屋天王山遺跡	古墳中期窓穴住居跡、中世地下式土坑・溝地	本報告書
4	西尾引道跡	平安時代鐵鉄社 3基・窓穴住居・民窓	藤原和経 1994 大胡西北部遺跡群 第1集 -乙西尾引-・西天神・宗崎跡
5	甲輪訪遺跡	興文時代中期窓穴住居 7軒	山下敬信 1987 平間訪遺跡発掘調査報告書Ⅰ
6	熊谷西一丁目遺跡	興文時代後期(2世紀末)窓穴住居 2軒・包合墓遺物(加賀利B式) 多量	藤原和経 1994 大胡西北部遺跡群 第1集 -甲輪訪-・田畠遺跡・高庭乙尻遺跡
7	熊谷芝山遺跡	興文時代初期(二ツ木式)窓穴住居 3軒・土坑・古墳 1基	山下敬信 1994 熊谷芝山遺跡(大胡町立芝山遺跡)発掘調査報告書
8	横沢川遺跡	近江・駿河(遠江)二式窓穴住居跡・古墳 2基・古窓・窓穴・溝地	藤原和経 1997 大胡西北部遺跡群 第2集 -横沢新能登遺跡
9	横穴式墓跡	戰國時代	山崎 一 1976 大胡町史
10	横沢向田遺跡	興文時代前期(勝沼A式)窓穴住居 1軒・古墳 2基・8世紀代の櫛穴住居	山下敬信 1987 大胡西北部遺跡群 第5集 -横沢向田遺跡・高庭二本松遺跡
11	堀越二本松遺跡1区	戦国時代(勝沼A式)窓穴住居・土坑・平間訪窓穴住居・竪穴式墓跡	△ □ □ □ □ □
12	堀越二本松遺跡2区	興文時代初期(勝沼A式)窓穴住居・土坑・炭窓跡	△ □ □ □ □ □
13	横沢古山遺跡	興文時代前期(黒須・有尾式)窓穴住居 4軒・土坑 5基・古墳 2基	△ □ □ □ □ □
14	坂野古山遺跡	後原古墳(黒崎源平刀の手把頭が出土)	鶴江秀夫 1981 開成風土記 Vol.12 グンマ古代への跡 無し大刀の世界
15	坂野遺跡群	興文時代土坑跡	山下敬信 1994 大胡西北部遺跡群 第1集 -乙西尾引-・西天神・坂野遺跡
16	堀越二本松遺跡	興文時代前期(開山式)窓穴住居 1軒他	山下敬信 1998 ① - - - 5集 -横沢向田遺跡・高庭二本松遺跡
17	真木遺跡	平安時代の火葬墓	
18	折井御跡	戦国時代(勝沼)窓穴住居・古墳時代窓穴住居・平安時代窓穴住居	山下敬信 1996 新宿遺跡
19	堀越中・北遺跡	戦国時代(二つ木・影印B式・三井)窓穴住居・古墳時代窓穴住居	山下敬信 1997 大胡西北部遺跡群 第3集 -堀越中・北遺跡
20	堀越二間持寺門遺跡	平安時代窓穴住居跡 3軒	藤原和経 1994 大胡西北部遺跡群 第1集 -堀越二丁目遺跡・堀越中・北遺跡
21	日光山東遺跡	旧石器・縄文時代土坑・平安時代窓穴住居跡・中世古窓	山下敬信 1994 日光山東遺跡(注連寺地区)発掘調査報告書(東京文庫収蔵調査報告書)
22	曳足跡	興文時代前期窓穴住居・土坑・平安時代窓穴住居	山下敬信 1995 曳足跡(日光山東地区)発掘調査報告書(東京文庫収蔵調査報告書)
23	大胡城跡(築造史定説)	戰國時代-近世初頭	山下敬信 1988 大胡城跡保存管理計画書
24	霞神山遺跡		山崎 一 1976 大胡町史
25	原野遺跡	大胡町の原野遺跡(近江・佐久・千葉時代窓穴住居・古窓・窓穴式窓・井戸)	山下敬信 1985 原野遺跡 大胡町史(各卷に著者用記入)
26	五石山D地点遺跡	古墳時代前期窓穴住居・平安時代窓穴住居地	
27	五十石山遺跡	古墳時代前期窓穴住居	
28	五石山C地点遺跡	古墳時代窓穴住居・平安時代窓穴住居地	
29	天神跡	近江・駿河(勝沼E式)窓穴住居・窓穴内窓・平安時代窓穴住居	山下敬信 1989 天神遺跡 舞馬県史資料編 I 原始古代 I
30	醍醐古窓(東指定史跡)		松本浩一 1976 大胡町史
31	大道下遺跡	平安時代の落葉跡跡	
32	天神門呂遺跡	戦国時代(勝沼)窓穴住居・古窓・古窓中1号・平安時代窓穴住居跡	井戸田 1998 天神門呂(天神門呂)窓穴住居跡
33	天神門呂遺跡群	戦国時代(勝沼)窓穴住居・古窓・古窓中1号・平安時代窓穴住居跡	山下敬信 1992 中川原遺跡群 第1集 -上ノ山遺跡
34	東・西小路古窓群		
35	上ノ山遺跡	戦国時代(勝沼)窓穴住居・古窓・古窓中1号・古窓中2号・古窓中3号・古窓中4号・古窓中5号・古窓中6号・古窓中7号	山下敬信 1992 中川原遺跡群 第1集 -上ノ山遺跡
36	西小路遺跡	興文時代初期(加賀利E式)窓穴住居・古窓 5基・江戸時代の基礎	山下敬信 1994 西小路遺跡(ゴルフ練習場)発掘調査報告書
37	南原東山遺跡群	興文時代中期(加賀利E式)窓穴住居・平安時代窓穴住居	
38	蟹伏山遺跡	奈良～平安時代の落葉跡	
39	大日遺跡	奈良～平安時代の落葉跡	
40	福井窓B地点遺跡	戦国時代(勝沼)窓穴住居・古窓時代窓穴住居・平安時代窓穴住居	山下敬信 1998 茂木遺跡群 福井窓B地点遺跡
41	福井窓A地点遺跡	戦国時代中期(加賀利E式)窓穴住居 3軒・古窓 2基・古窓時代窓穴住居	山下敬信 1996 # 福井窓A地点遺跡
42	小林寺跡	古窓・戸袋門代古窓(加賀利E式)窓穴住居・土坑・古窓時代窓穴住居	藤原和経 1992 中川原遺跡群 第1集 -小林・山神・大堀遺跡
43	山神遺跡	興文時代土坑・古窓時代窓穴住居跡	△ □ □ □ □ □
44	大堀遺跡	興文時代窓穴住居	△ □ □ □ □ □
45	山神遺跡	館跡が想定される。2万5千枚程度の青銅鏡が出土	
46	下ノ山遺跡	古墳時代前期窓穴住居	
47	中宮閣遺跡	弘仁 9年(818)の地震災害で埋没した水田跡	山下敬信 1990 中宮閣遺跡 第3回 東日本の水田跡を考える会-青野編-
48	上大屋・越越地區遺跡群	義文時代(勝沼・高井・喜多)窓穴住居・古窓 2基・井戸跡・窓穴・墓室等	山下敬信 1996 井戸跡(高井)・窓穴(喜多)・墓室(井戸)・窓穴(窓)・墓室(喜多)・井戸(喜多)・窓穴(喜多)・窓(喜多)
49	ハラク跡遺跡	興文時代(勝沼)窓穴住居	
50	福井窓古窓(町指定史跡)		
51	穂積西の沖遺跡	江戸期の粗窓跡	
52	前舞良瀬高等学校遺跡	古墳時代前期窓穴住居	

## 町外(荒川北部遺跡群)

53. 横尾遺跡群(3段・穴窓跡 b上農業遺跡 c大道跡) 54. 上岩山A・B道路 55. 寺道跡 56. 各律道路 57. 守前道路 58. 足布篠戸道路 59. 尾山通路 60. 北京道路

61. 新山通路 62. 上岩山通路 63. 東前田道路 64. 東京西道路 65. 向前道路 66. 上西延道路 67. 東原A・B道路 68. 中山A・B道路 69. 村主道路 70. 大道跡

71. 阿良井井戸岸通路 72. 北川下道路 73. 明神道路

## 参考文献

1991 横尾遺跡群II 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1998 諸防西道路・諏訪西道路・柳久保道路・川龍告戸道路・向原道路 昭和58年度県営は堤整備事業玄坂北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

える。これに続く関山式期は遺跡(16)で1軒検出されている。黒浜・有尾式期に至ると天神風呂遺跡群(33)や横沢向山遺跡(13)に代表される。諸磯式期では、諸磯a式期の横沢向山(13)、浮島・興津式が出土した上大屋・橋越地区遺跡群(48)は諸磯b式期を主体とする。十三菩提式期の資料としては堀越中道遺跡(19)がある。

中期は至ると遺跡数のピークを向かえる。五領ヶ台式期は新屋敷遺跡(8)等に土器の検出があるが遺構は検出されていない。勝坂・阿玉台式期は天神遺跡(29)がある。加曾利E式期には著しい増加があり、E2~3式期を主体とする上ノ山遺跡(35)、西小路遺跡(36)、甲賀藤遺跡(5)等があり、中葉~後葉の過渡期に局地的分布を示す三原田式土器、長野県から群馬県にその分布の主体を占める焼町式土器が出土している。新屋敷遺跡(8)からは県内では出土例の少ない新崎式土器が注目される。

後期に至り遺跡数は激少する。天神遺跡(29)からは堀之内式期の注口土器や土陶、三十稻場式土器が出土し、西一丁田遺跡(6)は称名寺式期~加曾利B式期の包含層遺物と堀之内式期の住居跡2軒を検出した。

晩期の遺物は検出されていないが、宮城村境の荒砥川周辺の正治皆戸からは個人蔵の注口土器が知られている。この周辺の河原浜低地には遺跡が存在した可能性が推察される。

弥生時代は再葬墓と考えられる金丸遺跡が著名であるが、遺跡として認められる広がりは現在まで確認されていない。この状況は宮城村や富士見村も同様であるが、近年の総開発に伴う発掘において断片的であるが、樽式系土器や表探による磨製有孔石鑿、上大屋下組遺跡出土の土器破片からもその存在は希薄ではあるが、今後に検出される可能性が示唆された。

古墳時代に至り、当町の初期古墳は主体部が竪穴系で5世紀後半~6世紀初頭頃の構築と考えられる上ノ山遺跡(35)や西小路遺跡(36)があり、横穴系の後期古墳に属する古墳群は、荒砥川水系沿いの東・西小路古墳群(34)や西方の寺沢川水系沿いに潮り獅噛環頭大刀を出土している横沢柴崎古墳群(14)、横沢新屋敷古墳群(8)が構築されている。県指定史跡の堀越古墳(30)は終末期古墳として著名である。

集落は4世紀~5世紀代の集落跡が荒砥川左岸の自然堤防上の下宮関遺跡(46)や河川の台地縁辺部に存在する堀越中道遺跡(19)や新畠遺跡(18)は、生産域(水田)との拘わりが考えられる遷地である。6世紀に入ると天神風呂遺跡群(33)の様に集落跡は大規模となり、台地縁辺部から中央部に入り込む様相が見られる。遺物としては、稻荷窯B地点遺跡(40)から出土した円筒形土器や木の葉形土器が注目される。

歴史時代では当町の中核的集落と推察される天神風呂遺跡群(33)が継続的に営まれ、寺院の存在を示唆する瓦塔片や淨瓶、朱墨土器等が出土している。また、堀越中道遺跡(19)は9世紀の官衙の要素が考えられる集落構造で掘立柱建物跡・礎石立の竪穴住居跡や道路跡があり、遺物としては把手付鉄鍋・「立」の焼印・馬具、焼印と同じ「立」の墨書き土器等が注目される。

生産址では須恵器窯、製鉄址や木炭窯等が上大屋・橋越地区遺跡群(48)と西尾引遺跡(4)で検出されている。製鉄址に拘わる遺跡は赤城南麓一帯に多く検出されているが、今後、総合的な拘わりを理解することでその時代背景が推察されよう。

中世~近世に至る遺跡は断続的に調査されている大胡城跡(23)がある。中世遺跡の検出例は少ないが茂木山ノ前遺跡(45)からは備蓄錢の出土があり、館跡が想定される地域でもある。今回の上大屋中組遺跡(2)では居住空間に伴う竪穴造構から多量の渡来錢が出土し、上大屋天王山遺跡(3)からは地下式坑が検出されたが、数多くの資料と問題を提示してくれている。

今後は近隣との総合的な考察を介して、赤城南麓の地域性が示されるものであろう。(山下)

## 第III章 上大屋下組遺跡

### 第1節 遺跡の立地と概要、調査の方法（第2・4図）

本遺跡地は荒砥川左岸の高燥台地上にあり、千貫沼の東～南方に広がる上大屋集落の南東の町境に位置する。台地部には畠地と桑園、沖積地には水田が広がり、南方で町境となり前橋市下大屋と接する。

調査区は、標高147m前後の台地縁辺部と比高差約1.5～2mで東方に南北に続く水田域である。

調査は、試掘・確認調査により検出された住居跡及び土坑を中心とする台地上を拡張し、A区と呼称した。

また、台地の東方に広がる低地部分にはトレンチを設定し、堆積土層のテフラの確認及びプランツ・オーバル分析を実施し、遺跡を取り巻く環境復元を試みた。

調査に当たっては、国家座標IX系（X=44675、Y=-59455）を基点として5×5mのグリッドを設定した。

グリッドは東西方向に西からアルファベットでA～V、南北方向に南から算用数字1～26を付し、南18西コーナーの杭をもってグリッド名とした。

東方の低地に設定したトレンチは、北から1T・172T・3Tと呼称する。

調査により、A区とトレンチで縄文時代前期の土坑4基と縄文時代早期押型文系土器から後期烟之内式期の土器片と石器、浅間C絆石(As-C)が堆積する豊穴住居跡1軒を検出した。

### 第2節 検出された遺構と遺物（第6～7図）

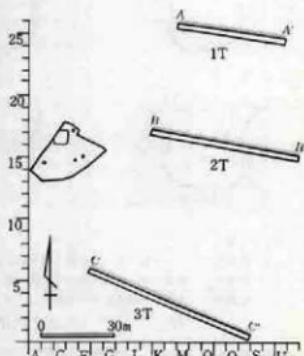
#### J 1 D (第6図)

A調査区の北方、D18グリッドに包括され、標高147.10～20m間の平坦部に検出された。形状は上面がやや歪んだ東西に長い楕円形気味で、中～下面是東西に長い楕円形を呈する。規模は東西長1.3m、南北長1.15m前後を測る。壁面は下部が袋状を呈し、上部が開口する。壁高は90～95cmが残存する。底面はほぼ平坦である。遺物は覆土内より前期の所産の土器片が出土した。

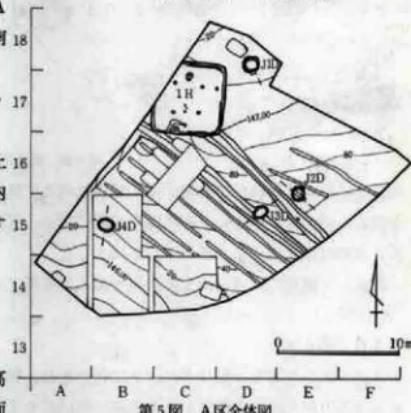
出土した遺物は縄文前期の所産と考えられ、胎土に纖維を混入する。1は口縁部を外反させ、補修孔を穿つ。2～7は胴部片でRLを施す。

#### J 2 D (第6図)

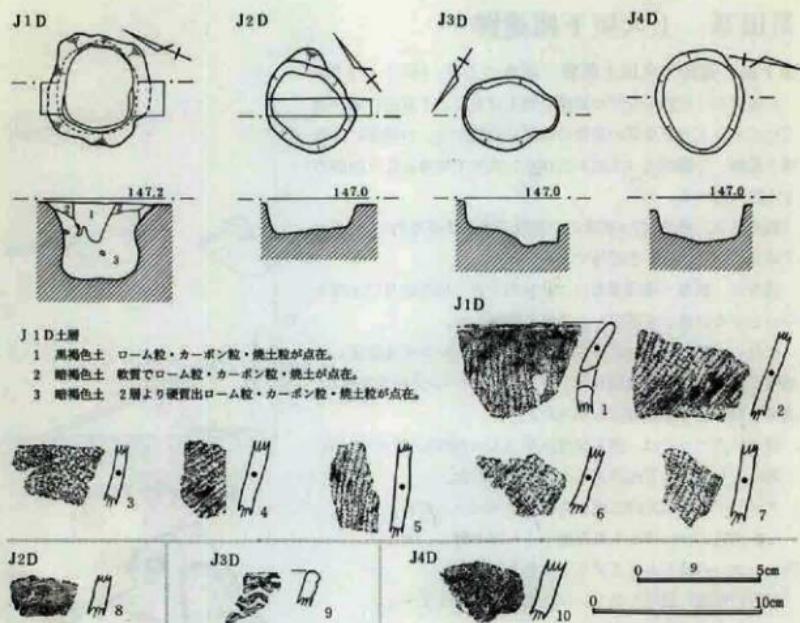
A調査区の東寄り、E15・16グリッドに跨り、標高146.70～80m間の平坦部に検出された。南西方



第4図 グリッド配置図



第5図 A区全体図



第6図 繩文土坑と出土遺物

向にJ3Dが2mほどに接する。形状は南北に長い梢円形を呈する。規模は南北長1.15m、東西95cmを測る。壁面は直線的に上方に連れて開口する。壁高は27~35cmが残存する。底面はやや北方に傾斜する。遺物は覆土内より土器片1点が出土した。

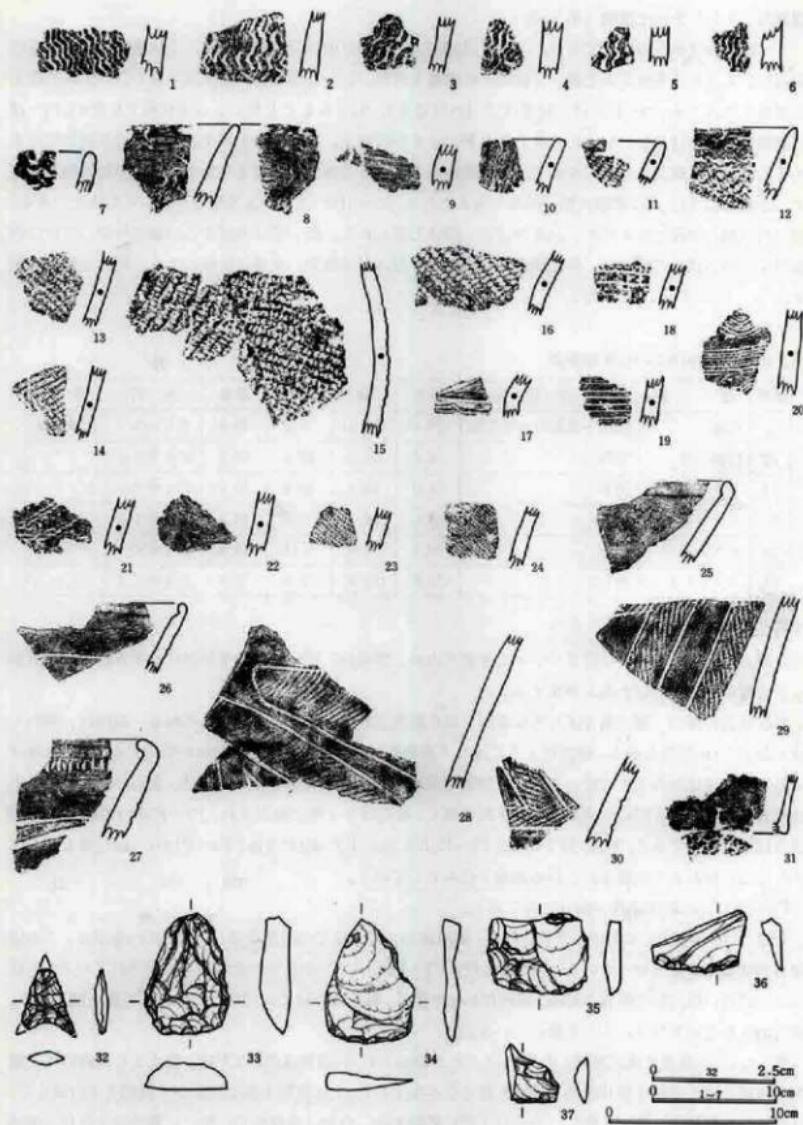
出土した遺物(8)は、胎土に片岩を混入する無文の土器片である。

#### J3D (第6図)

A調査区の東寄り、D15グリットに包括され、標高146.60~70m間の平坦部に検出された。形状は北東~南西方向に長い南西部がやや先細の梢円形を呈する。規模は長軸長1.15m、短軸最大長88cmを測る。壁面は直立気味とし、壁高は25~35cmが残存する。底面は南西部部分が窪む。遺物(9)は覆土内より山型を横位に施す押型文土器の口縁部片1点が出土した。

#### J4D (第6図)

A調査区の南西部、B15グリットに包括され、146.20m前後の平坦部に検出された。形状は東西に長い梢円形を呈する。規模は東西長1.25m、南北最大長1.06mを測る。壁面は直線的に上方に開口する。壁高は27~40cmが残存する。底面は中央部分がやや窪む皿状とする。遺物は覆土内より無文の土器片1点が出土した。



第7図 遺構外とトレンチ出土遺物

### 遺構外とトレンチ出土遺物（第7図）

1~24はA区からの出土である。1~7は押型文土器で、山形の押型を施す。7は縦に施する口縁部片。8と9は条痕文系土器。9は胎土に纖維を含む。10~22は黒浜・有尾式土器で、いずれも胎土に纖維を混入する。10~12は口縁部片で、10・11はRL、12はRLとLRによる羽状繩文を施す。13~16は胴部片で、13はRL、14・15はRLとLRによる羽状繩文、16はLRを施す。17~19は半截竹管による平行沈線で区画文や三角文を施す。20は櫛齒状工具による横位文と弧文を施す。21は附加条繩文を施す。22は無文。23と24は諸礎式期の所産と考えられる。25~31は3TのXX層最下部からの出土である。堀之内式期の所産と考えられ、26と28は同一個体と思われる。25~27は外反する口縁部片で、27は口唇部下をくの字状に内傾させ、外面屈曲部に連続して刻み目を施す。文様は沈線による三角文と磨消を施す。

第2表 遺構外出土の石器観察表

番号	器種	遺存状況	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
32	石鎌	先端・基部の一部欠損	(19.8)	(15.6)	3.3	(0.8)	チャート	凹基無茎
33	打製石斧	完形	72.5	50.2	17.0	69.5	ディサイト	
34	スクレーパー	完形	74.0	53.4	10.0	39.2	ディサイト	
35	スクレーパー	完形	48.6	60.4	9.8	38.4	ディサイト	
36	スクレーパー	完形	39.4	58.6	11	18.8	ディサイト	
37	スクレーパー	約1/2	(35.8)	(30.8)	7.8	7.8	ディサイト	

### 1号住居跡（第8図）

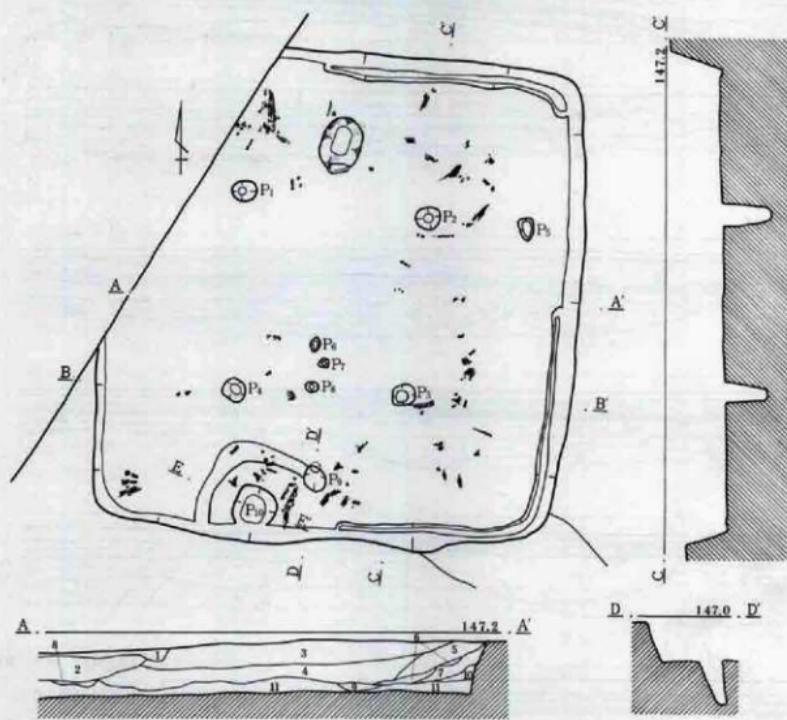
A調査区の北方寄り、C17グリットに主体を占め、標高147.10m前後の平坦部に検出された。東方から南方部に繩文時代の土坑が分布する。

形状は北西部の一部が調査区となるが、ほぼ隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は、東西・南北長が5.8m前後を測る。壁面は上方に連れて直線的に開き、壁高は50~60cmが残存する。床面はほぼ平坦で、中央部分の主柱穴にかこまれた空間の周辺に炭化材が残存する。周溝は、北辺の北西隅から中央部と東辺中央から南辺中央部までL字形に続く。柱穴は9ヶ所に検出され、P1~P4の4本が主柱穴で深さは55cm前後である。柱間はP1~P2とP2~P3が2.2m、P3~P4が2m、P4~P1が2.4mを測る。P9は入り口部に拘わると推察され、斜めの掘り込みとしている。

P6~P8は10cm前後の浅い掘り込みである。

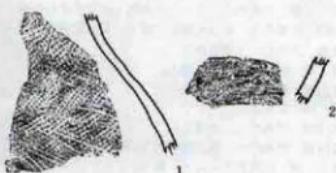
貯蔵穴は、南壁沿いのP10と考えられる。規模は50×50cmほどの円形を呈し、深さ70cmを測る。この周囲は台状の高まりとなっている。炉址は主柱穴P1とP2のライン中央やや北西寄りに配されている。形状は南北に長い楕円形で南北長75cm、東西長45cmを測る。掘り込みは浅い皿状とし部分的に焼土面があり、南方の立ち上がり部分に1石を設けている。

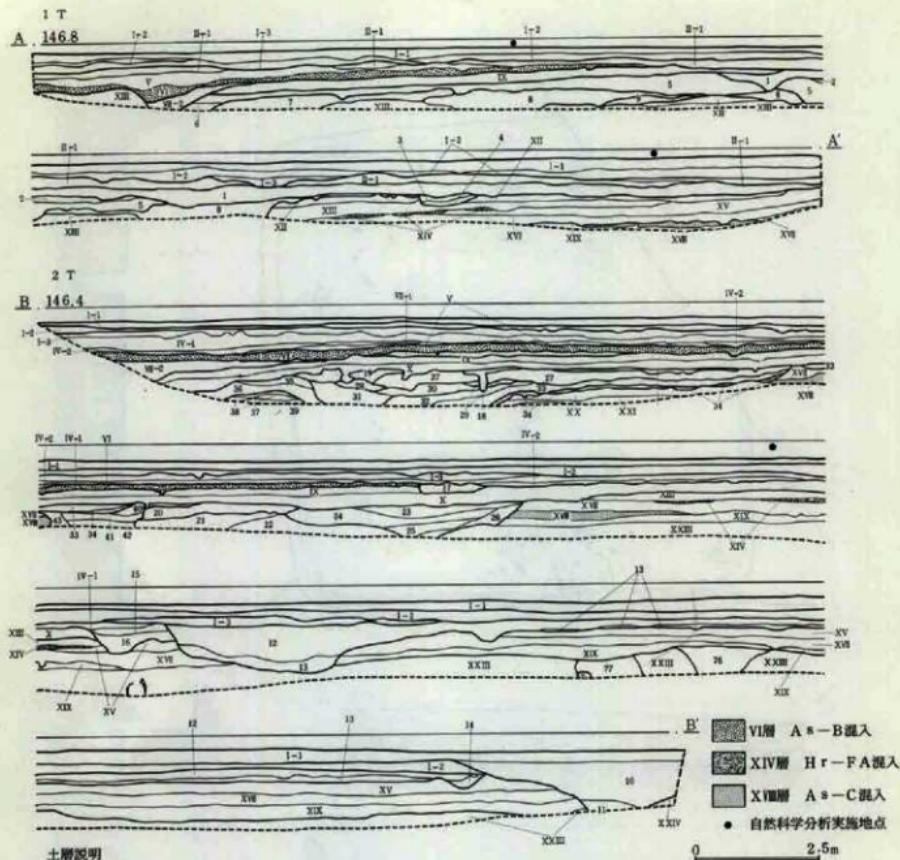
覆土には、住居焼失後に堆積したAs-Cテフラが認められる。遺物は僅かにP10と覆土より古墳時代前期墳の所産と考えられる赤井戸系？の破片計2点が出土した。1は壺形土器の頸部から胴部上半の破片で、外面はハケ整形後に繩文を施し、内面は丁寧に研磨する。色調は淡褐色で、胎土に微砂粒を含む。焼成は良好で硬く締まっている。2は貯蔵穴からの出土した胴部下半の小破片で、ヘラケズリの整形後にへ



1号住居跡土層

- 1 單褐色土 やや砂質
- 2 單褐色土 砂質
- 3 黒褐色土 FPを含む
- 4 黒褐色土 カーボン粒が点在し、FPとC鉱石を含む
- 5 單褐色土 C鉱石を含む
- 6・8 C鉱石
- 7 單褐色土 C鉱石を含む
- 9 單褐色土 腐化材カーボン粒・焼土粒を混入し、C鉱石を含む
- 10 單褐色土 ローム粒を含む
- 11 單褐色土 ロームブロック・ローム粒・カーボン粒・焼土粒を含む





土層説明

基本土層

I層 喻褐色土 耕作土。(I-1層 土壌化が顕著。 I-2層 斑鉄未発達。 I-3層 斑鉄発達。)

II-1層 喻褐色土 層中心にA-s-Kkを挟む。斑鉄の発達。 II-2層 喻褐色土 斑鉄未発達。)

III層 喻褐色砂質土。

IV層 喻褐色土 A-s-Bを混入する。(IV-1層 混入中量。 IV-2層 混入多量。斑鉄発達。)

V層 A-s-Bの再堆積。他の混入物は少ない。

VI層 A-s-Bの成層したテフラ。

VII-1層 黒褐色土 シルトと黒色土のやや亂れたラミナを呈する。 VII-2層 喻褐色土層 シルトと黒色土がラミナを形成。

VIII層 黒褐色土 灰白色軽石(H-r-FA起因)を混入する。

IX層 黒褐色土 斑鉄あり

X-I層 喻褐色土 軽石混入。

X-III層 黒褐色土 土壌化。

X-V層 黒灰色土

X-VII層 喻褐色土 土壌化。

X-IX層 黒褐色土 混入物が少ない。

X-XI層 喻褐色土 シルト混入。

X-XIII層 シルト

X層 黒褐色土 ややシルト質。

X-II層 灰褐色土 シルトを均質に混入。

X-IV層 黒褐色土 H-r-FAを混入。

X-VI層 灰褐色土 シルトを含む。

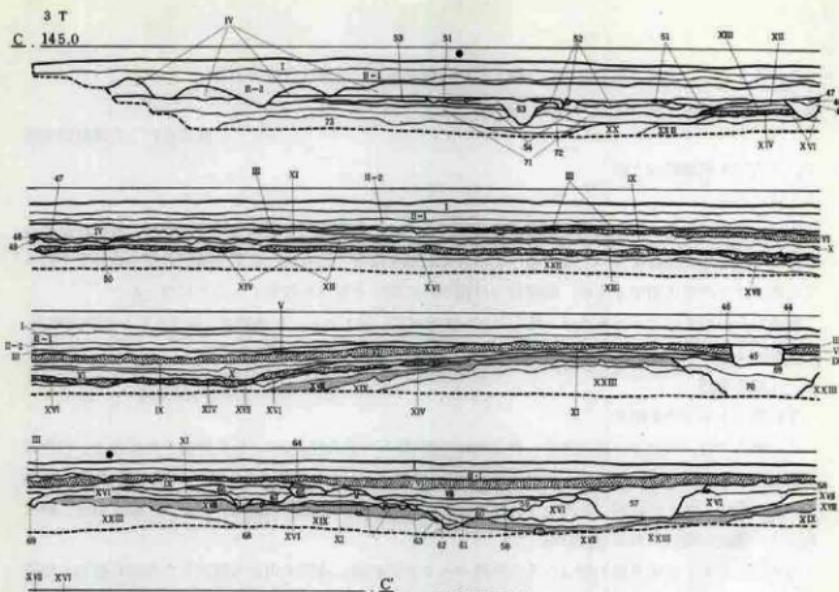
X-VIII層 黒褐色土 A-s-Cを混入。

X-X層 灰色シルト質土

X-XII層 砂質。

X-XIV層 鈍い黄褐色土 ローム質土。

第9図 トレンチ土層図(1)



基本土層外の土層  
 I - 1 形成以前  
 10層 喀褐色土 11層 灰色シルト  
 I - 3 層形成以前  
 12層 黒褐色砂質土 13層 砂 14層 砂質土  
 ラミナを形成 (粒度は上層で小さく下層で大きい)

II - 1 層形成以前  
 44層 砂質土 45層 灰褐色土 46層 灰褐色土 45層に鰐目。

IV - 1 層形成以前  
 15層 喀褐色土 A 8 - B (多量) 深入。

17層 喀褐色土 砂質土混入。 52層 砂質土 53層 喀褐色土 鉄石少量混入。土壌化する。

54層 喀褐色土 H r - F A 深入。洪流水層。

VI層形成以前  
 55層 灰褐色土 やや砂質。 56層 黑褐色土

VII層形成以前  
 57層 砂

58層 黑褐色グライ土層 59層 黑褐色グライ土 粘質。 60層 黑褐色土 61層 砂 62層 砂質 63層 砂

74層 喀褐色土 シルト混入。 75層 砂質。ラミナ形成。

X層形成以前  
 64層 砂 65層 砂質

66層 喀褐色グライ土層 67層 喀褐色土 68層 黑褐色土

69層 砂質 ラミナ形成。 70層 黑褐色土と砂質土のラミナを形成する層。

XI層形成以前  
 1層 喀褐色土 2層 喀褐色土 5層 喀褐色土 6層 黑褐色土 7層 砂質 8層 喀褐色土 深混入。数枚のラミナを形  
 成。洪水。 9層 喀褐色土 3層に鰐目。シルト質の土層を主体とするラミナを形成。

18層 シルト混入灰色土。 19層 シルト混入 (やや斑駁あり) 27層 シルト混入。灰白色輕石混入。 28層 砂質

29層 やや乱れたシルト。 30層 シルトと黑褐色土でラミナを形成する。 31層 砂 32層 微細で粒度の違うシルト。 33層 喀  
 褐色土 シルト混入。灰白色輕石混入。 34層 砂質土 35層 喀褐色土 シルト混入。輕石混入。 36層 シルトと黑褐色土でラ  
 ミナを形成する。 37層 シルト質土。 38層 シルト質土。 39層 砂質土層。

40層 喀褐色土 41層 シルト 42層 砂 43層 シルトと黑褐色土でやや乱れたラミナを形成する。

20層 喀褐色土 輕石多量混入。 21層 喀褐色土 22層 砂 23層 喀褐色土 深混入。斑駁斑点。 24層 喀褐色土

25層 砂 (ラミナ形成)。 26層 砂

XIV層形成以前  
 71層 喀褐色土 鉄石多量混入。斑駁斑点。 72層 砂質灰褐色土 鉄石多量混入。 73層 喀褐色土 鉄石を非常に多量混入する。斑点在。

XIX層形成以前  
 76層 砂 77層 砂質

第10図 トレンチ土層図(2)

ラミガキを施す。色調は褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成は良好である。

### 第3節 上大屋下組遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

#### I. 上大屋下組遺跡の土層

##### 1. はじめに

赤城山南麓に位置する上大屋下組遺跡の発掘調査では、堆積年代の不明な疊層や砂層の堆積が認められた。そこで地質調査を行い土層の層序について記載を行うとともに、テフラ検出分析を合わせて行って示標テフラの降灰層準を求め、砂疊層の堆積年代に関する資料を収集することになった。

調査分析の対象となった地点は、第1トレンチ東地点、第1トレンチ西地点、第2トレンチ中央地点、第3トレンチ中央地点、第3トレンチ西地点の5地点である。

##### 2. 土層の層序

###### (1) 第1トレンチ東地点

この地点では、下位より黒灰色土、黄灰色軽石層(軽石の最大径14mm)、灰色砂層、黒灰色土、白色軽石混じり黄色粗粒火山灰層(軽石の最大径21mm)、白色軽石混じり暗灰色土(軽石の最大径11mm)、灰色土、黒灰色土、黄灰色砂層、灰褐色土、灰色砂層、灰色砂質土、褐灰色砂層、灰色土、暗灰色土、暗灰色作土の連続が認められる(図11)。

これらのうち、黄灰色軽石層は、その特徴から4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石に同定される。またその上位の白色軽石混じり黄色粗粒火山灰層は、その層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名ニツ岳淡川テフラ層に同定される。

###### (2) 第1トレンチ西地点

ここでは、下位より黒褐色土、灰色砂層、暗灰褐色砂質土、灰色砂層、暗灰褐色砂質土、灰色砂層、黒褐色土、成層したテフラ層暗褐色土、暗灰色作土が認められる(図11)。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位よりかすかに成層した黄灰色粗粒火山灰層、桃色粗粒火山灰層、黄色粗粒火山灰層、褐色粗粒火山灰層、桃色細粒火山灰層から構成される。このテフラ層は、その層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラに同定される。

###### (3) 第2トレンチ中央地点

この地点では、黄灰色砂層の上位に、下位より暗灰色砂質土、黒褐色土、黄色軽石に富む暗褐色土(軽石の最大径7mm)、暗褐色土、白色軽石混じり黄色粗粒火山灰(軽石の最大径38mm)、黒褐色土、灰色砂層、暗褐色土、粗粒火山灰に富む褐色砂質土、暗褐色土、褐色土、暗灰色作土の連続が認められる(図11)。

これらのうち、暗褐色土中に多く含まれる黄色軽石は、その特徴からAs-Cに由来すると考えられる。またその上位の白色軽石混じり黄色粗粒火山灰層は、層相からHr-FAに同定される。さらに褐色砂質土中には、As-B起源の粗粒火山灰が多く含まれると考えられる。発掘調査では、黄灰色砂層の上位の暗灰色砂質土の基底部から、縄文時代後期の土器が検出されている。

###### (4) 第3トレンチ中央地点

微高地部に位置するこの地点では、淘汰の良い黄灰色砂層の上位に、下位より暗灰色土砂質土、黄色軽石(最大径7mm)および白色軽石(最大径11mm)に富む暗褐色土、黒褐色土、成層したテフラ層、暗褐色土、青灰色細粒火山灰層、暗褐色土、黄色砂層、暗褐色土、暗灰色作土が認められる(図11)。

これらのうち、成層したテフラ層の下の土層中に含まれる黄色軽石および白色軽石は、岩相から各々 As-C と Hr-FA に由来すると考えられる。また成層したテフラ層は、下位より青灰色細粒火山灰層、桃色粗粒火山灰層、黄灰色粗粒火山灰層、黄色粗粒火山灰層、暗灰色粗粒火山灰層、桃色細粒火山灰層、白色粗粒火山灰層から構成される。このテフラ層は、その層相から As-B に同定される。さらにその上位の青灰色細粒火山灰層は、層位や層相から、1128（大治3）年に浅間火山から噴出した浅間柏川テフラに同定される。

#### （5）第3トレンチ西地点

低地部に位置するこの地点では、亜円礫層（礫の最大径44mm）の上位に、下位より灰色砂層、黄灰色軽石混じり黒灰色土（軽石の最大径7mm）、白色軽石混じり灰色土（軽石の最大径10mm）、暗灰色土、灰色砂層、暗灰色土、黒褐色土、黄灰色粗粒火山灰に富む暗褐色砂質土、暗褐色砂質土、暗褐色土、暗灰色作土が認められる（図11）。

これらのうち、黄色軽石および白色軽石は、岩相から各々 As-C と Hr-FA に由来すると考えられる。また黄灰色粗粒火山灰は、その岩相から As-B に由来すると考えられる。

### 3. 屈折率測定

#### （1）測定試料と測定方法

第3トレンチ中央地点において As-Kk の上位に認められた灰色細粒火山灰について、その起源を探るために、位相差法により屈折率の測定を行った。

#### （2）測定結果

屈折率測定の結果を下表に示す。第3トレンチ中央地点の試料番号1には、重鉱物として、斜方輝石のほか単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率（ $\gamma$ ）は、1.706-1.711である。これらのことから、このテフラは浅間火山起源と考えられる。

このテフラは、その層位から1281（弘安4）年の噴火に伴って噴出した可能性が考えられよう。

第3トレンチ中央地点の屈折率測定結果

試料	重鉱物	斜方輝石の屈折率（ $\gamma$ ）
1	opx > cpx	1.706-1.711

屈折率の測定は、位相差法（新井、1972）による。opx：斜方輝石、cpx：単斜輝石。

### 4. 小結

上大屋下組遺跡において、地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果、下位より浅間C軽石（As-C, 4世紀中葉）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）、浅間柏川テフラ（As-Kk, 1128年）などの示標テフラの降灰層準を把握することができた。またAs-Kkの上位に1281（弘安4）年に浅間火山から噴出した可能性のあるテフラ層も検出された。なおHr-FAとAs-Bの間に層準にある洪水堆積物については、その層位から818（弘仁9）年の地震に起因して発生した洪水の可能性が考えられる。

#### 文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.

新井房夫（1979）関東地方北西部の绳文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.

町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.

- 能登 健・内田憲治・早田 魁 (1990) 赤城山南麓の歴史地震。信濃, 42, 755-772.
- 坂口 一 (1986) 桑名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 魁 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.

## II. 上大屋下組遺跡におけるプラント・オパール分析

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である。

### 2. 試料

調査地点は、第1トレント東地点、第1トレント西地点、第2トレント中央地点、第3トレント中央地点の4地点である。試料は、As-Bの上層からAs-Cの下層までの層準について計16点が採取された。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図（図12）に示す。

### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法をもとに、次の手順で行った。

#### 1) 試料の絶乾 (105°C・24時間)

#### 2) 試料約1gを秤量、ガラスピース添加 (直径約40μm・約0.02g)

\*電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

#### 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理

#### 4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)

#### 5) 沈底法による微粒子 (20μm以下) 除去、乾燥

#### 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

#### 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5} \text{ g}$ ）をかけて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属型（ススキ）は1.24、タケア科（ネザサ節）は0.48である。

### 4. 分析結果

水田跡（稻作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケア科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表3および図12に示した。写真図版（PL-2）に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

### 5. 稲作跡の検討

水田跡の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、

群馬県内では密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

#### (1) 第1トレンチ東地点

Hr-FA直下層(試料1)とAs-C直下層(試料2)について分析を行った。その結果、Hr-FA直下層(試料1)からイネが検出された。密度は800個/gと低い値である。このことから、同層で稻作が行われていた可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の可能性も否定できない。

#### (2) 第1トレンチ西地点

As-B直下層(試料1)について分析を行った。その結果、イネが検出されたが、密度は1,500個/gと比較的低い値である。ただし、同層は直上をAs-B層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稻作が行われていた可能性が考えられる。

#### (3) 第2トレンチ中央地点

As-B直下層(試料1)からAs-Cの下層(試料6)までの層準について分析を行った。その結果、As-B直下層(試料1)とその下層(試料2)からイネが検出された。このうち、後者では密度が3,000個/gと高い値である。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。前者では密度が1,500個/gと比較的低いことから、稻作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の可能性も否定できない。

#### (4) 第3トレンチ中央地点

As-Kkの上層(試料1)からAs-Cの下層(試料7)までの層準について分析を行った。その結果、As-Kkの上層(試料1~3)およびAs-B直下層(試料5)からイネが検出された。このうち、As-Kkの上層(試料1)とAs-B直下層(試料5)では、密度が3,000個/gと高い値である。したがって、これらの層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層準では密度が比較的低いことから、稻作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の可能性も否定できない。

### 6.まとめ

プラント・オバール分析の結果、第2トレンチ中央地点のAs-B直下層、および第3トレンチ中央地点のAs-Kk上層とAs-B直下層では、イネが多量に検出され、それぞれ稻作が行われていた可能性が高いと判断された。また、第1トレンチ東地点のHr-FA直下層、第1トレンチ西地点と第2トレンチ中央地点のAs-B直下層、第3トレンチ中央地点のAs-Kk直上層などでも、稻作の可能性が認められた。

#### 参考文献

藤原宏志(1976)プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)ー数種イネ科栽培植物の粒微細標本と定量分析法ー。考古学と自然科学、9、p.15-29。

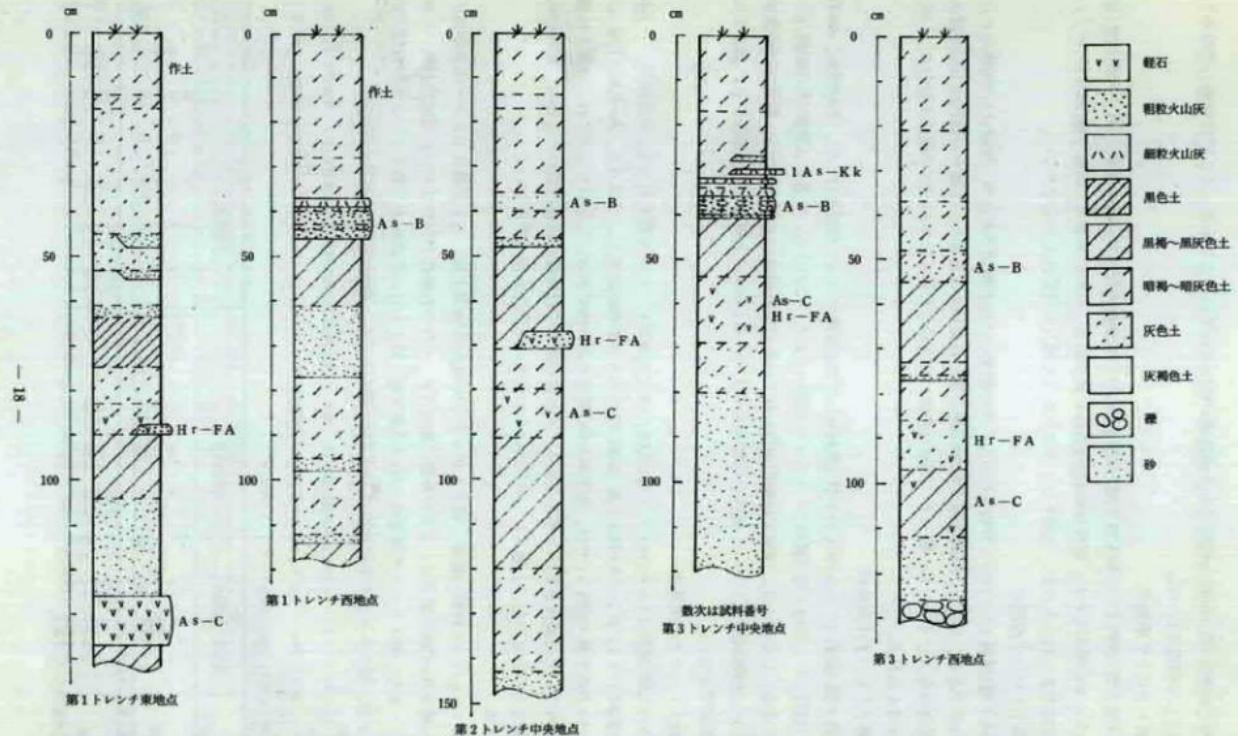
藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オバール分析法の基礎的研究(5)ープラント・オバール分析による水田址の探査ー。考古学と自然科学、17、p.73-85。

表3 上大塙水田遺構におけるプラント・オバール分析結果

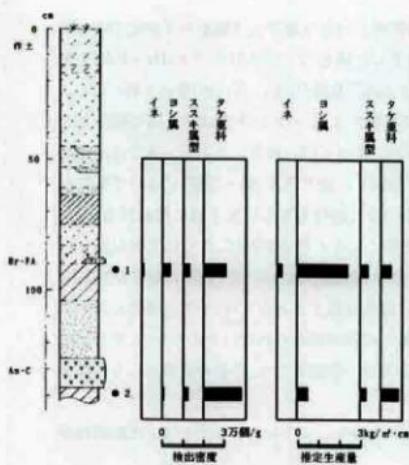
地質密度(単位: ×100個/g)

分類群\資料	1トレンチ						2トレンチ						3トレンチ						
	1	2	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4
イネ	8		15	15	30				30	8	23					30			
ヨシ属	38	8	8	8	53	23	7	8	23	8	30	53	68	15	8				
ススキ属	31	23	8	22	8	15	8		23	15	30					15	23		
タケ属	107	182	107	165	99	105	122	149	151	53	153	76	23	106	92	151			
地質密度(単位: kg/m <sup>3</sup> ・cm <sup>-3</sup> )	0.23		0.45	0.44	0.89				0.89	0.22	0.67					0.89			
イネ	2.42	0.48	0.48	0.48	3.32	1.44	0.47	0.48	1.44	0.46	1.91	3.37	4.31	0.97	0.48				
ヨシ属	0.38	6.28	0.1	0.28	0.09	0.19	0.09		0.28	0.19	0.37		0.19	0.29					
ススキ属	0.51	0.67	0.52	0.79	0.47	0.51	0.59	0.72	0.73	0.25	0.73	0.36	0.11	0.51	0.44	0.72			

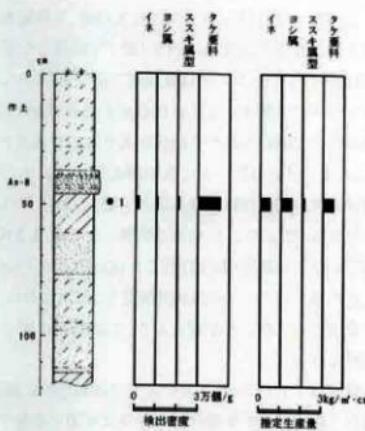
※資料の記述を1.0として算出。



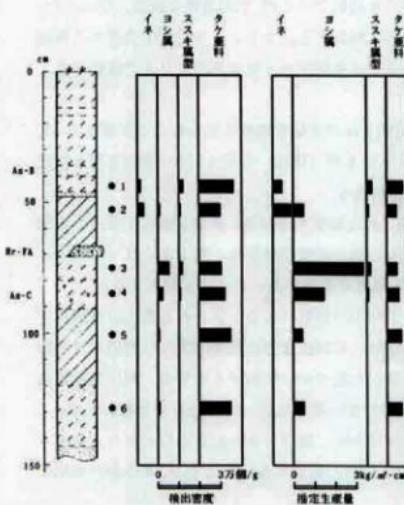
第11図 トレンチ土層状図



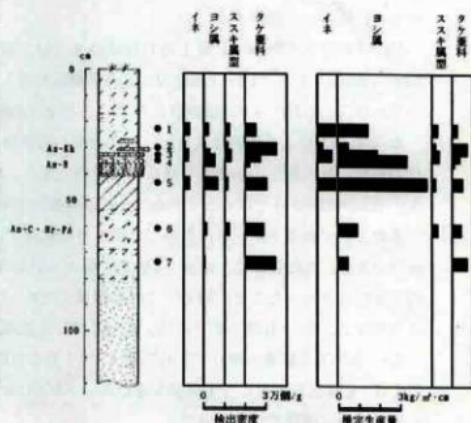
第1トレンチ東地点



第1トレンチ西地点



第2トレンチ東地点中央



第3トレンチ中央地点

第12図 プラント・オパール分析結果

#### 第4節 遺跡周辺の古環境復元とまとめ

トレンチにおいて確認されたテフラからその形成時期の把握が可能な層序は下層から4世紀中頃に降下した浅間C軽石(As-C)を含むXVII層、6世紀初頭に降下した榛名ニツ岳渋川テフラ(Hr-FA)を混入するXIV層、天仁元年(1108年)に降下し成層した層順を呈する浅間B軽石(As-B)のVI層の3層がある。

XVII層は、1トレンチでは東端部下層で確認され、水平に堆積する。2トレンチでは中央部で確認されやはり水平に堆積すると思われるが中央部で後代の掘り込みによって切られる。3トレンチでは東端から中央部まで確認されやや起伏があるものの西にむかって傾斜し、掘り込み(69・70層)によって切られる。この掘り込みは明らかにXVI層を切っており(XIV層を切る可能性もある)、XI層に被われる。形成時期は6世紀初頭以降1108年以前、VII層の形成が818年の地震によるものであれば、さらにそれ以前としての時間幅が想定できる。地震の影響としては、XXIII層中に噴砂が確認されるが、発生時期は特定できない。

浅間C軽石の降灰前の環境(これは台地上の1号住居跡の構築時期でもある)は、やや土壤化した黒褐色土が堆積することから比較的の安定し、植生においてヨシ属の卓越が認められないところから、やや乾燥した環境であったことが窺えよう。この面下においては水田遺構の確認もなく、分析の結果からも稲作の可能性は低い。

XIV層は1トレンチ・2トレンチでは断片的に確認される。しかし、3トレンチにおいて、比較的良好に残存し中央部でやや堆むもののはば平坦に堆積する。

4世紀中葉から6世紀初頭のHr-FA降下時までは河川の影響によるとと思われる砂質土(XV・XVI層)及び黒(暗)褐色土(XVII層)の堆積が認められ、植生におけるヨシ属の卓越からも湿润な環境にあったことが窺える。また、降下直前には稲作の可能性が低いながらも指摘できるが、水田遺構の確認はなかった。

VI層は1トレンチでは西端よりで確認され、西に向かって傾斜する。2トレンチでは中央部から西端部まで確認され、やや西に向かって傾斜する。3トレンチでは東端部から中央部西よりまで確認でき、やや西に向かって傾斜する。

Hr-FA降下以降As-B降下の(1108年)までは、前時期とほぼ同様な環境にあったことが窺える(XIIIからVII層)。ただ、Hr-FA起因の灰白色軽石を混入する洪水層(VIII層)の発生時期・原因及び6世紀中葉に降灰したHr-FPが確認されてないことなどの問題が残る。

As-B降下による影響は大きく、その後軽石の再堆積(最大層厚30cm前後)および軽石を混入する層序の形成が最大層厚50cm前後を測るほどであった。これらの層序の堆積期間は上層であるII-1層中にAs-Kkが確認されているところから、約20年間における急激な変化であったことが窺えよう。

また、いずれのトレンチにおいても西よりの地域では、河川の影響によると思われる数次の堆積物が確認できる。これらのことから、4世紀中葉から1108年のAs-B降灰までは低地西よりは河川による影響が非常に強かったことが窺え、この影響域に向かって東から緩やかに傾斜する地形が、河川堆積物により埋没し、As-B降下までには、低地における比高差は少ない地形になっていたものと思われる。

As-B降下の影響が薄れてから現在まで(IからIII層形成時期)、数次の水田經營が行われたであろうことは、土壤化し積層した土層状況及びAs-Kk下における分析の結果からは窺えるが、明らかに水田といえる遺構は確認できなかった。

1号住居跡が構築された時期の水田遺構の検出はなく、またその可能性も低いところから、当該期における生産基盤は別な空間に求めるを得ない。また、稲作經營の可能性が指摘された時期については、今後周辺の発掘調査実施における留意事項としておきたい。(藤坂)

## 第IV章 上大屋中組遺跡

遺跡周辺は、北方から続く緩慢な傾斜面を呈する低台地に、複雑に田圃と桑園が織り成している。本遺跡は、南西方向に向かう台地上にあって東西と南方が田圃に囲まれ、あたかも浮き島状に桑園となっている。

調査区は、標高156.00mほどを頂点として南西方向に緩やかに移行し、中央やや北より付近で僅かな傾斜変換部が見られる。この部分から南方に遺構が広がって検出され、その広がりは西方で調査された上大屋天王山遺跡に続くと考えられる。

検出された遺構は、中世の構築と考えられる竪穴遺構・土坑・井戸跡・掘立柱建物跡と近現代に使用された水路と田園である。

出土遺物は、常滑焼の大甕、瀬戸焼の鉢・天目茶碗、瓦片、捏鉢片、かわらけ片、石製品、金属製品と大量の一括出土の古銭等がある。

### 検出された遺構と遺物

#### 1号竪穴遺構（第15図）

調査区の中央やや北寄りL4グリットポイントの周囲に検出され、標高155.30m前後の平坦部に構築されている。東方には1.3m程離れて2号竪穴遺構があり、この間に2・3号土坑が接する。西方には1号土坑、南方には柱穴群と1号井戸が配されている。

形状は、東西に長い方形の主室部と南辺の中央やや東寄りに入り口部と考えられる張り出しを付す。規模は、直線的な辺で構成される主室部の東辺2.7m、西辺2.6m、南北辺3.7m、入り口部の張り出しは1.4m、幅95cmを測る。入り口の主軸はN-14°-Wにとる。

壁面は垂直気味とし、壁高は43~67cmが残存する。東辺と北辺の壁面にはオオバーハングする部分がある。床面は全体に硬化している。入り口部からの緩やかな傾斜面からほぼ平坦な主室部に移行する。入り口の東辺と主室部の南東隅にかけて、30cm程の段差を設けたテラスが付帯されている。

#### 1号竪穴遺構出土遺物（第16~39図）

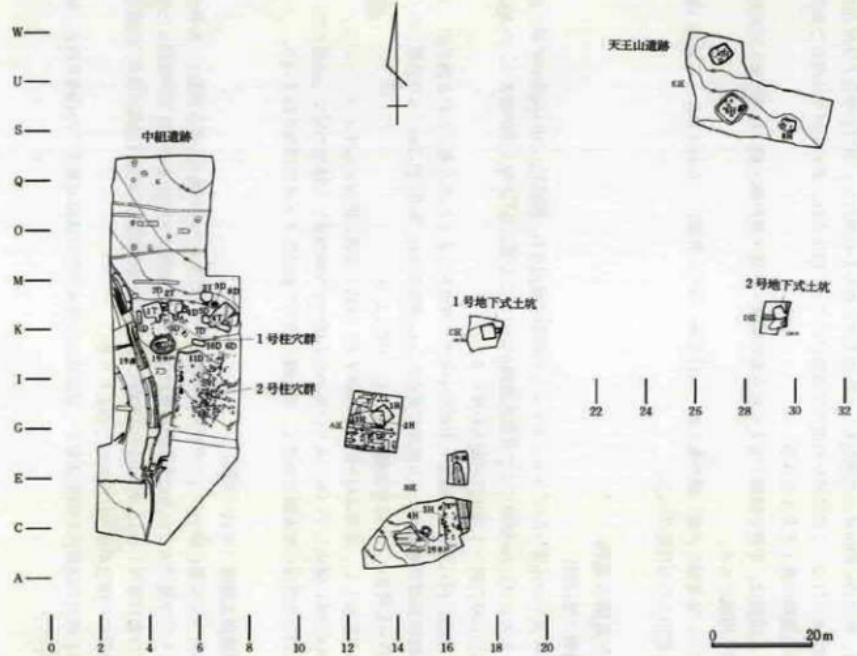
入り口部から主室部に僅かに入った所から南壁沿いに942枚の古銭がある。湧水が酷く、水中ポンプを稼働しながらの作業であった為に多少の紛失が考えられ、総数は千枚前後の一貫文が残存した可能性がある。その分布は東西2.2m、南北65cmの範囲で、1枚から最高25枚の縁錢（縁錢が残存）状態で出土した。この状況から縁錢がばらけたものと考えられる。

銭種は最古銭名が唐時代の開元通寶から最新銭名は南宋時代の咸淳元寶までの43種を数え、模鋳銭を含んでいる。

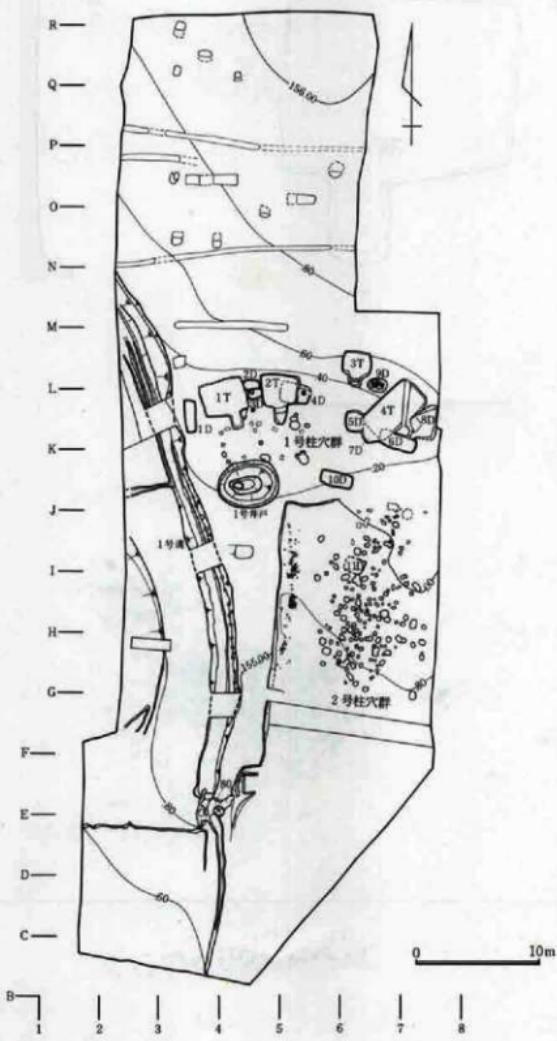
#### 2号竪穴遺構（第40図）

1号竪穴遺構の東方、L5グリットポイントの周囲に検出され、1号竪穴遺構と同様に標高155.30m前後の平坦部に構築されている。東辺で4号土坑と重複し、西辺に2号・3号土坑が接する。4号土坑との新旧関係は、本竪穴が古い。

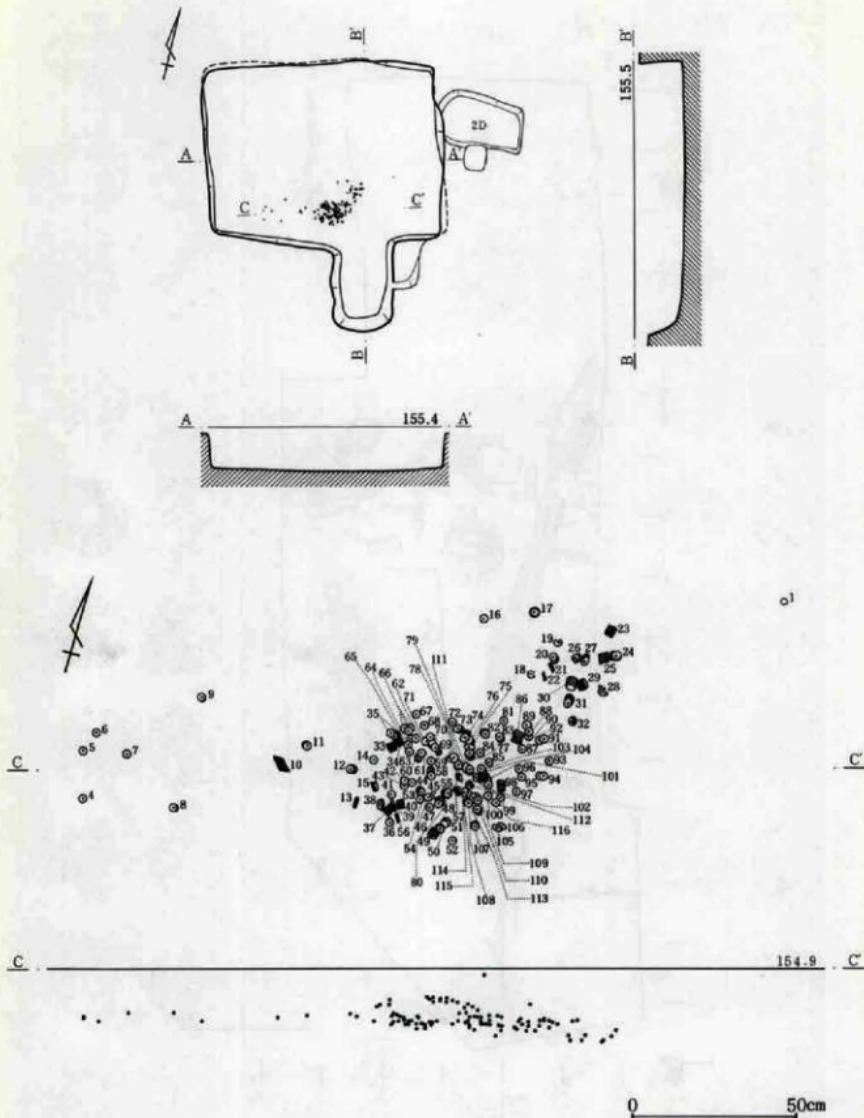
形状は、東西に長い逆台形状を呈する主室部と南辺の中央部にU字形の入り口部張り出しを付す羽子



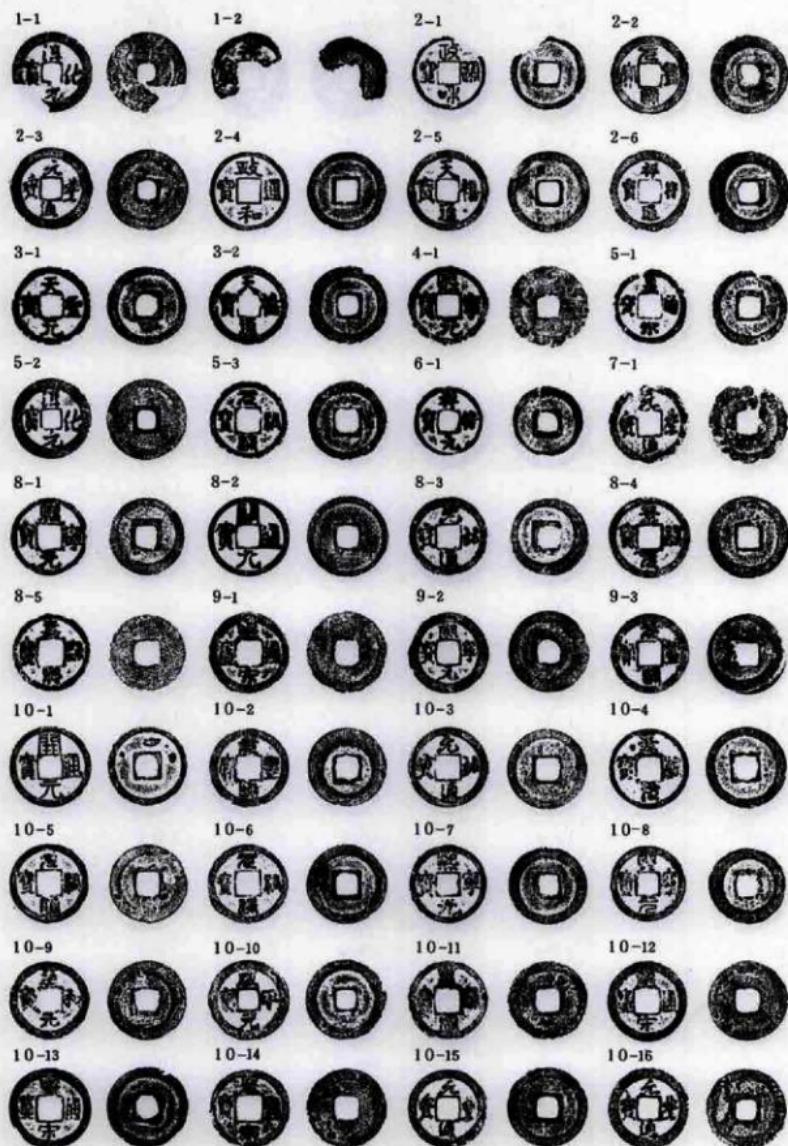
第13図 上大殿中組・天王山遺跡全体図



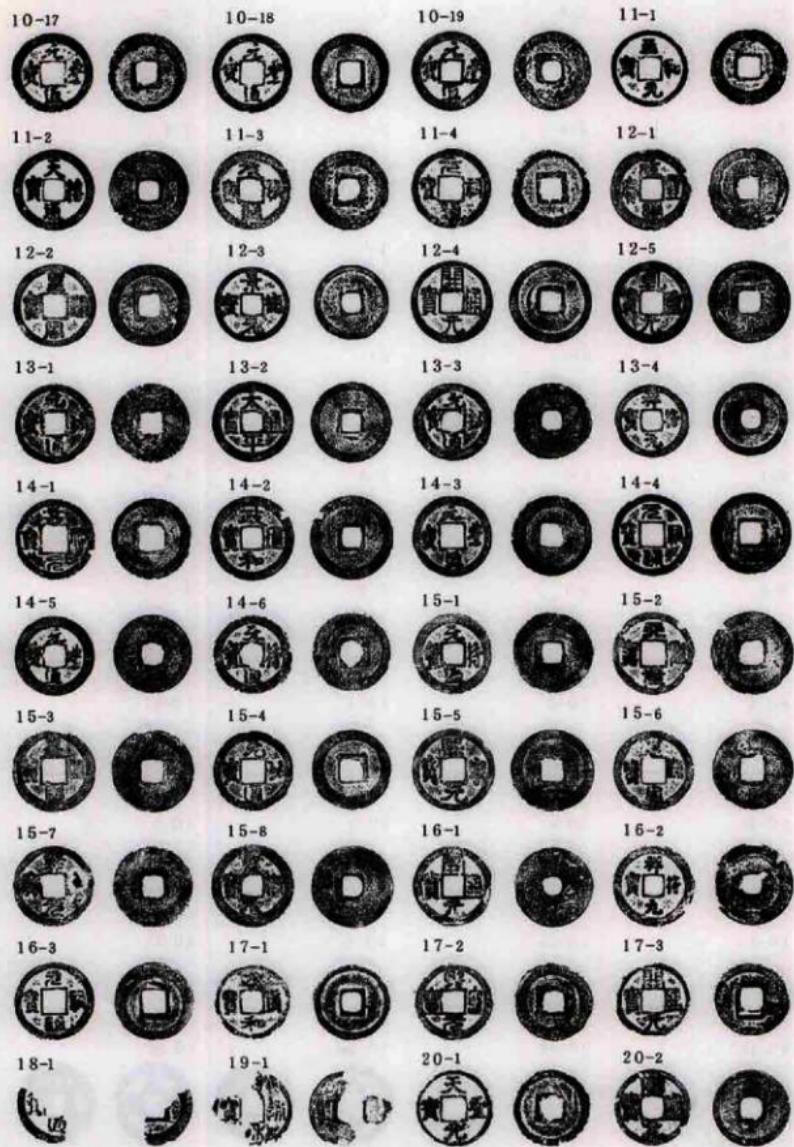
第14図 上大量中組遺跡全体図



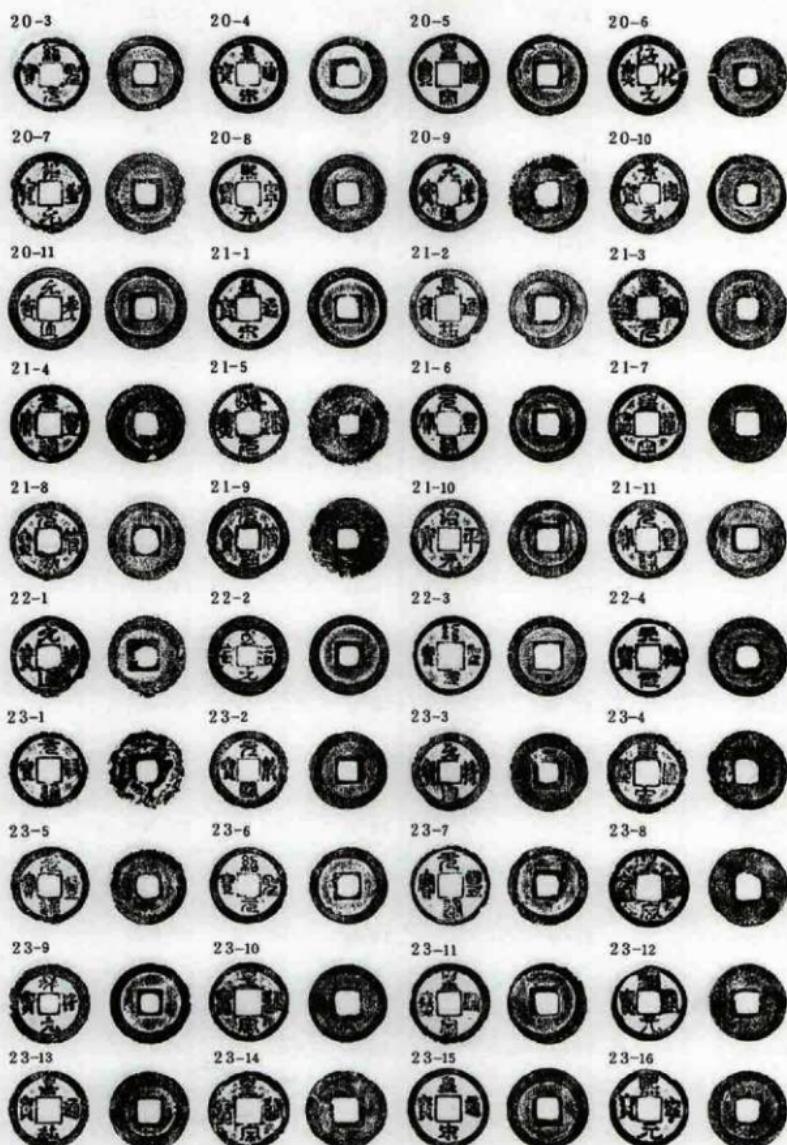
第15圖 1号竖穴遺構・古鉢出土分布図



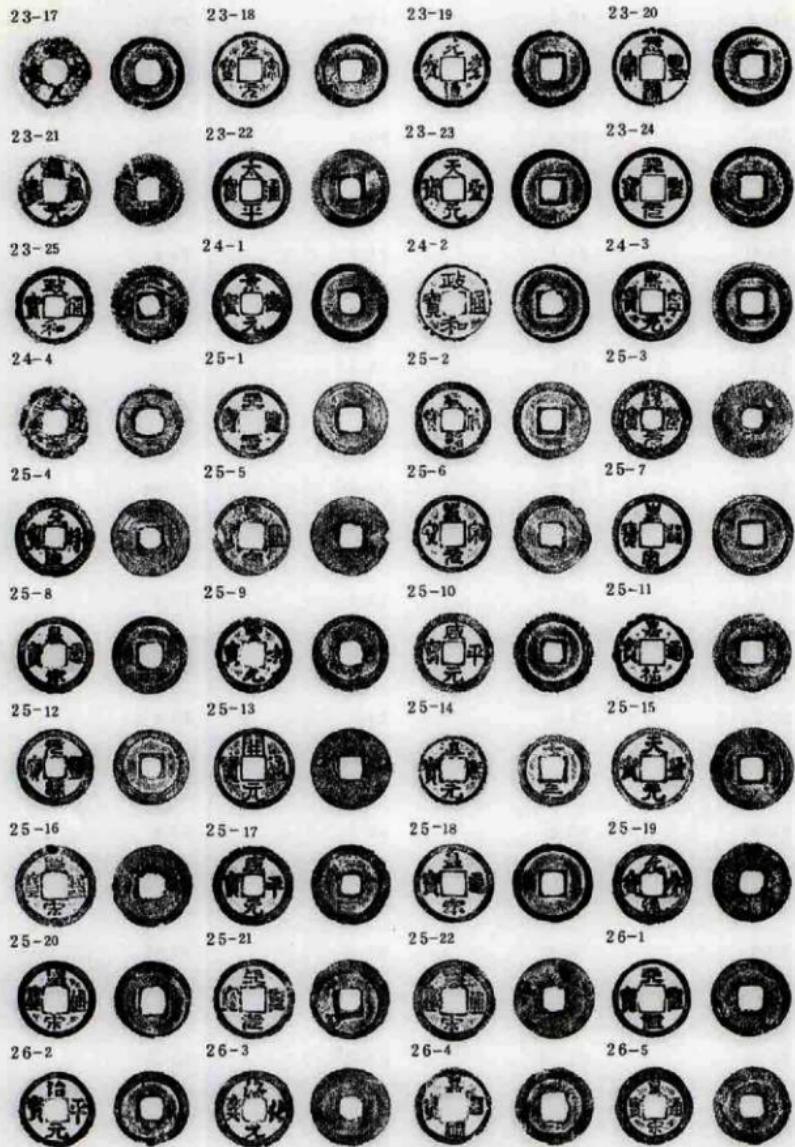
第16圖 1号竖穴道構出土古錢（1）



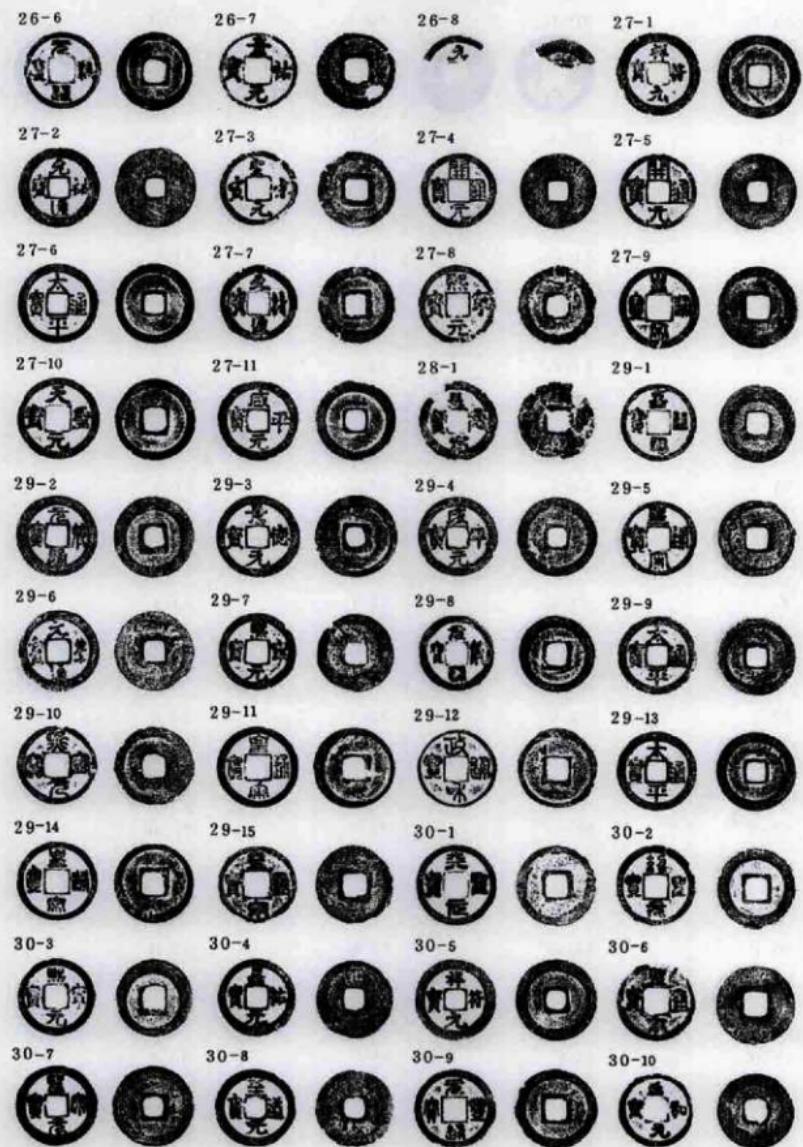
第17圖 1号竪穴遺構出土古錢（2）



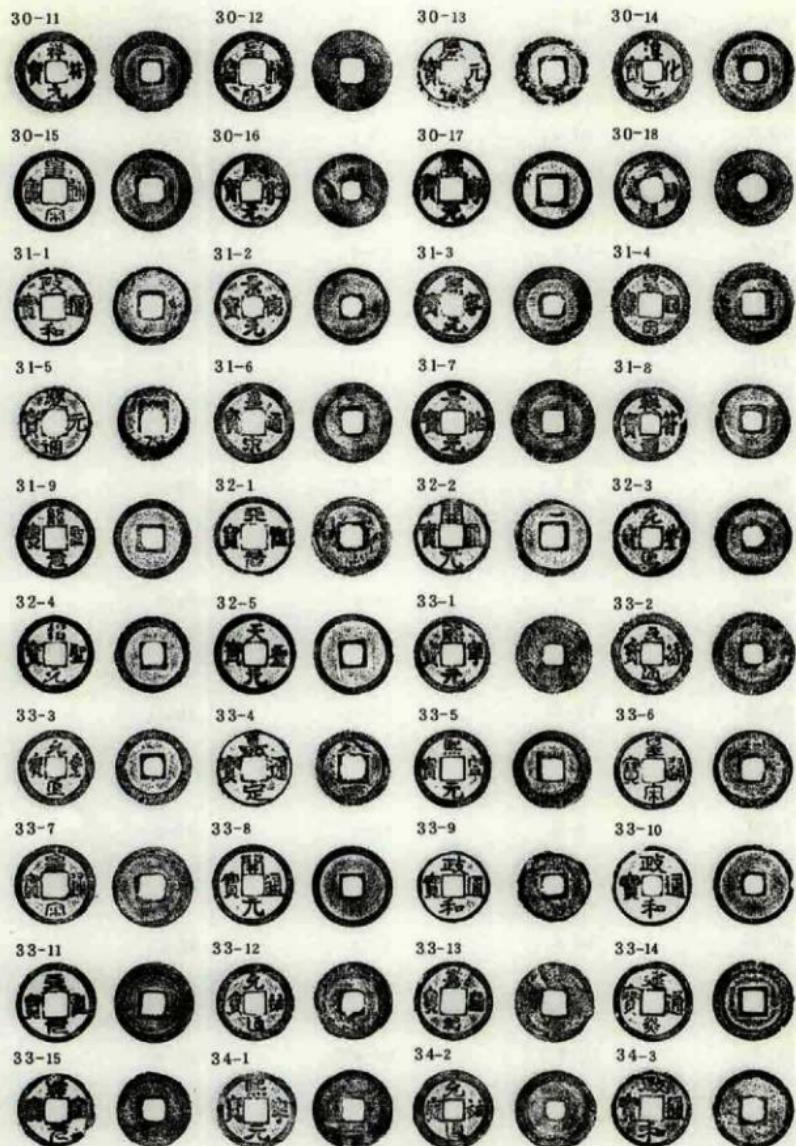
第18図 1号竪穴遺構出土古銭 (3)



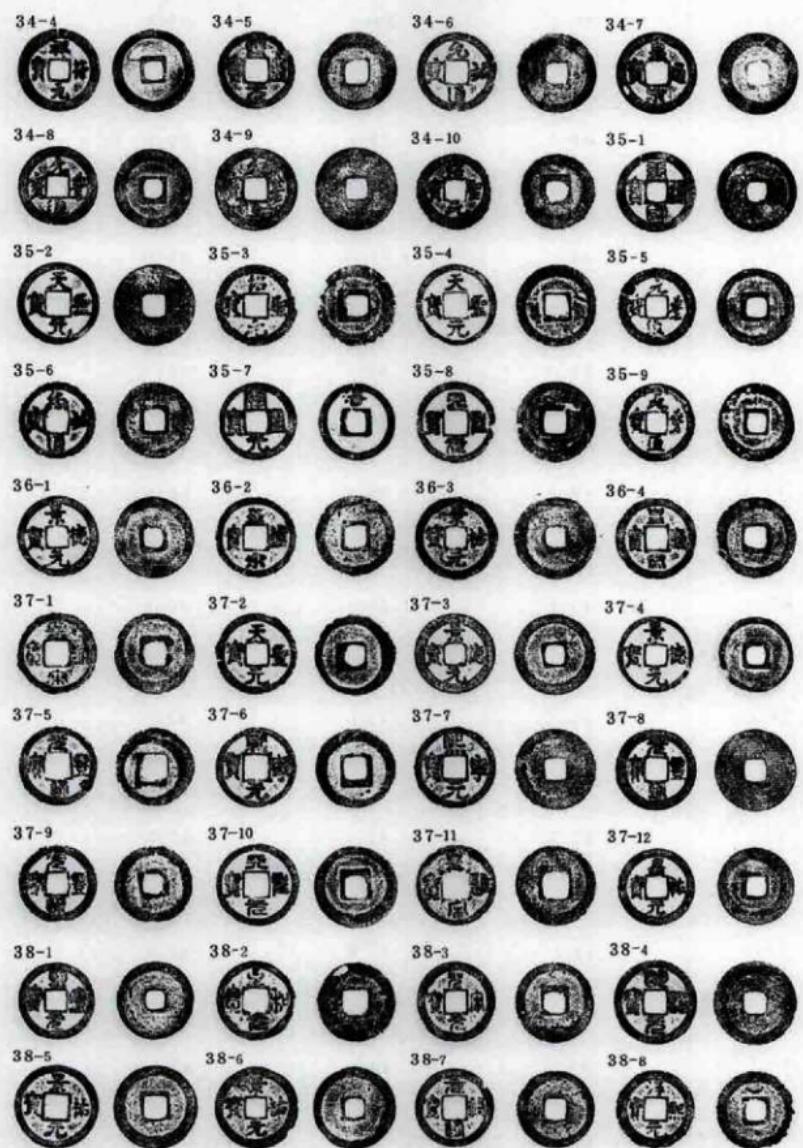
第19图 1号竖穴道桥出土古钱 (4)



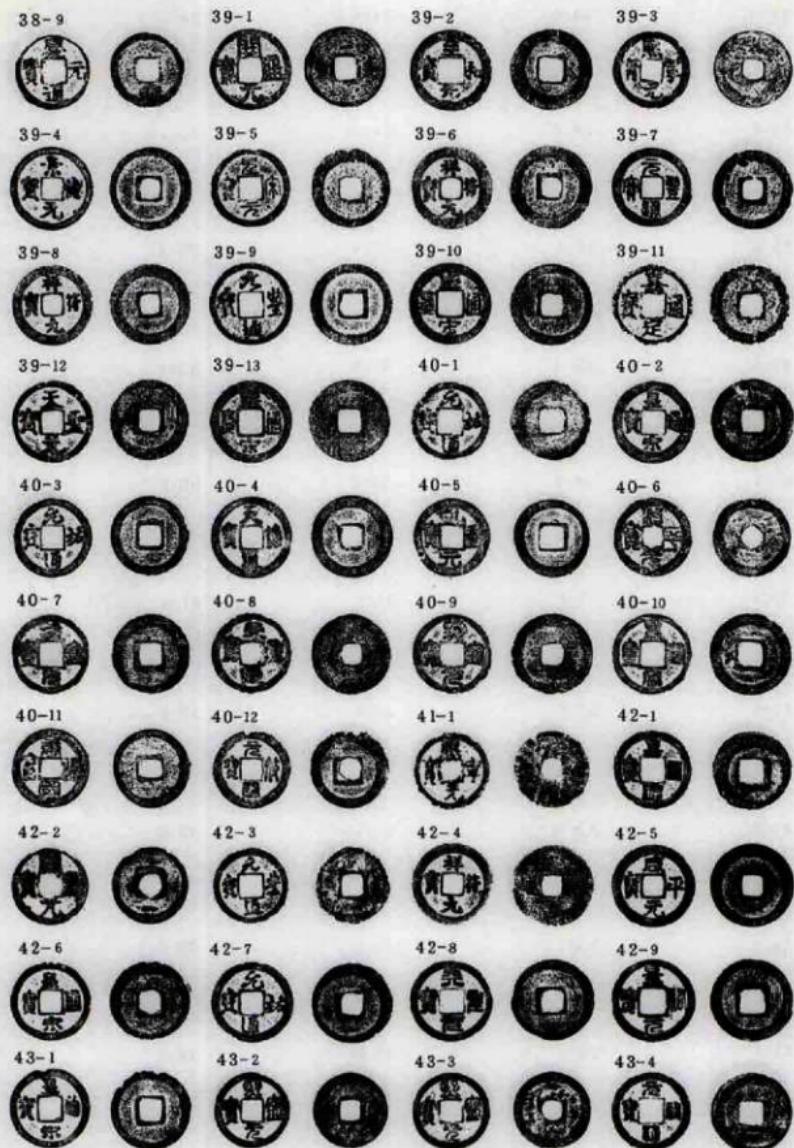
第20図 1号整穴遣横出土古銭 (5)



第21図 1号墳穴道構出土古銭（6）



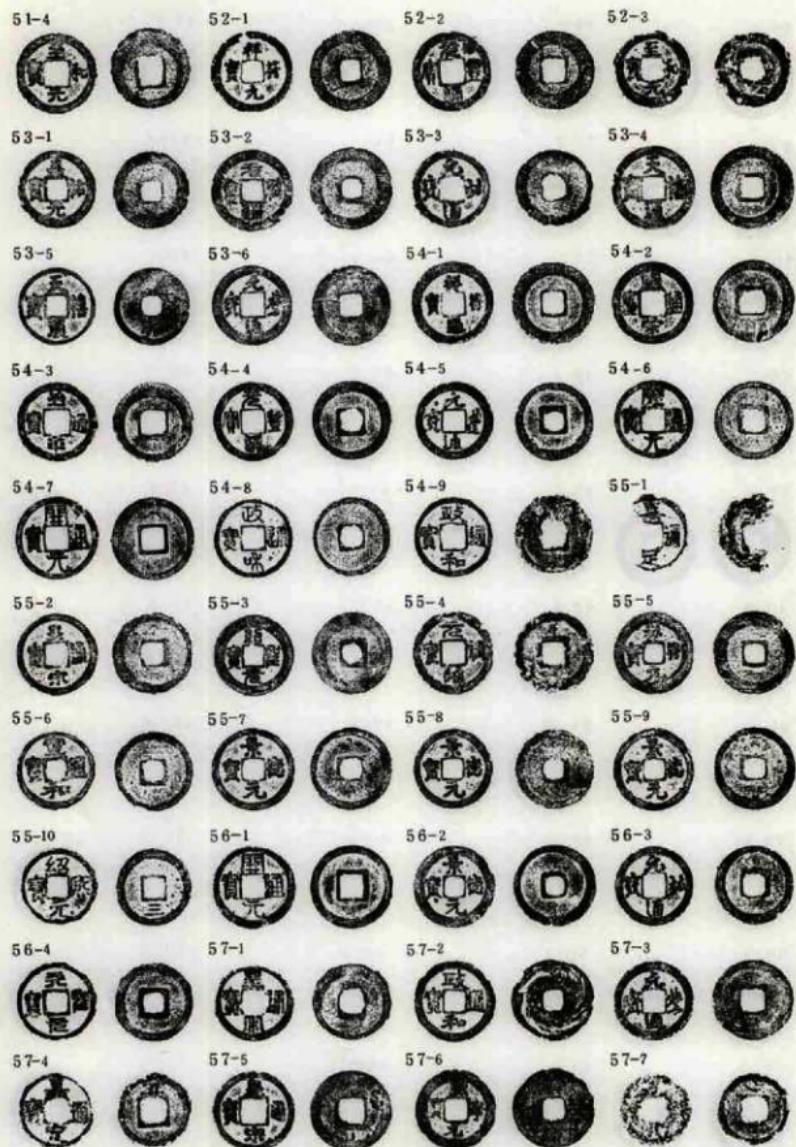
第22図 1号竖穴造構出土古銭 (7)



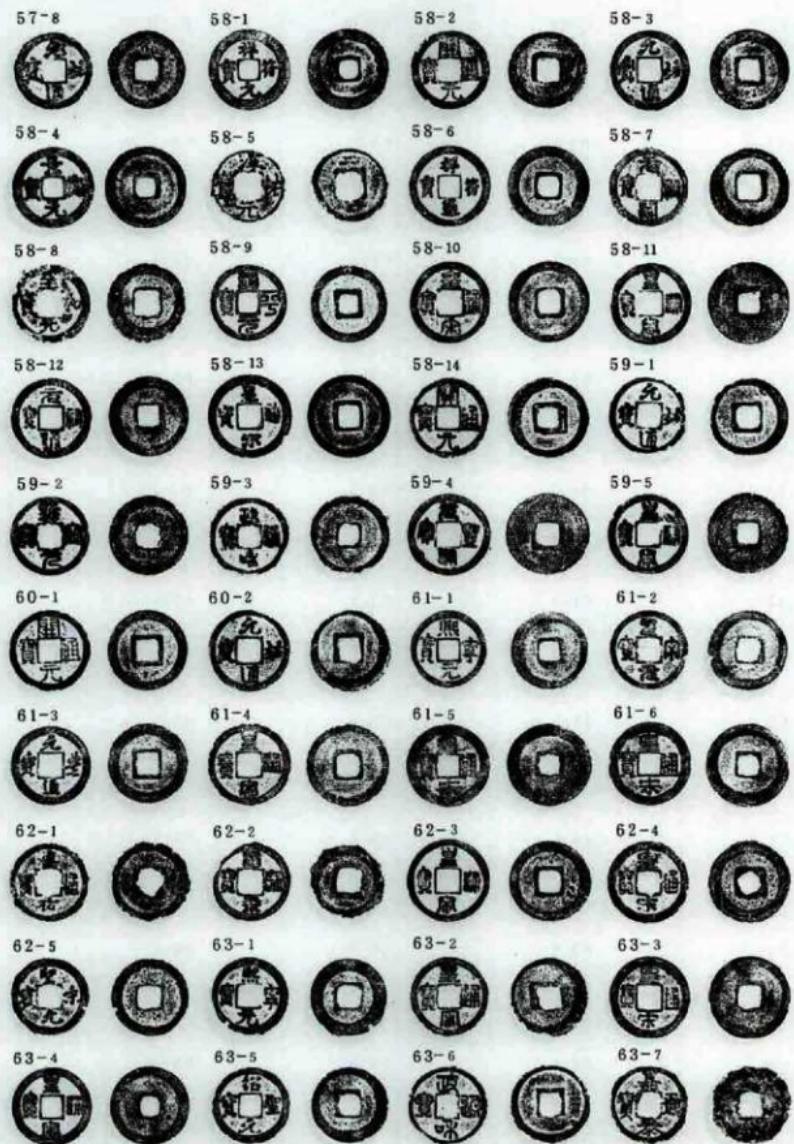
第23圖 1號墓穴遺構出土古錢（8）



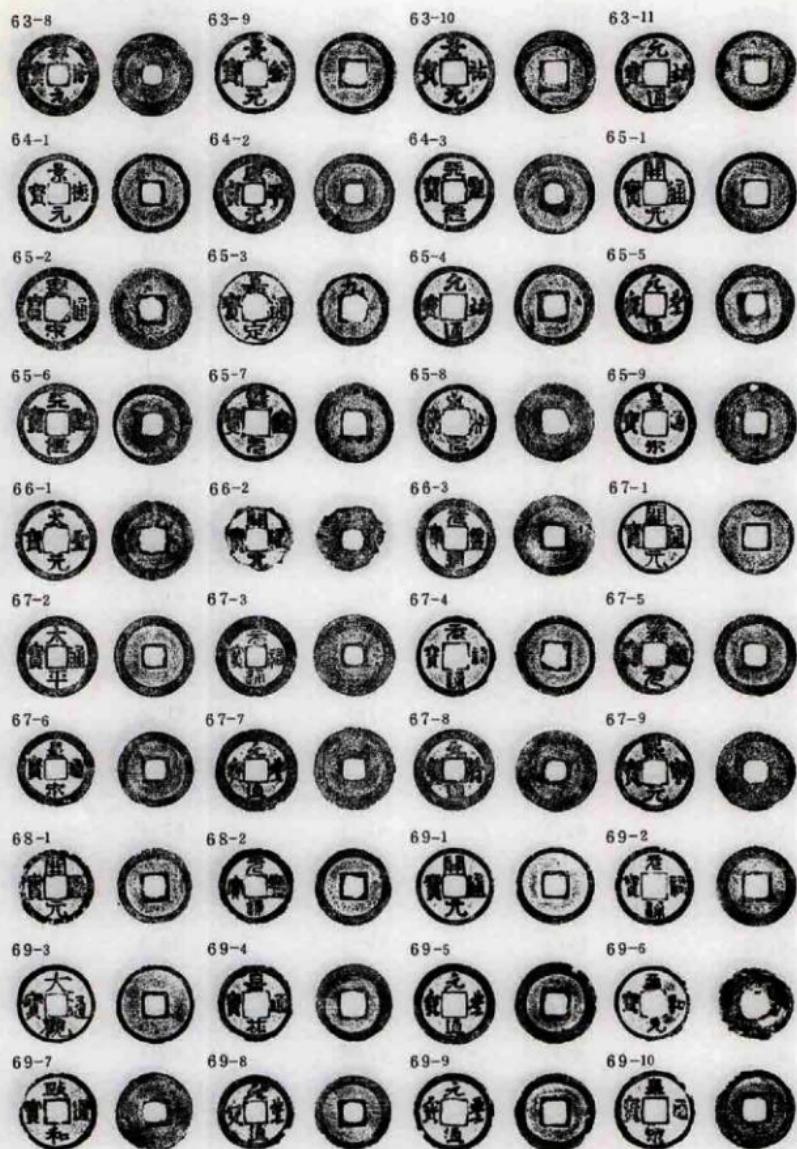
第24図 1号竖穴墓出土古銭 (9)



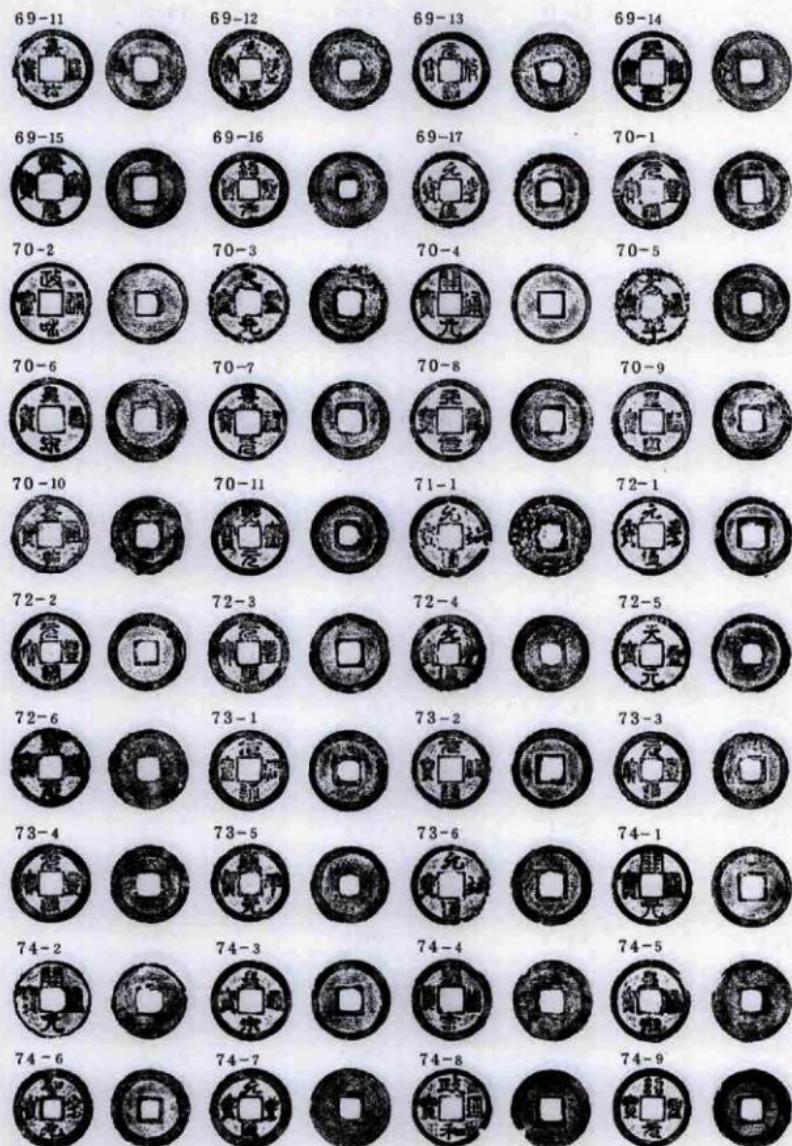
第25圖 1号竖穴道構出土古錢 (10)



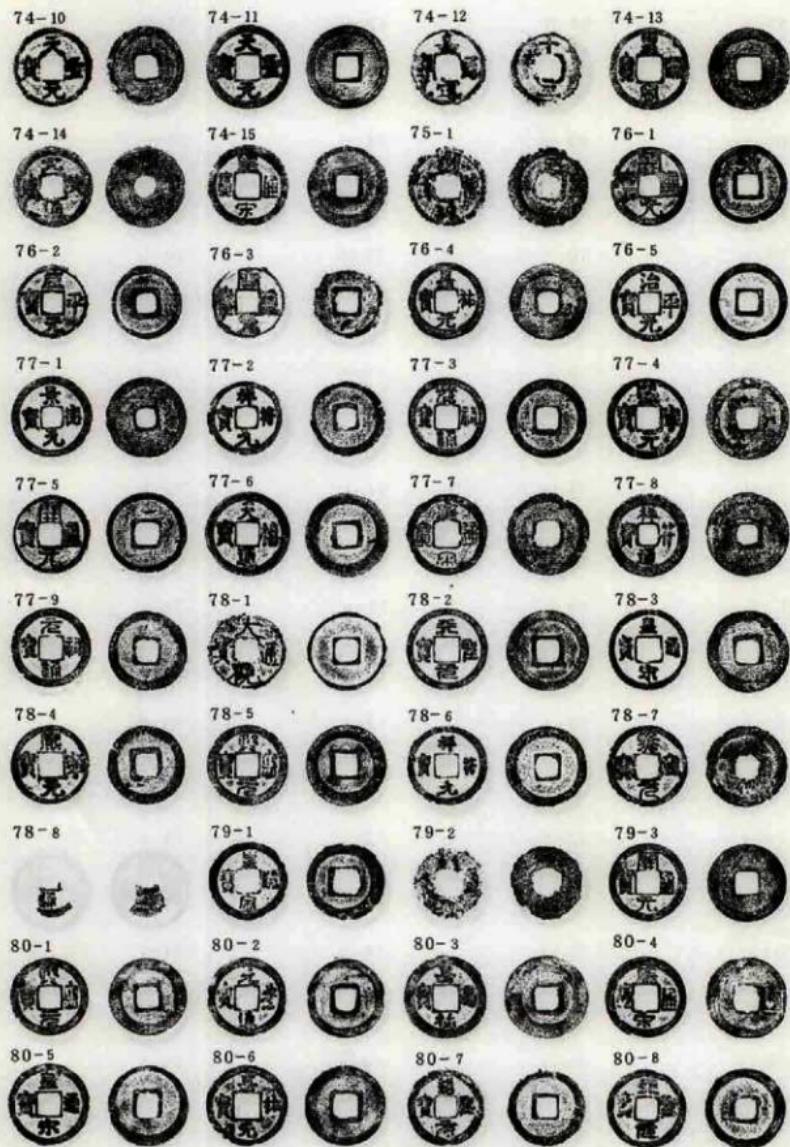
第26圖 1號竖穴道構出土古錢 (11)



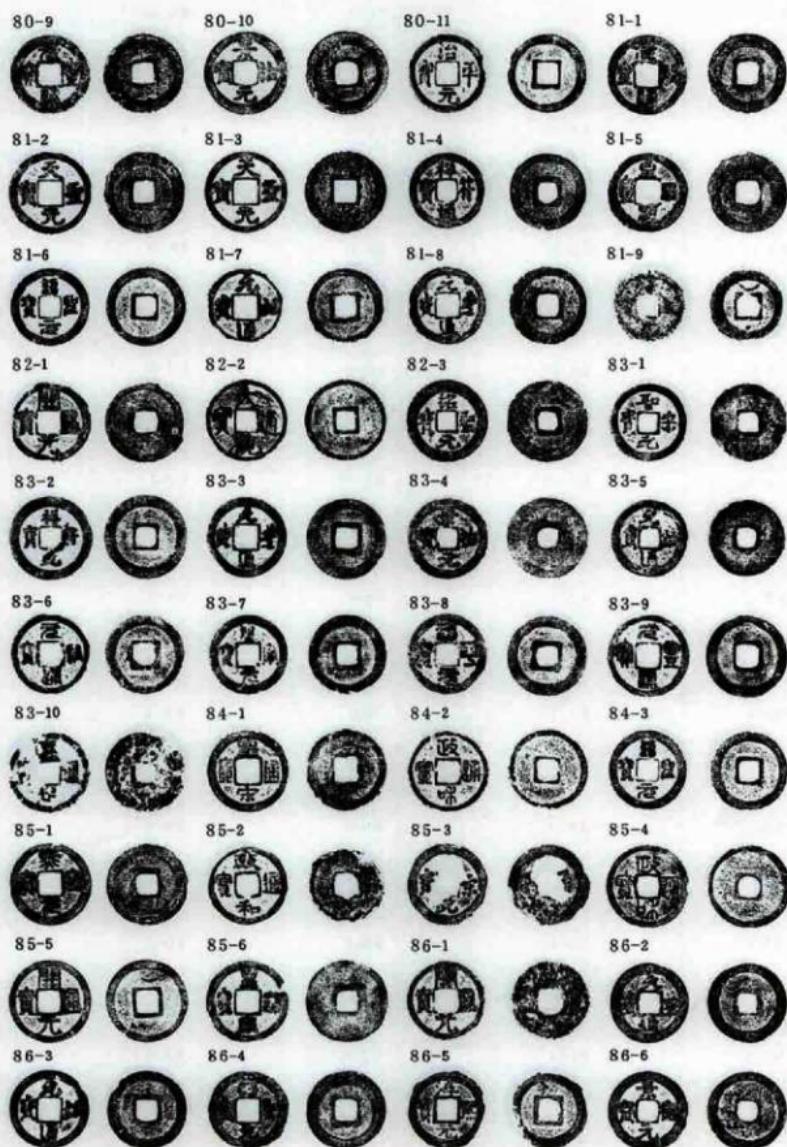
第27圖 1號整穴道構出土古錢 (12)



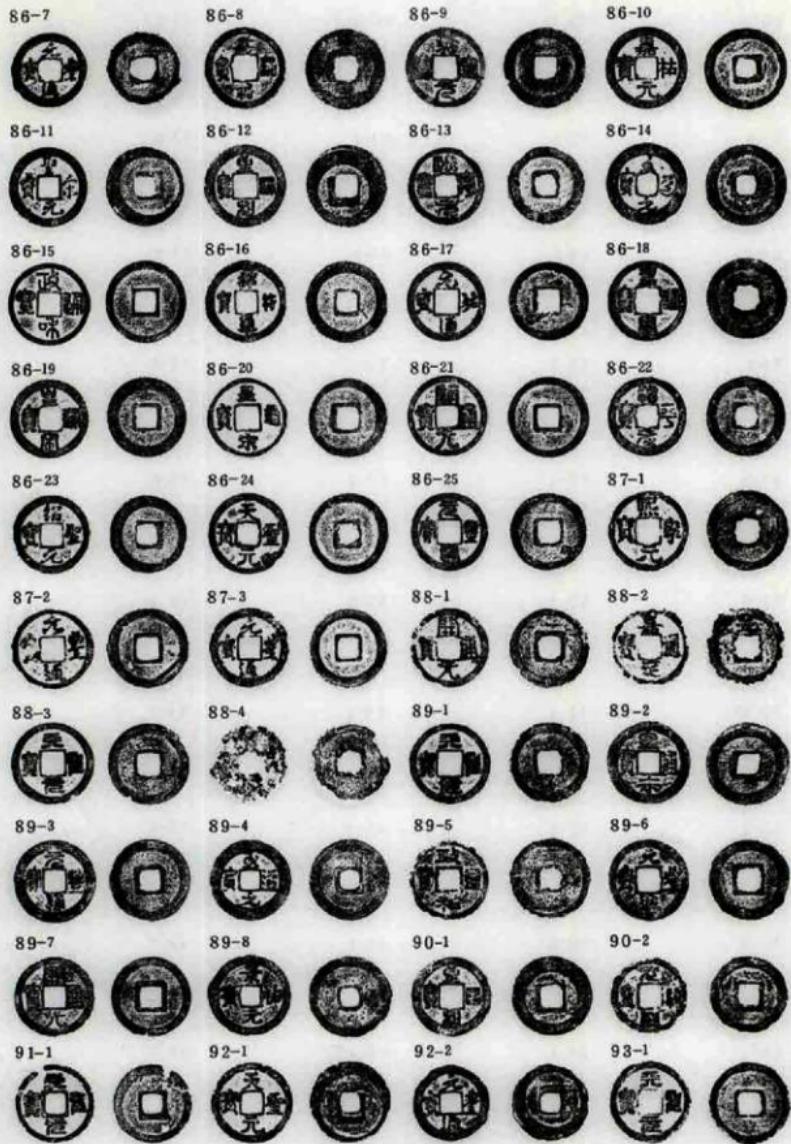
第28圖 1号堅穴遺構出土古錢 (13)



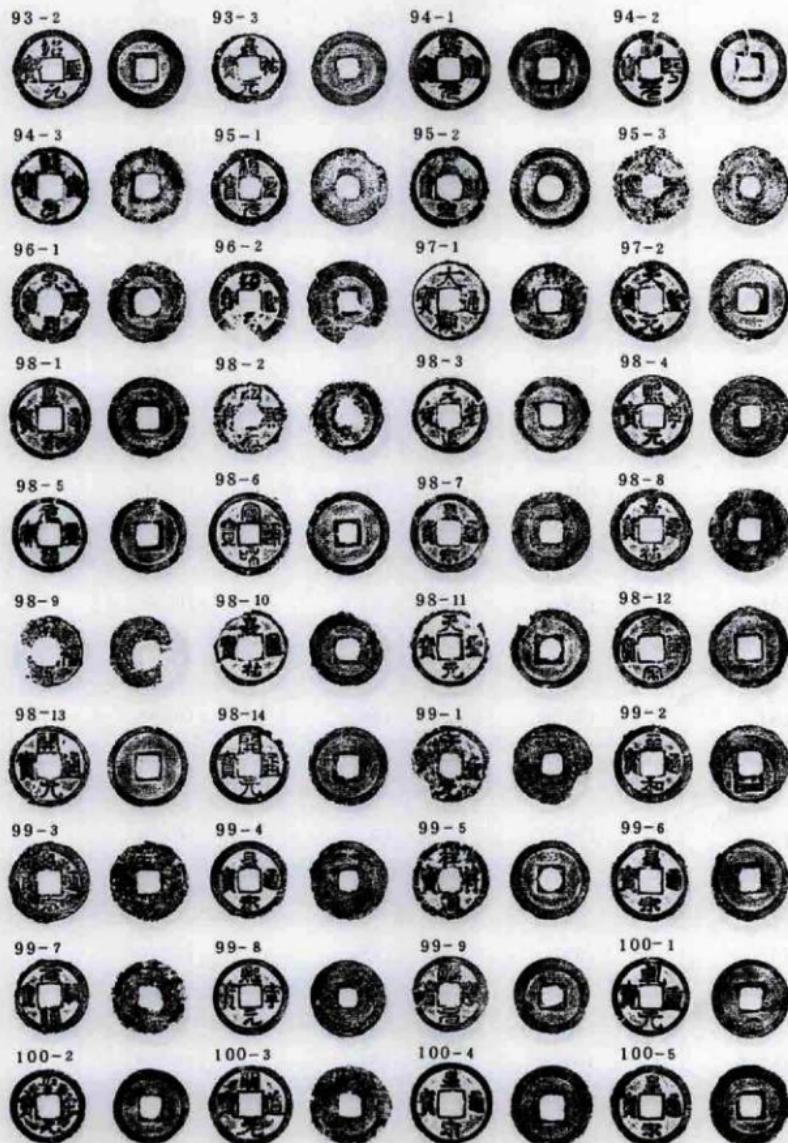
第29図 1号堅穴遺構出土古錢 (14)



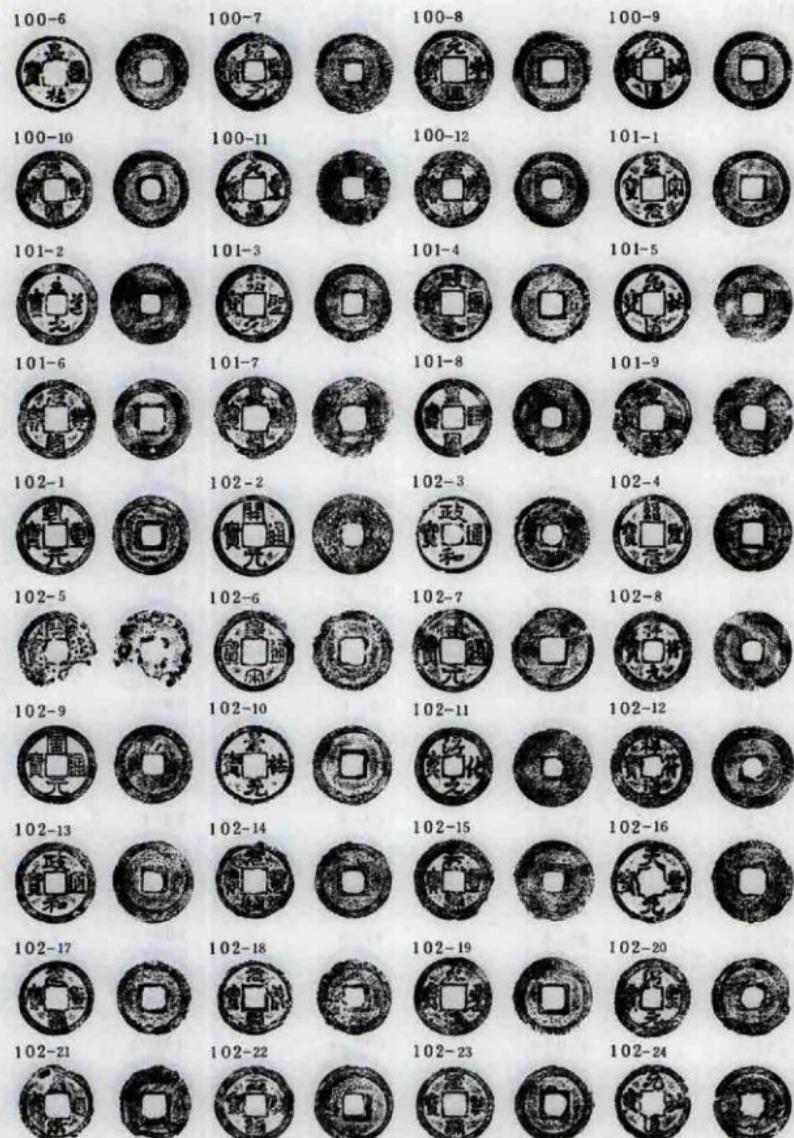
第30圖 1號堅穴遺構出土古錢 (15)



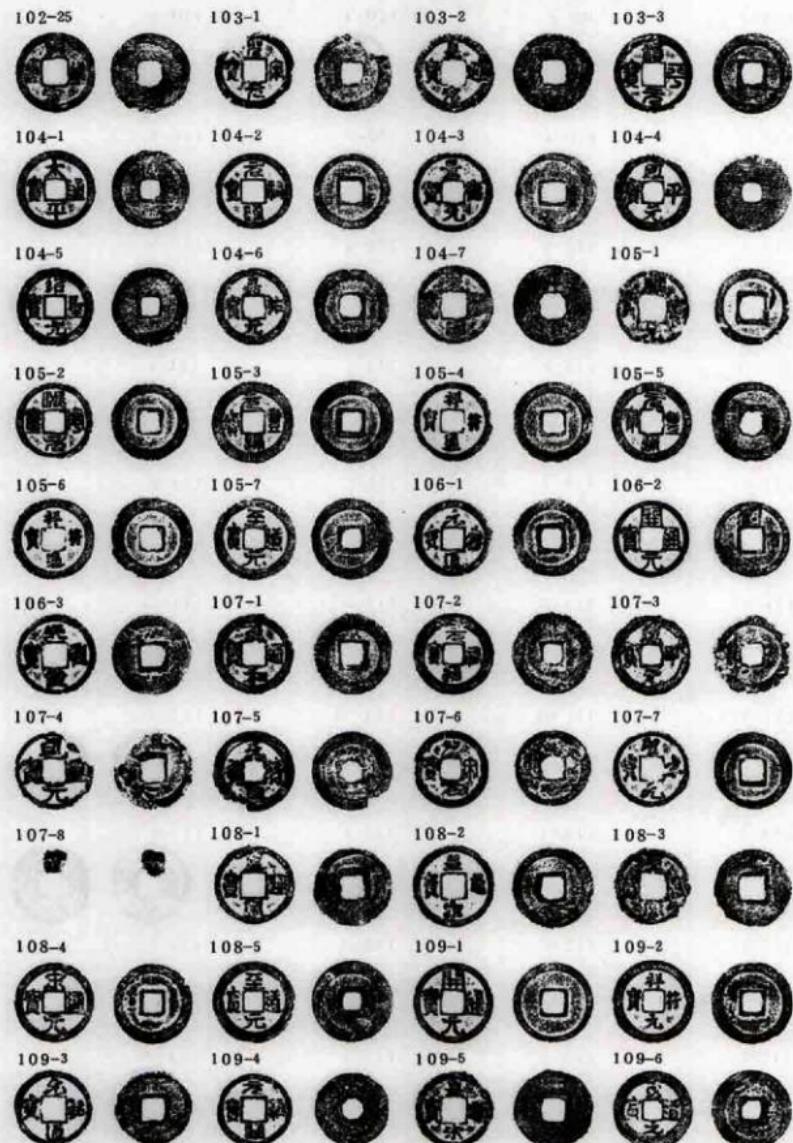
第31図 1号竪穴道構出土古錢 (16)



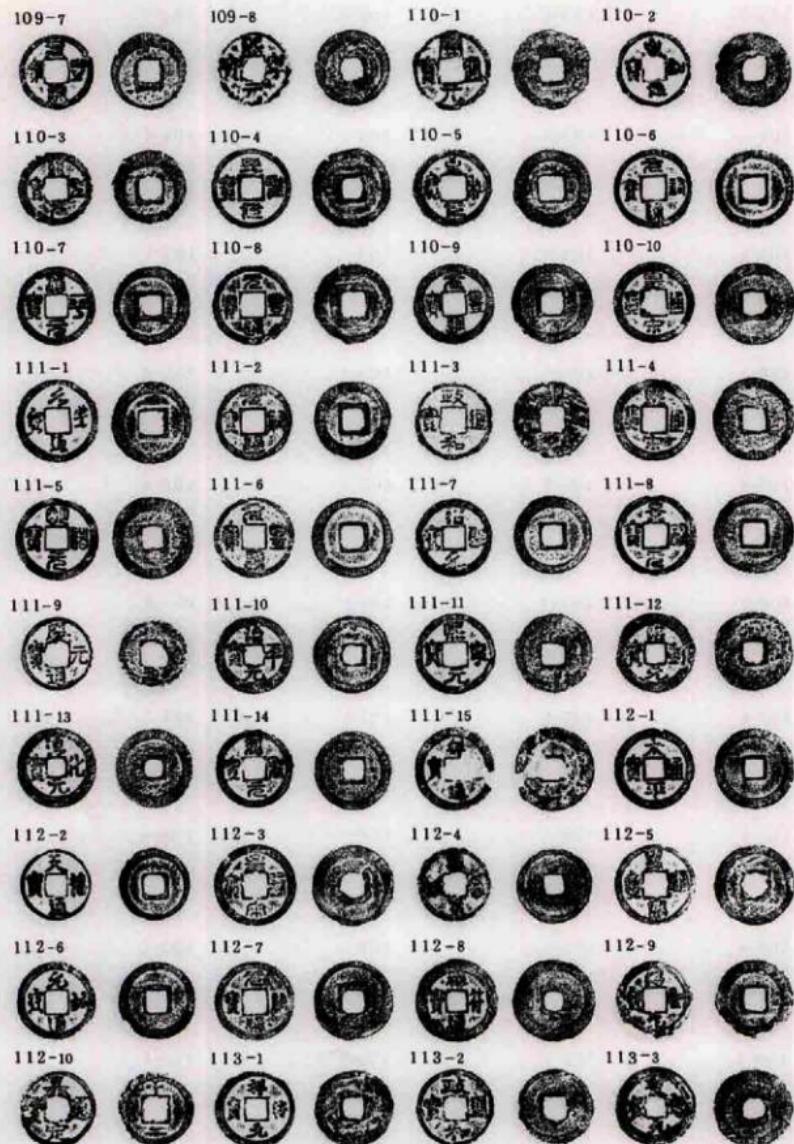
第32図 1号壺穴遺構出土古錢 (17)



第33圖 1号窯穴遺構出土古錢 (18)



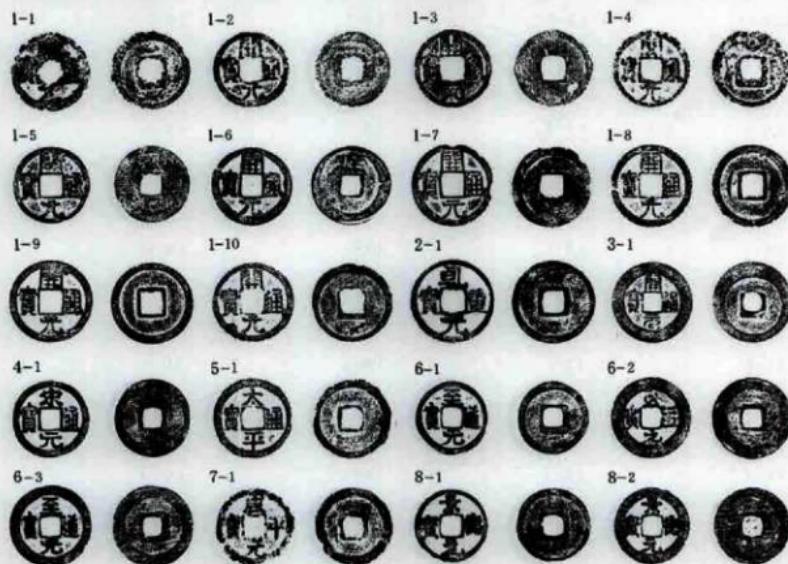
第34图 1号竖穴造構出土古錢 (19)



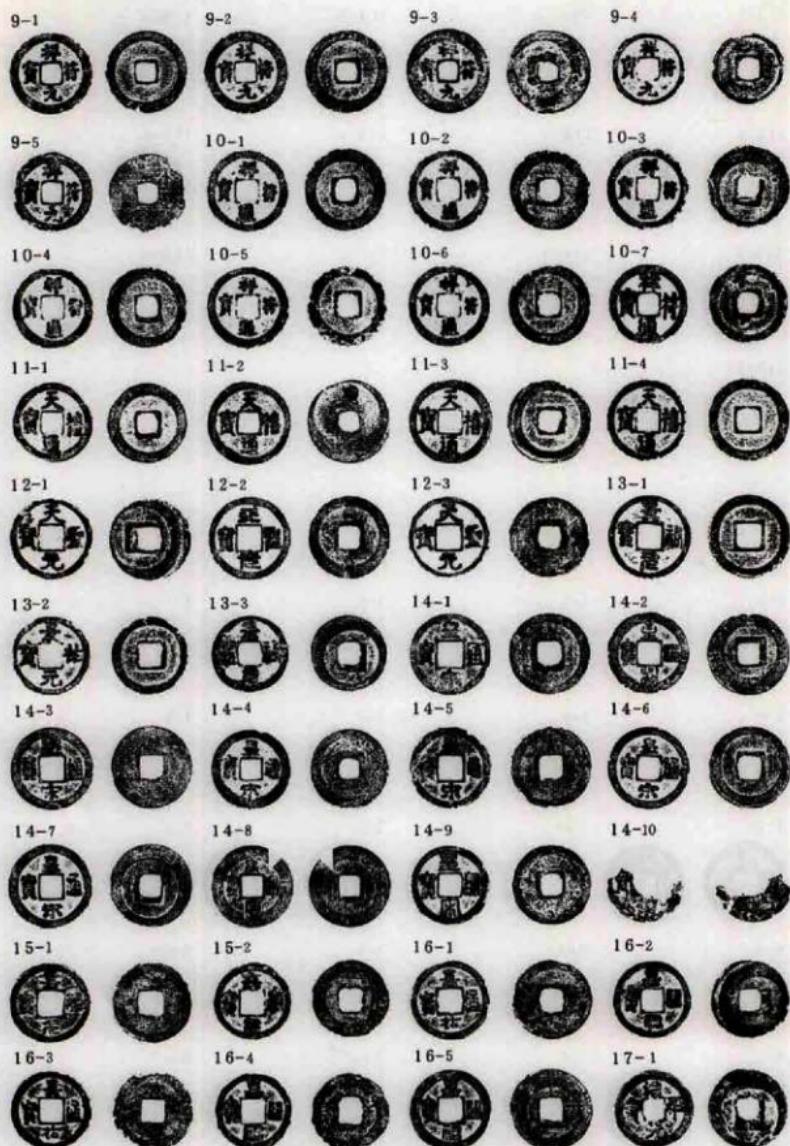
第35圖 1號堅穴鑄構出土古錢 (20)



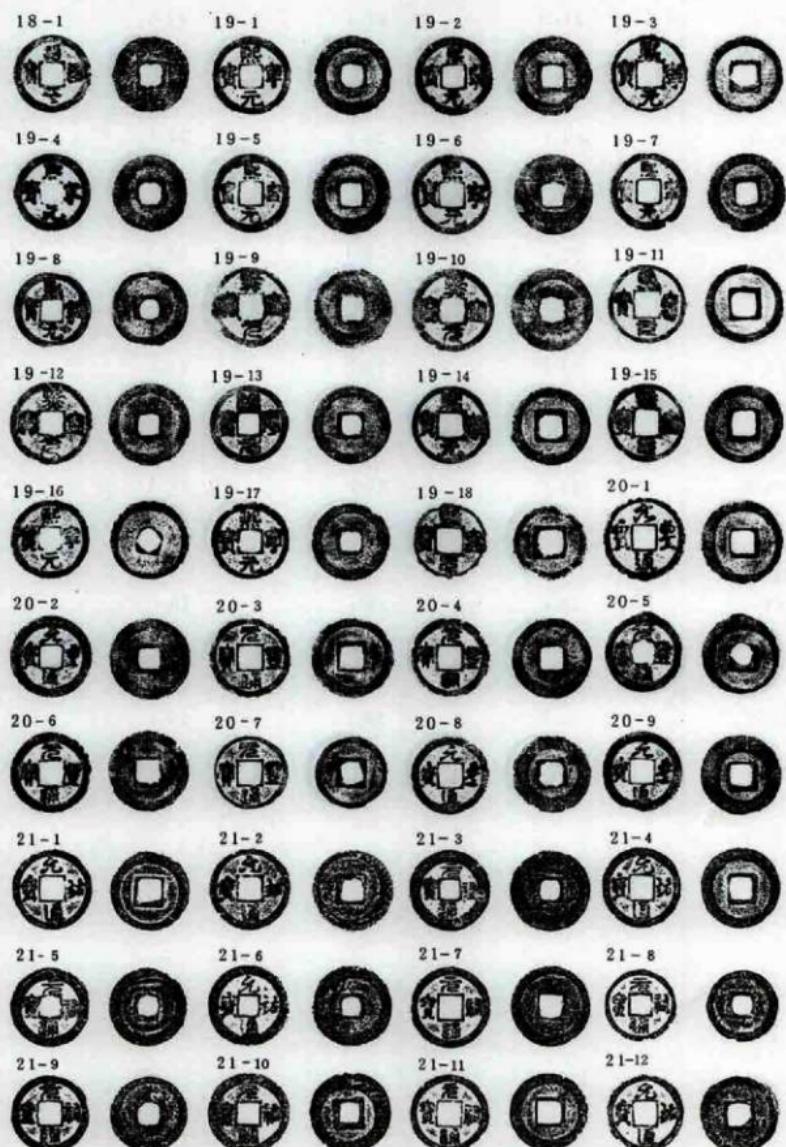
(一括出土)



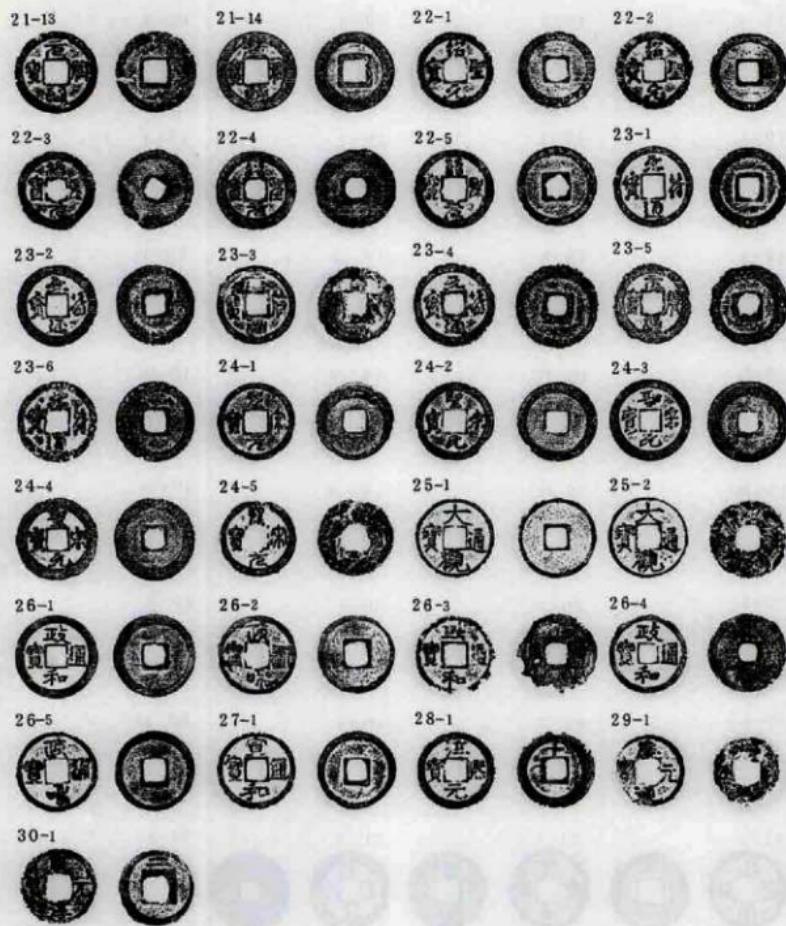
第36図 1号竖穴造構出土古錢 (21)



第37圖 1號竖穴道構出土古錢 (22)



第38圖 1號竖穴遺構出土古錢 (23)



第39圖 1號堅穴遺構出土古錢(24)

1号竖穴造构出土古钱一览

No	錢貨名	錢徑(mm)	錢厚(mm)	重量(g)	書體	備考	No	錢貨名	錢徑(mm)	錢厚(mm)	重量(g)	書體	備考
1-1	淳化元寶	24.6	1.1	1.6	行書		15-1	元符通寶	24.1	0.8	3.1	行書	
1-2	嘉〇〇寶		1.2	(1.0)	篆書		15-2	天聖元寶	24.8	1.0	3.2	篆書	
2-1	政和通寶	22.7	0.9	1.0	篆書		15-3	嘉祐通寶	24.9	1.0	3.5	篆書	
2-2	元豐通寶	23.9	1.1	2.9	篆書		15-4	元祐通寶	24.1	1.1	3.7	行書	
2-3	元豐通寶	24.5	1.1	3.4	行書		15-5	熙寧元寶	25.0	1.1	4.1	真書	
2-4	政和通寶	24.1	1.1	2.4	分楷		15-6	皇宋通寶	24.2	0.9	2.9	篆書	
2-5	天禧通寶	24.9	1.1	2.7			15-7	熙寧元寶	24.2	1.0	3.2	篆書	
2-6	祥符通寶	25.1	1.1	3.0	真書		15-8	聖宋元寶	24.9	0.9	2.2	篆書	
3-1	天聖元寶	24.1	1.1	1.9	真書		16-1	開元通寶	24.3	1.1	3.4	夷慢	
3-2	天禧元寶	24.1	1.1	2.3			16-2	祥符元寶	24.5	1.1	2.8		
4	嘉寧元寶	24.7	1.1	2.9	真書		16-3	祐祐通寶	24.2	1.1	3.2	篆書	
5-1	皇宋通寶	23.2	1.0	2.0	真書		17-1	政和通寶	23.4	1.0	2.1	分楷	
5-2	淳化元寶	24.6	1.0	3.2	行書		17-2	熙寧元寶	24.2	1.0	3.3	篆書	
5-3	元祐通寶	24.0	1.2	2.9	篆書		17-3	開元通寶	23.1	1.1	2.6	背下爪錯鉤	
6	祥符元寶	21.0	0.8	0.8			18	〇〇通寶		1.0	(0.6)		
7	元豐通寶	(24.2)	(1.0)	(1.7)	行書		19	政和通寶		1.1	(1.0)	篆書	
8-1	熙寧元寶	23.6	1.3	3.5	真書		20-1	天聖元寶	23.4	1.2	2.6	真書	
8-2	開元通寶	24.6	0.9	2.7			20-2	開元通寶	23.2	0.8	2.3		
8-3	元祐通寶	24.0	1.1	3.3	行書		20-3	紹聖元寶	23.2	1.1	2.9	篆書	
8-4	景德元寶	25.3	1.0	3.6	篆書		20-4	皇宋通寶	23.8	1.0	2.5	真書	
8-5	嘉祐通寶	23.5	1.0	3.1	篆書		20-5	皇宋通寶	24.6	1.1	3.7	篆書	
9-1	皇宋通寶	24.6	0.9	2.9	真書		20-6	淳化元寶	24.5	1.1	3.6	篆書	
9-2	熙寧元寶	24.5	0.9	2.7	真書		20-7	紹聖元寶	24.6	1.1	3.4	行書	
9-3	元豐通寶	24.3	0.8	2.3	篆書		20-8	熙寧元寶	23.5	1.1	3.1	真書	
10-1	開元通寶	24.5	1.1	3.5	篆書	背面	20-9	元豐通寶	(24.4)	1.0	(2.5)	行書	
10-2	元豐通寶	24.1	0.9	2.9	篆書	背上月	20-10	景德元寶	24.5	1.1	3.4	背下月	
10-3	元祐通寶	24.3	1.0	3.6	行書		20-11	元豐通寶	25.2	1.0	3.2	行書	
10-4	景德元寶	24.6	1.0	3.3	篆書		21-1	皇宋通寶	24.6	1.0	3.3	真書	
10-5	元祐通寶	23.9	1.0	3.7	篆書		21-2	嘉祐通寶	24.4	1.1	3.0	真書	
10-6	元祐通寶	24.2	0.9	3.4	篆書		21-3	熙寧元寶	24.6	1.0	2.7	篆書	
10-7	熙寧元寶	23.7	1.2	4.4	真書		21-4	元豐通寶	24.1	1.0	3.3	篆書	
10-8	熙寧元寶	23.5	1.1	3.6	篆書		21-5	明道元寶	25.0	1.2	4.2	篆書	
10-9	至和元寶	24.1	0.8	3.2	真書		21-6	元豐通寶	23.7	1.1	2.8	行書	
10-10	咸平元寶	24.3	1.0	3.5			21-7	皇宋通寶	24.0	0.9	2.6	篆書	
10-11	皇宋通寶	24.2	0.8	3.2	篆書		21-8	元符通寶	24.0	1.0	3.2	篆書	
10-12	皇宋通寶	24.2	0.8	2.9	真書		21-9	元符通寶	24.7	0.9	3.2	篆書	
10-13	皇宋通寶	24.8	1.1	3.8	真書		21-10	治平元寶	24.2	1.0	3.3	真書	
10-14	皇宋通寶	24.2	1.0	3.1	真書		21-11	元豐通寶	24.0	1.1	3.1	篆書	
10-15	元豐通寶	24.3	0.8	3.0	行書		22-1	元祐通寶	24.4	0.8	2.9	行書	
10-16	元豐通寶	24.9	0.9	3.4	行書		22-2	至道元寶	24.3	0.9	2.8	行書	背下星
10-17	元豐通寶	24.1	1.0	3.4	行書		22-3	紹聖元寶	24.3	1.0	3.0	篆書	
10-18	元豐通寶	24.0	1.2	3.8	行書		22-4	天聖元寶	24.4	1.0	2.5	篆書	
10-19	元豐通寶	23.7	0.9	3.7	行書		22-5	元祐通寶	(23.6)	1.0	(2.2)	篆書	背上星
11-1	至和元寶	23.5	1.0	2.9	真書		23-2	元符通寶	23.6	1.2	3.5	篆書	
11-2	天禧通寶	24.6	1.0	3.0			23-3	元符通寶	24.0	0.7	2.1	行書	
11-3	元祐通寶	24.4	0.9	3.8	篆書		23-4	皇宋通寶	24.7	0.9	3.4	真書	
11-4	元祐通寶	24.0	1.0	3.5	篆書		23-5	元豐通寶	23.9	1.0	3.4	篆書	
12-1	元豐通寶	24.6	1.0	3.3	篆書		23-6	紹聖元寶	23.6	1.3	3.6	篆書	
12-2	皇宋通寶	24.8	0.9	3.4	篆書		23-7	元豐通寶	24.3	1.1	3.4	篆書	
12-3	景德元寶	22.6	1.1	2.6			23-8	皇宋通寶	24.3	0.9	3.0	篆書	
12-4	開元通寶	24.6	1.3	3.6	背左月		23-9	祥符元寶	24.6	1.0	2.9		
12-5	乾元重寶	24.6	1.0	3.6	背上爪		23-10	皇宋通寶	24.0	0.9	3.1	篆書	
13-1	元祐通寶	24.0	1.0	2.3	行書		23-11	皇宋通寶	24.7	1.0	3.2	篆書	
13-2	太平通寶	24.3	0.9	3.3			23-12	開元通寶	23.9	1.1	3.7		
13-3	元祐通寶	23.4	0.7	2.6	行書		23-13	嘉祐通寶	24.6	0.8	2.8	真書	
13-4	祥符元寶	22.3	1.0	2.6			23-14	皇宋通寶	24.5	0.9	2.7	篆書	
14-1	嘉祐元寶	24.1	1.0	3.1	篆書		23-15	皇宋通寶	25.1	1.1	3.6	真書	
14-2	政和通寶	25.1	0.9	3.4	分楷		23-16	熙寧元寶	24.4	1.0	3.4	真書	
14-3	元豐通寶	24.0	1.1	3.7	行書		23-17	聖宋元寶	22.5	1.0	1.8	行書	
14-4	元祐通寶	24.4	1.1	3.3	篆書		23-18	聖宋元寶	23.6	1.0	2.8	篆書	
14-5	元豐通寶	23.8	1.2	3.5	行書		23-19	元豐通寶	23.8	1.2	3.6	行書	
14-6	元符通寶	(23.7)	1.0	(2.9)	行書		23-20	元豐通寶	24.4	1.0	2.8	篆書	

23-21	開元通寶	22.2	0.9	2.2	錯范	29-14	皇宋通寶	24.3	1.0	2.9	篆書
23-22	太平通寶	23.9	0.9	2.9		29-15	皇宋通寶	(24.0)	1.1	(3.3)	真書
23-23	天聖元寶	24.7	1.1	3.5	真書	30-1	天聖元寶	24.4	1.1	3.5	篆書
23-24	天聖元寶	23.0	1.2	3.5	篆書	30-2	紹聖元寶	(24.5)	1.2	(3.2)	篆書
23-25	政和通寶	(24.3)	1.0	(2.8)	分摺	30-3	熙寧元寶	23.5	1.2	3.0	真書
24-1	景德元寶	24.3	1.1	3.1		30-4	嘉祐元寶	23.4	1.2	3.5	真書
24-2	政和通寶	23.6	1.2	2.7	分摺	30-5	祥符元寶	24.7	1.0	3.3	
24-3	熙寧元寶	24.3	1.0	3.0	真書	30-6	皇宋通寶	23.8	1.0	2.0	真書
24-4	元豐通寶	(21.7)	(0.8)	(1.0)	篆書	30-7	聖宋元寶	24.7	1.1	3.4	篆書
25-1	天聖元寶	23.1	1.1	2.9	篆書	30-8	至道元寶	24.0	1.0	2.9	真書
25-2	元符通寶	23.7	1.3	3.5	篆書	30-9	元豐通寶	24.7	1.2	4.0	篆書
25-3	紹聖元寶	24.6	0.9	2.3	篆書	30-10	至和元寶	22.9	1.1	3.1	真書
25-4	元符通寶	24.7	1.1	3.1	行書	30-11	祥符元寶	24.9	1.1	3.6	
25-5	皇宋通寶	24.4	1.0	2.8	真書	30-12	皇宋通寶	24.5	1.0	3.1	篆書
25-6	聖宋元寶	23.9	1.2	2.8	篆書	30-13	慶元通寶	(22.9)	1.1	(2.2)	
25-7	皇宋通寶	24.7	1.2	3.2	篆書	30-14	淳化通寶	24.9	1.1	3.6	真書
25-8	皇宋通寶	23.6	1.2	2.9	真書	30-15	皇宋通寶	24.9	1.1	3.2	篆書
25-9	聖宋元寶	23.5	1.2	3.3	行書	30-16	熙寧元寶	23.0	0.9	3.1	真書
25-10	咸平元寶	24.6	1.2	3.6		30-17	熙寧元寶	23.8	1.1	3.5	真書
25-11	嘉祐通寶	(24.6)	1.1	(2.2)	真書	30-18	元祐通寶	23.6	1.0	2.9	篆書
25-12	元豐通寶	23.5	1.3	3.7	篆書	31-1	政和通寶	24.2	1.1	2.6	分摺
25-13	開元通寶	24.8	1.2	3.5		31-2	景德元寶	23.3	1.0	2.6	
25-14	淳熙元寶	(22.5)	1.2	(2.5)	真書	31-3	熙寧元寶	23.6	1.2	3.9	真書
25-15	天聖元寶	25.4	1.1	3.0	真書	31-4	皇宋通寶	24.5	1.0	3.5	篆書
25-16	皇宋通寶	24.9	1.0	2.5	真書	31-5	慶元通寶	(23.0)	1.2	(3.2)	
25-17	咸平元寶	24.6	1.3	3.9		31-6	皇宋通寶	24.2	0.9	3.0	真書
25-18	皇宋通寶	24.6	1.3	2.7	真書	31-7	景祐元寶	25.3	0.9	3.4	真書
25-19	元豐通寶	24.8	1.2	3.8	行書	31-8	祥符通寶	22.4	0.9	2.8	
25-20	皇宋通寶	24.0	1.3	3.4	真書	31-9	紹聖元寶	23.9	1.3	3.7	篆書
25-21	天聖元寶	24.8	1.1	3.3	篆書	32-1	天聖元寶	24.7	1.0	2.2	篆書
25-22	皇宋通寶	25.0	1.3	3.9	真書	32-2	開元通寶	23.6	0.9	2.3	
26-1	天聖元寶	24.6	1.0	2.9	篆書	32-3	元豐通寶	23.7	1.1	2.6	行書
26-2	治平元寶	23.9	1.1	2.4	真書	32-4	紹聖元寶	23.5	1.3	3.5	行書
26-3	淳化元寶	24.6	1.1	3.0	草書	32-5	天聖元寶	24.7	1.3	3.8	真書
26-4	嘉祐通寶	24.4	1.1	2.5	篆書	33-1	熙寧元寶	23.7	1.2	3.8	真書
26-5	皇宋通寶	24.3	1.0	2.7	真書	33-2	二符通寶	25.2	1.2	4.0	行書
26-6	元祐通寶	24.0	1.2	3.3	篆書	33-3	元豐通寶	23.2	1.4	3.9	行書
26-7	景祐元寶	(23.9)	1.1	(1.4)	真書	33-4	富定通寶	(23.6)	1.0	(2.9)	
26-8	○○○寶	1.1	(0.5)	行書	33-5	熙寧元寶	23.7	1.3	3.9	真書	
27-1	祥符元寶	25.5	0.9	2.8		33-6	皇宋通寶	23.7	1.2	3.1	篆書
27-2	元祐通寶	24.6	1.0	3.4	行書	33-7	皇宋通寶	24.6	1.1	3.7	篆書
27-3	聖宋元寶	(23.6)	1.3	(3.5)	行書	33-8	開元通寶	24.8	1.3	3.8	
27-4	開元通寶	23.3	1.0	3.0		33-9	政和通寶	22.3	1.2	2.4	分摺
27-5	開元通寶	23.4	0.8	2.6		33-10	政和通寶	24.5	1.1	2.9	分摺
27-6	太平通寶	24.2	1.1	3.0		33-11	天聖元寶	24.8	1.1	3.5	篆書
27-7	元祐通寶	23.4	1.2	3.0	行書	33-12	元祐通寶	23.8	1.3	3.6	行書
27-8	熙寧元寶	(23.5)	1.2	(3.3)	真書	33-13	嘉祐通寶	24.4	1.0	3.2	篆書
27-9	皇宋通寶	24.8	1.0	3.5	篆書	33-14	建炎通寶	24.6	1.2	3.3	真書
27-10	天聖元寶	24.8	1.1	3.2	真書	33-15	熙寧元寶	23.4	0.9	2.7	篆書
27-11	咸平元寶	24.5	1.1	2.4		34-1	熙寧元寶	24.1	0.8	2.4	真書
28	皇宋通寶	23.7	1.1	(2.0)	真書	34-2	元祐通寶	24.6	1.2	3.8	行書
29-1	嘉祐通寶	23.5	1.2	3.3	篆書	34-3	政和通寶	24.3	1.1	3.0	分摺
29-2	元符通寶	24.6	1.1	3.5	篆書	34-4	祥符元寶	24.8	0.9	2.1	
29-3	景德元寶	25.2	1.0	3.2		34-5	熙寧元寶	23.3	1.0	2.7	篆書
29-4	咸平元寶	24.2	1.1	3.6		34-6	元祐通寶	23.8	1.1	3.4	行書
29-5	皇宋通寶	23.4	1.2	3.4	篆書	34-7	皇宋通寶	24.4	1.0	3.3	真書
29-6	元豐通寶	24.4	1.1	3.2	行書	34-8	元豐通寶	23.7	1.2	3.7	行書
29-7	熙寧元寶	23.4	1.1	3.2	真書	34-9	元豐通寶	24.8	1.0	3.4	行書
29-8	元符通寶	23.2	1.2	3.5	篆書	34-10	紹聖元寶	23.5	1.1	2.9	行書
29-9	太平通寶	24.1	0.9	2.4		35-1	唐國通寶	24.4	1.0	1.8	篆書
29-10	熙寧元寶	24.2	1.0	2.1	篆書	35-2	天聖元寶	24.9	1.0	3.2	真書
29-11	皇宋通寶	24.5	1.0	2.5	篆書	35-3	紹聖元寶	24.5	1.1	3.4	行書
29-12	政和通寶	24.0	1.2	2.9	篆書	35-4	天聖元寶	24.7	1.3	3.5	真書
29-13	太平通寶	24.3	1.0	2.9		35-5	元豐通寶	23.9	1.1	3.2	行書

35-6	元祐通寶	23.5	1.1	2.8	行書		43-1	皇宋通寶	24.5	1.1	3.5	真書
35-7	開元通寶	23.3	1.2	3.6	背洛		43-2	嘉寧元寶	23.1	1.2	3.5	篆書
35-8	天聖元寶	24.2	0.9	2.8	篆書		43-3	熙寧元寶	23.5	1.1	3.0	篆書
35-9	元豐通寶	23.3	1.3	3.5	行書		43-4	元祐通寶	24.2	1.0	2.8	篆書
36-1	景德元寶	24.5	1.0	2.8			44-1	大觀通寶	24.2	1.2	2.9	
36-2	皇宋通寶	24.4	1.0	3.1	真書		44-2	天祐通寶	25.6	0.9	3.4	
36-3	景祐元寶	25.2	1.0	3.2	真書		45	元豐通寶		1.0	(0.5)	篆書
36-4	皇宋通寶	24.5	1.1	3.0	篆書		46	嘉祐通寶	24.5	1.1	2.1	真書
37-1	皇宋通寶	24.7	1.2	3.4	篆書		47-1	大觀通寶	24.6	1.1	2.7	
37-2	天聖元寶	24.7	1.1	3.5	真書		47-2	至道元寶	24.7	1.3	4.0	真書
37-3	景德元寶	24.6	0.9	2.7			47-3	開元通寶	23.5	0.8	2.6	
37-4	景德元寶	23.1	1.1	2.8			47-4	元祐通寶	24.1	1.1	3.0	行書
37-5	元豐通寶	23.7	1.2	3.5	篆書		48-1	至道元寶	24.7	1.0	3.2	行書
37-6	熙寧元寶	24.2	1.2	3.7	真書		48-2	皇宋通寶	24.6	0.9	3.1	真書
37-7	熙寧元寶	24.8	1.1	3.9	篆書		48-3	皇宋通寶	24.1	1.1	3.2	真書
37-8	元豐通寶	24.6	1.0	3.6	篆書		48-4	元祐通寶	24.3	1.1	3.3	行書
37-9	元豐通寶	23.8	1.0	2.8	篆書		48-5	聖宋元寶	24.1	1.0	2.9	篆書
37-10	天聖元寶	25.2	1.0	3.6	篆書		48-6	元祐通寶	24.6	0.9	2.3	行書
37-11	皇宋通寶	24.5	1.3	4.0	篆書		48-7	祥符元寶	25.2	0.9	3.6	
37-12	嘉祐元寶	23.4	1.1	3.5	真書		48-8	至道元寶	24.3	1.0	3.0	草書
38-1	熙寧元寶	23.3	1.1	3.7	篆書		49-1	天聖元寶	24.2	1.1	3.6	真書
38-2	至和元寶	23.9	1.1	2.6	篆書		49-2	熙寧元寶	23.7	1.1	3.2	真書
38-3	聖宋元寶	23.8	1.3	3.2	篆書		49-3	乾元重寶	24.0	1.1	3.1	
38-4	明道元寶	25.3	1.1	4.2	篆書		49-4	天祐通寶	25.5	0.9	3.0	
38-5	景德元寶	25.4	1.1	3.6	真書		49-5	皇宋通寶	24.1	1.0	3.3	篆書
38-6	景祐元寶	25.0	1.0	3.2	真書		49-6	皇宋通寶	24.2	1.0	2.3	篆書
38-7	元祐通寶	23.6	1.2	4.0	篆書		49-7	治平元寶	24.3	1.1	3.5	真書
38-8	淳熙元寶	(23.8)	1.1	(2.7)	真書	背月星	49-8	開元通寶	23.6	1.0	3.0	背上爪
38-9	慶元通寶	22.7	1.3	3.2		背四	49-9	開元通寶	23.6	0.9	2.6	背上月
39-1	開元通寶	24.6	1.0	2.7		背四	49-10	皇宋通寶	24.8	1.0	3.2	
39-2	至和元寶	24.6	1.0	3.1	真書		49-11	皇宋通寶	24.0	1.0	3.3	篆書
39-3	熙寧元寶	23.4	1.2	3.5	真書		49-12	紹聖元寶	23.2	1.1	3.0	篆書
39-4	景德元寶	25.0	1.2	4.1			49-13	政和通寶	23.5	1.1	3.2	分楷
39-5	聖宋元寶	23.8	1.4	3.9	篆書		49-14	景德元寶	24.3	1.0	3.4	
39-6	祥符元寶	24.9	1.0	3.7			50-1	熙寧元寶	23.7	1.0	2.8	真書
39-7	元豐通寶	24.0	1.2	3.6	篆書		50-2	熙寧元寶	24.0	1.0	2.8	篆書
39-8	祥符元寶	24.3	0.9	2.8			50-3	開元通寶	23.4	0.9	2.8	
39-9	元豐通寶	25.0	1.3	4.2	行書		50-4	開元通寶	22.7	1.2	3.0	
39-10	皇宋通寶	24.8	1.1	3.9	真書		50-5	治平元寶	22.8	1.3	3.2	真書
39-11	嘉祐通寶	(24.7)	1.2	(3.4)	背元		50-6	至道元寶	24.8	1.0	4.0	
39-12	天聖元寶	24.4	1.0	2.7	真書		50-7	熙寧元寶		1.5	(1.4)	篆書
39-13	皇宋通寶	24.7	0.8	3.1	真書		51-1	嘉祐通寶	(23.8)	(0.6)	(1.7)	真書 郭抜け
40-1	元祐通寶	24.0	1.1	2.7	行書		51-2	元豐通寶	23.4	1.1	2.7	篆書
40-2	皇宋通寶	24.9	0.9	3.0	真書		51-3	元祐通寶	24.1	1.2	3.0	篆書
40-3	元祐通寶	23.8	1.3	3.7	行書		51-4	至和元寶	24.5	1.1	3.4	真書
40-4	天祐通寶	24.6	1.4	4.7			52-1	祥符元寶	24.7	1.0	2.1	
40-5	乾元重寶	23.3	1.1	3.0			52-2	元豐通寶	24.1	1.0	3.1	篆書
40-6	治平元寶	23.6	1.0	3.0	篆書	星形穿	52-3	至和元寶	(23.3)	1.1	(2.1)	真書
40-7	熙寧元寶	23.8	1.1	3.1	篆書		53-1	嘉祐元寶	23.4	1.1	2.8	真書
40-8	天聖元寶	24.1	1.0	2.9	篆書		53-2	元祐通寶	24.6	1.1	2.3	篆書
40-9	熙寧元寶	24.3	0.9	3.1	篆書		53-3	元祐通寶	23.4	1.1	3.2	行書
40-10	皇宋通寶	24.5	1.0	3.3	篆書		53-4	天祐通寶	25.3	1.0	3.3	
40-11	府國通寶	23.8	1.0	3.1	篆書		53-5	天祐通寶	23.0	1.1	2.3	
40-12	元符通寶	23.7	1.1	2.9	篆書		53-6	元豐通寶	23.8	1.1	3.2	行書
41	熙寧元寶	23.9	1.0	2.3	真書		54-1	祥符通寶	25.0	1.0	3.0	
42-1	嘉祐通寶	23.6	0.8	2.8	篆書		54-2	皇宋通寶	24.7	1.1	3.6	真書
42-2	開元通寶	(23.3)	1.0	(2.8)	背上下爪		54-3	治平通寶	24.5	1.1	3.4	真書
42-3	元豐通寶	(22.9)	0.8	(1.5)	行書		54-4	元豐通寶	23.9	1.2	3.6	篆書
42-4	祥符元寶	24.5	0.5	2.0			54-5	元豐通寶	23.6	1.1	3.0	行書 背下星
42-5	成平元寶	25.0	0.9	3.7			54-6	開元通寶	23.9	1.1	3.4	
42-6	皇宋通寶	24.4	1.1	3.6	真書		54-7	開元通寶	25.2	1.1	3.4	背上升
42-7	元祐通寶	24.4	1.0	3.2	行書		54-8	政和通寶	23.7	1.3	3.6	篆書
42-8	天聖元寶	24.7	1.2	3.4	篆書		54-9	政和通寶	23.6	1.1	2.4	分楷
42-9	景德元寶	25.0	0.9	2.8	篆書		55-1	嘉祐通寶	(0.8)	(1.4)	背元	

55-2	皇宋通寶	24.7	1.1	3.6	真書		64-1	景德元寶	24.3	1.1	3.4	
55-3	紹聖元寶	24.3	1.0	3.4	篆書		64-2	咸平元寶	24.6	0.8	2.9	
55-4	元祐通寶	(24.4)	1.0	(2.5)	篆書		64-3	天聖元寶	24.3	0.9	2.8	篆書
55-5	祥符元寶	24.6	1.0	3.4			65-1	開元通寶	24.6	1.0	3.1	
55-6	宣和通寶	24.1	1.3	3.7	分楷		65-2	皇宋通寶	25.1	0.9	2.9	真書
55-7	景德元寶	25.0	1.2	3.8			65-3	嘉定通寶	22.4	1.1	3.0	背九
55-8	景德元寶	24.0	1.2	3.7			65-4	元祐通寶	24.4	1.1	3.6	行書
55-9	景德元寶	24.6	1.1	3.5			65-5	元豐通寶	23.9	1.0	3.2	行書
55-10	紹聖元寶	22.5	1.2	2.9			65-6	天聖元寶	24.3	0.9	3.3	篆書
56-1	開元通寶	25.0	1.2	2.9			65-7	熙寧元寶	23.8	1.2	3.9	篆書
56-2	景德元寶	24.6	1.0	3.0			65-8	至和元寶	23.9	1.0	2.9	
56-3	元祐通寶	23.7	1.3	3.8	行書		65-9	皇宋通寶	25.0	1.0	2.9	真書
56-4	天聖元寶	23.8	1.0	2.4	篆書		66-1	天聖元寶	24.7	0.8	1.7	真書
57-1	皇宋通寶	23.6	1.0	2.6	篆書		66-2	開元通寶	(20.6)	1.1	(1.6)	
57-2	政和通寶	25.0	1.0	2.7	分楷		66-3	元豐通寶	24.4	0.9	2.4	篆書
57-3	元豐通寶	24.4	0.9	2.7	行書		67-1	開元通寶	22.5	0.8	2.0	背土月
57-4	嘉定通寶	(23.1)	1.0	(2.5)	背三?		67-2	太平通寶	24.3	1.0	3.5	
57-5	皇宋通寶	24.7	0.8	2.8	真書		67-3	元祐通寶	24.6	1.1	3.7	篆書
57-6	熙寧元寶	24.4	1.0	3.3	真書		67-4	元祐通寶	24.3	1.0	2.6	篆書
57-7	不	明	(22.1)	0.9	(1.6) 明背 橫銘錢		67-5	熙寧元寶	24.8	1.2	4.3	篆書
57-8	元祐通寶	23.6	1.2	3.5	行書		67-6	皇宋通寶	22.9	1.0	2.9	真書
58-1	祥符元寶	24.7	1.0	3.8	真書		67-7	元豐通寶	24.9	1.0	3.4	行書
58-2	開元通寶	27.5	0.9	2.5			67-8	元符通寶	24.7	1.0	3.8	行書
58-3	元祐通寶	24.3	1.0	3.2	行書		67-9	熙寧元寶	24.1	0.9	3.2	真書
58-4	景德元寶	24.7	1.2	4.4			68-1	開元通寶	22.9	0.9	1.7	
58-5	淳祐元寶	22.5	1.0	2.4	背二		68-2	元豐通寶	23.3	1.2	3.2	篆書
58-6	祥符通寶	24.6	1.0	3.0			69-1	開元通寶	23.8	1.0	2.5	
58-7	元祐通寶	24.1	1.1	3.3	篆書		69-2	元祐通寶	24.2	1.3	3.1	篆書
58-8	至和元寶	23.9	1.0	2.4	真書		69-3	大觀通寶	24.0	1.2	3.3	
58-9	治平元寶	22.9	1.3	3.8	篆書		69-4	嘉祐通寶	23.6	1.0	2.8	真書 背上星
58-10	皇宋通寶	24.5	1.0	3.3	篆書		69-5	元豐通寶	24.7	1.0	3.7	行書
58-11	皇宋通寶	24.7	1.0	3.3	篆書		69-6	至和元寶	22.8	0.9	2.3	真書
58-12	元祐通寶	24.2	1.0	3.4	篆書		69-7	政和通寶	23.9	1.1	3.3	分楷
58-13	皇宋通寶	25.0	1.0	3.0	真書		69-8	元豐通寶	23.2	1.0	2.8	行書
58-14	開元通寶	24.2	1.1	3.2			69-9	元豐通寶	24.3	1.1	3.3	行書
59-1	元祐通寶	(23.7)	1.2	(2.8)	行書		69-10	皇宋通寶	24.5	1.1	3.0	真書
59-2	熙寧元寶	23.9	1.1	3.2	篆書		69-11	嘉祐通寶	24.5	0.9	2.5	真書
59-3	政和通寶	23.6	0.9	2.3	篆書		69-12	元豐通寶	24.9	1.1	3.7	篆書
59-4	元豐通寶	25.0	1.0	3.7	篆書		69-13	元符通寶	23.7	1.4	3.8	篆書
59-5	皇宋通寶	24.4	1.0	3.4	篆書		69-14	天聖元寶	24.4	1.2	3.8	篆書
60-1	開元通寶	24.2	1.0	2.6			69-15	熙寧元寶	24.2	1.1	3.3	篆書
60-2	元祐通寶	24.4	1.2	3.1	行書		69-16	紹聖元寶	23.7	1.1	3.5	篆書
61-1	熙寧元寶	23.1	1.1	2.7	真書		69-17	元豐通寶	23.4	1.2	3.1	行書
61-2	聖宋元寶	23.9	1.1	3.3	篆書		70-1	元豐通寶	24.2	1.3	2.9	篆書
61-3	元豐通寶	24.1	1.3	4.0	行書		70-2	政和通寶	24.7	1.4	3.5	篆書
61-4	皇宋通寶	24.9	1.1	2.9	篆書		70-3	天聖元寶	(24.6)	1.4	(2.6)	真書
61-5	皇宋通寶	25.3	0.9	3.3	真書		70-4	開元通寶	24.3	1.1	3.1	
61-6	皇宋通寶	25.3	0.9	3.1	真書		70-5	太平通寶	(23.5)	1.1	(1.7)	
62-1	嘉祐通寶	24.0	1.1	2.2	真書		70-6	皇宋通寶	25.3	1.2	3.2	真書
62-2	治平通寶	23.5	1.1	2.0	篆書		70-7	景祐元寶	23.6	1.1	2.7	篆書
62-3	皇宋通寶	24.8	1.1	2.9	篆書		70-8	天聖元寶	24.9	1.1	3.2	篆書
62-4	皇宋通寶	24.9	1.3	4.2	真書		70-9	皇宋通寶	24.6	1.1	3.2	篆書
62-5	聖宋元寶	23.4	1.2	3.3	行書		70-10	嘉祐通寶	(24.0)	1.2	(3.4)	真書
63-1	熙寧元寶	23.3	1.1	2.8	真書		70-11	熙寧元寶	23.4	1.3	3.1	篆書
63-2	皇宋通寶	23.6	1.0	2.6	篆書		71	元祐通寶	25.1	1.2	2.8	行書
63-3	皇宋通寶	24.7	1.0	3.7	真書		72-1	元豐通寶	24.3	1.2	2.6	行書
63-4	皇宋通寶	23.9	1.1	3.3	篆書		72-2	元豐通寶	23.9	1.2	3.2	篆書
63-5	紹聖元寶	23.3	1.1	3.1	行書		72-3	元豐通寶	24.5	1.2	2.7	篆書
63-6	政和通寶	24.3	1.2	3.1	篆書		72-4	元豐通寶	(23.4)	1.2	(3.1)	行書
63-7	嘉泰通寶	23.9	1.0	2.5			72-5	天聖元寶	(24.0)	1.2	(3.4)	真書
63-8	祥符元寶	24.7	0.9	3.5			72-6	熙寧元寶	(24.4)	1.1	(3.5)	篆書
63-9	景祐元寶	24.5	1.0	2.9	真書		73-1	元祐通寶	24.4	1.2	3.9	篆書
63-10	景德元寶	24.8	1.1	3.1	真書		73-2	元祐通寶	24.6	1.1	2.5	篆書
63-11	元祐通寶	24.3	1.0	3.0	行書		73-3	元豐通寶	23.5	1.3	3.5	篆書

73-4 元豐通寶 24.1	1.2	2.9	篆書		82-1 開元通寶 24.7	1.2	2.9	
73-5 咸平元寶 23.8	1.0	2.7			82-2 大觀通寶 24.6	1.5	3.3	
73-6 元祐通寶 (24.6)	1.1	(2.7)	行書		82-3 紹聖元寶 24.7	1.1	2.9	行書
74-1 開元通寶 24.6	1.1	3.2		背上海月	83-1 聖宋元寶 24.9	1.2	2.9	行書
74-2 開元通寶 (23.5)	1.2	(2.6)			83-2 祥符元寶 25.4	1.2	3.1	
74-3 皇宋通寶 24.2	1.1	3.0	真書		83-3 元豐通寶 24.3	1.2	3.7	行書
74-4 皇宋通寶 24.4	1.1	3.3	真書		83-4 景祐元寶 24.6	1.0	3.3	真書
74-5 皇宋通寶 24.6	1.1	2.7	真書		83-5 元祐通寶 23.5	1.2	3.0	行書
74-6 聖宋元寶 24.6	1.2	3.4	行書		83-6 元祐通寶 24.5	1.3	3.4	篆書
74-7 元豐通寶 24.6	1.1	3.6	行書		83-7 聖宋元寶 24.0	1.3	3.8	篆書
74-8 政和通寶 24.2	1.1	3.0	分楷		83-8 治平元寶 24.5	1.1	3.4	篆書
74-9 紹聖元寶 24.2	1.4	3.9	篆書		83-9 元豐通寶 25.1	1.2	3.1	篆書
74-10 天聖元寶 24.2	1.2	2.3	真書		83-10 嘉定通寶 24.8	1.1	1.7	
74-11 天聖元寶 25.3	1.2	3.9	真書		84-1 皇宋通寶 24.7	1.2	2.7	真書
74-12 廣定通寶 (23.3)	1.2	(2.7)		背十三	84-2 政和通寶 24.4	1.2	2.7	篆書
74-13 皇宋通寶 24.6	1.1	3.4	篆書		84-3 紹聖元寶 23.8	1.4	2.9	篆書
74-14 元祐通寶 24.5	0.9	3.0	行書		85-1 雜寧元寶 24.8	1.1	3.1	篆書
74-15 皇宋通寶 24.7	1.2	3.5	真書		85-2 政和通寶 (23.9)	1.4	(1.9)	分楷
75 開禧通寶 (24.4)	1.2	(2.6)		背二	85-3 聖宋元寶 (24.1)	1.0	(1.1)	行書
76-1 開元通寶 23.8	1.2	3.1		背鄂	85-4 政和通寶 25.0	0.9	2.0	篆書
76-2 咸平元寶 (21.9)	0.9	(1.9)			85-5 開元通寶 24.9	1.2	3.1	背上海月
76-3 開元通寶 (21.8)	1.1	(1.8)			85-6 皇宋通寶 24.7	1.2	3.1	篆書
76-4 嘉祐元寶 23.6	1.4	3.7	真書		86-1 開元通寶 23.8	0.8	1.7	背上海月
76-5 治平元寶 23.8	1.4	3.4	真書		86-2 一錢通寶 24.0	1.2	3.8	行書
77-1 景德元寶 24.5	1.2	3.5			86-3 元祐通寶 24.0	1.2	3.5	行書
77-2 祥符元寶 22.5	0.9	2.0			86-4 紹聖元寶 24.0	1.3	4.4	行書
77-3 元祐通寶 23.9	1.3	3.6	篆書		86-5 淳熙元寶 23.6	1.2	2.7	真書
77-4 黑寧元寶 24.7	1.1	3.7	真書		86-6 景德元寶 24.2	1.2	3.9	背上海月
77-5 開元通寶 24.2	1.1	2.6		背上海月	86-7 一錢通寶 22.9	1.3	3.1	行書
77-6 天慶通寶 25.3	1.2	3.6			86-8 嘉祐通寶 24.6	1.2	3.6	篆書
77-7 皇宋通寶 24.8	1.0	3.0	篆書		86-9 雜寧元寶 24.7	1.1	3.3	篆書
77-8 祥符通寶 25.2	1.1	3.3			86-10 嘉祐元寶 24.9	1.1	3.1	真書
77-9 元祐通寶 24.3	1.4	3.9	篆書		86-11 聖宋元寶 24.0	1.4	4.0	行書
78-1 大觀通寶 (24.0)	1.2	(2.1)			86-12 至和通寶 24.8	1.0	3.4	篆書
78-2 天聖元寶 24.8	1.2	2.4	篆書		86-13 雜寧元寶 23.5	1.2	3.1	篆書
78-3 皇宋通寶 25.2	1.3	3.2	真書		86-14 至道元寶 24.7	1.2	3.9	星形穿
78-4 雜寧元寶 23.9	1.3	3.6	真書		86-15 政和通寶 24.8	1.2	3.5	篆書
78-5 雜寧元寶 24.9	1.0	3.4	篆書		86-16 祥符通寶 24.8	1.3	3.8	篆書
78-6 祥符元寶 24.5	1.3	3.3			86-17 元祐通寶 4.0	1.3	3.6	行書
78-7 雜寧元寶 24.8	1.1	3.4	篆書		86-18 皇宋通寶 24.7	1.1	3.5	篆書
78-8 力 𠂇	1.0	(0.2)			86-19 皇宋通寶 24.3	1.2	3.3	真書
79-1 皇宋通寶 24.0	1.1	2.1	篆書		86-20 皇宋通寶 24.1	1.2	3.3	真書
79-2 開元通寶 (22.5) (0.9)	(1.4)				86-21 開元通寶 24.6	1.4	3.8	
79-3 開元通寶 23.8	1.4	3.6			86-22 治平元寶 24.2	1.3	3.9	篆書
80-1 黑寧元寶 23.9	1.3	3.7	篆書		86-23 紹聖元寶 23.7	1.4	3.6	行書
80-2 元豐通寶 23.9	1.3	3.3	行書		86-24 天聖元寶 24.6	1.3	3.8	真書
80-3 嘉祐通寶 25.3	1.1	3.3	真書		86-25 元豐通寶 23.4	1.3	3.6	篆書
80-4 皇宋通寶 25.1	1.1	3.3	真書		87-1 雜寧元寶 24.4	1.3	3.4	真書
80-5 皇宋通寶 24.9	1.3	3.5	真書		87-2 一錢通寶 24.6	1.2	3.0	行書
80-6 嘉祐元寶 24.6	1.1	3.1	真書		87-3 元豐通寶 24.0	1.4	2.7	行書
80-7 紹聖元寶 23.6	1.4	3.0	篆書		88-1 開元通寶 24.0	1.1	2.3	
80-8 天聖元寶 24.4	1.4	3.5	篆書		88-2 嘉定通寶 (24.3)	1.3	(2.5)	背上海月
80-9 元豐通寶 24.4	1.1	2.4	篆書		88-3 天聖元寶 25.0	1.2	3.8	篆書
80-10 景祐元寶 25.1	1.1	3.4	真書		88-4 祥符通寶 (23.4)	1.0	(1.4)	
80-11 治平元寶 23.8	1.4	3.4	真書		89-1 天聖元寶 24.7	1.2	3.1	篆書
81-1 元祐通寶 24.4	1.3	3.8	篆書		89-2 皇宋通寶 25.5	1.0	3.7	真書
81-2 天聖元寶 25.0	1.3	4.1	真書		89-3 元豐通寶 24.9	1.2	4.1	篆書
81-3 天聖元寶 24.8	1.1	3.6	真書		89-4 至道元寶 24.6	1.2	3.4	行書
81-4 祥符通寶 23.0	1.2	3.1			89-5 政和通寶 (24.5)	1.2	(2.7)	分楷
81-5 至和通寶 24.3	1.0	3.0	篆書		89-6 元豐通寶 24.8	1.1	3.0	行書
81-6 紹聖元寶 23.8	1.4	3.6	篆書		89-7 開元通寶 24.6	1.3	3.6	
81-7 元祐通寶 (23.1)	1.2	(2.9)	行書		89-8 景祐元寶 25.1	1.1	3.7	真書
81-8 元豐通寶 23.7	1.1	3.0	行書		90-1 至和通寶 24.6	0.9	2.8	篆書
81-9 淳熙元寶 (22.5)	1.0	(1.7)	真書	背上海月里	90-2 元祐通寶 (23.7)	1.2	(2.6)	篆書

91	天聖元寶	24.4	1.1	1.7	篆書	102-5	開元通寶	24.3	1.5	2.1	
92-1	天聖元寶	25.0	1.0	2.7	真書	102-6	皇宋通寶	25.1	1.3	2.3	篆書
92-2	元豐通寶	23.4	1.1	2.5	行書	102-7	開元通寶	25.0	1.3	3.3	
93-1	天聖元寶	25.1	1.4	3.3	篆書	102-8	祥符元寶	24.0	1.2	3.3	
93-2	紹聖元寶	24.3	1.3	2.9	行書	102-9	周通元寶	24.3	1.2	2.5	
93-3	嘉祐元寶	23.1	1.3	2.4	真書	102-10	景祐元寶	24.5	1.2	3.0	真書
94-1	熙寧元寶	25.1	1.0	2.7	篆書	102-11	淳化元寶	24.0	1.3	3.9	草書
94-2	治平元寶	23.5	1.2	1.4	篆書	102-12	祥符通寶	25.4	1.1	3.6	
94-3	熙寧元寶	23.9	1.4	2.8	篆書	102-13	政和通寶	25.1	1.2	3.5	分楷
95-1	紹聖元寶	23.5	1.0	2.3	篆書	102-14	元豐通寶	24.0	1.1	2.9	篆書
95-2	皇宋通寶	24.6	1.0	1.9	篆書	102-15	元豐通寶	24.8	1.1	2.7	篆書
95-3	判說不明	(23.2)	1.2	(1.7)		102-16	天聖元寶	25.1	1.1	2.7	真書
96-1	至和通寶	24.9	1.2	2.0	篆書	102-17	元豐通寶	23.3	1.3	3.1	篆書
96-2	紹聖元寶	(24.3)	1.2	(1.8)	行書	102-18	元符通寶	23.6	1.3	2.7	篆書
97-1	大觀通寶	(23.9)	1.0	(1.8)		102-19	元豐通寶	24.1	1.2	3.3	行書
97-2	天聖元寶	24.9	1.3	2.6	真書	102-20	紹聖元寶	24.5	1.4	3.2	行書
98-1	皇宋通寶	24.9	1.2	3.2	真書	102-21	皇宋通寶	23.6	1.0	1.8	真書
98-2	紹聖元寶	(22.9)	1.1	(1.6)	背四	102-22	元祐通寶	24.4	1.4	4.2	篆書
98-3	元豐通寶	23.5	1.3	2.6	行書	102-23	元祐通寶	23.9	1.2	3.5	篆書
98-4	熙寧元寶	25.1	1.2	3.1	真書	102-24	元祐通寶	24.2	1.3	3.4	行書
98-5	元豐通寶	23.2	1.1	2.0	篆書	102-25	皇宋通寶	24.3	1.1	3.2	真書
98-6	宣和通寶	25.0	1.3	3.6	篆書	103-1	聖宋元寶	24.0	1.1	2.0	篆書
98-7	皇宋通寶	23.9	1.0	2.6	真書	103-2	皇宋通寶	24.2	1.2	2.5	真書
98-8	嘉祐通寶	25.1	1.2	2.8	真書	103-3	治平元寶	24.4	1.2	3.2	篆書
98-9	開禧通寶	21.8	1.0	1.3		104-1	太平通寶	24.2	1.0	2.4	篆書
98-10	嘉祐通寶	23.1	1.2	2.3	真書	104-2	元祐通寶	23.6	1.3	3.4	篆書
98-11	天聖元寶	24.2	1.3	2.5	真書	104-3	景德元寶	25.0	1.2	3.5	
98-12	皇宋通寶	24.8	1.3	3.0	篆書	104-4	咸平元寶	24.2	1.1	2.9	
98-13	開元通寶	24.6	1.1	2.3		104-5	紹聖元寶	23.8	1.1	3.2	行書
98-14	開元通寶	24.1	1.0	2.4		104-6	嘉祐元寶	23.4	1.4	2.8	真書
99-1	天聖元寶	24.7	1.2	2.2	真書	104-7	皇宋通寶	24.4	1.1	2.9	
99-2	至和通寶	24.3	1.1	2.7	真書	105-1	熙寧元寶	23.4	1.2	2.4	真書
99-3	皇宋通寶	24.7	1.2	2.7	真書	105-2	熙寧元寶	23.8	1.4	3.4	篆書
99-4	皇宋通寶	23.9	1.3	3.0	真書	105-3	元豐通寶	25.2	1.2	3.4	篆書
99-5	祥符通寶	24.4	1.1	2.4		105-4	祥符通寶	24.3	1.3	3.0	
99-6	皇宋通寶	24.6	1.2	3.4	真書	105-5	元豐通寶	24.7	1.1	2.9	篆書
99-7	元祐通寶	23.4	1.4	3.1	篆書	105-6	祥符通寶	25.3	1.2	3.3	
99-8	熙寧元寶	23.4	1.4	3.6	真書	105-7	至道元寶	24.9	1.2	3.8	真書
99-9	熙寧元寶	23.5	1.4	3.8	篆書	106-1	元豐通寶	24.9	1.1	2.7	行書
100-1	乾元重寶	24.0	1.0	2.3		106-2	開元通寶	23.5	1.3	3.2	背下月
100-2	聖宋元寶	23.0	1.1	1.8	行書	106-3	天聖元寶	24.3	1.2	2.8	篆書
100-3	明道元寶	25.2	1.2	2.9	真書	107-1	至道通寶	24.3	1.2	3.3	真書
100-4	皇宋通寶	25.3	1.0	2.6	真書	107-2	元祐通寶	24.9	1.2	3.8	篆書
100-5	皇宋通寶	25.0	0.8	2.4	真書	107-3	咸平元寶	24.4	1.2	2.9	
100-6	嘉祐通寶	23.0	1.3	3.5	真書	107-4	乾元重寶	24.2	1.4	2.2	背下月
100-7	紹聖元寶	24.2	1.1	3.1	行書	107-5	元祐通寶	24.7	1.1	3.5	行書
100-8	元豐通寶	24.7	1.2	3.6	行書	107-6	聖宋元寶	23.4	1.1	2.9	篆書
100-9	元祐通寶	23.7	1.3	3.7	行書	107-7	聖宋元寶	23.8	1.3	3.2	行書
100-10	元豐通寶	23.8	1.3	3.8	篆書	107-8	祥〇寶	(0.1)			
100-11	元豐通寶	23.3	1.1	2.7	行書	108-1	皇宋通寶	24.5	1.3	3.2	篆書
100-12	元豐通寶	23.6	1.2	3.4	篆書	108-2	皇宋通寶	25.3	1.2	3.4	真書
101-1	聖宋元寶	23.7	1.3	2.8	篆書	108-3	皇宋通寶	(23.8)	1.1	(2.1)	篆書
101-2	至道元寶	24.9	1.2	2.6	草書	108-4	宋通元寶	24.4	1.4	3.6	背左星
101-3	紹聖元寶	23.7	1.5	3.6	行書	108-5	至道元寶	25.0	1.1	3.6	真書
101-4	政和通寶	23.5	1.4	3.5	分楷	109-1	開元通寶	24.3	1.2	3.1	
101-5	元祐通寶	23.7	1.4	3.4	行書	109-2	祥符元寶	25.3	1.2	3.3	
101-6	元豐通寶	24.3	1.3	3.2	篆書	109-3	元祐通寶	23.9	1.4	3.3	行書
101-7	嘉祐通寶	25.2	1.0	2.4	篆書	109-4	元祐通寶	22.7	1.1	2.5	篆書
101-8	皇宋通寶	23.7	1.3	3.2	篆書	109-5	皇宋通寶	24.3	0.8	2.1	真書
101-9	皇宋通寶	24.7	1.1	2.4	真書	109-6	至道元寶	24.4	1.1	3.2	行書
102-1	乾元重寶	24.2	1.0	2.8		109-7	元豐通寶	23.6	1.4	3.6	篆書
102-2	開元通寶	25.0	1.2	3.2		109-8	熙寧元寶	(23.2)	1.3	(2.2)	真書
102-3	政和通寶	23.6	1.2	2.9	分楷	110-1	開元通寶	24.4	1.1	2.5	
102-4	紹聖元寶	24.1	1.4	3.7	篆書	110-2	至和元寶	23.3	1.4	3.1	篆書

110-3	紹聖元寶	23.0	1.2	3.1	篆書		6-1	至道元寶	22.0	1.0	2.2	真書	
110-4	天聖元寶	24.6	1.2	3.2	篆書		6-2	至道元寶	24.5	1.1	3.6	行書	
110-5	至和元寶	24.4	1.0	2.4	篆書		6-3	至道元寶	24.9	1.1	3.7	真書	
110-6	元祐通寶	24.6	1.3	3.5	篆書		7	咸平元寶	24.1	1.0	2.1		
110-7	治平元寶	24.3	1.4	3.0	篆書		8-1	景德元寶	22.3	1.0	2.0		
110-8	元豐通寶	24.7	1.0	2.1	篆書		8-2	景德元寶	23.3	0.7	1.8		
110-9	元豐通寶	25.0	1.1	2.8	篆書		9-1	祥符元寶	25.0	1.2	3.6		
110-10	皇宋通寶	25.0	1.2	3.5	真書		9-2	祥符元寶	25.5	1.2	3.8		
111-1	元豐通寶	25.3	1.2	3.4	行書		9-3	祥符元寶	25.6	1.1	3.0		
111-2	元祐通寶	24.0	1.3	3.4	篆書		9-4	祥符元寶	22.2	1.2	2.3		
111-3	政和通寶	23.9	1.2	2.2	分楷		9-5	祥符元寶	24.3	0.9	1.9		
111-4	皇宋通寶	25.1	1.3	4.2	真書		10-1	祥符通寶	24.8	1.2	3.3		
111-5	明道元寶	24.5	1.1	3.0	篆書		10-2	祥符通寶	24.5	1.2	3.2		
111-6	元豐通寶	24.7	1.1	2.8	篆書		10-3	祥符通寶	24.8	1.1	3.0		
111-7	紹聖元寶	23.8	1.5	3.9	行書		10-4	祥符通寶	24.6	1.3	3.8		
111-8	景祐元寶	25.0	1.1	3.1	篆書		10-5	祥符通寶	24.8	1.3	2.8		
111-9	慶元通寶	21.8	1.2	2.4	背五 真書 星形穿		10-6	祥符通寶	24.8	1.2	3.4		
111-10	治平元寶	23.9	1.2	3.5	真書 星形穿		10-7	祥符通寶	24.2	1.3	3.3		
111-11	熙寧元寶	24.7	1.2	3.5	真書		11-1	天禧通寶	24.5	1.4	3.9		
111-12	紹聖元寶	24.4	1.2	3.4	行書		11-2	天禧通寶	25.2	1.1	3.4	錯范	
111-13	淳化元寶	24.5	1.2	3.7	真書		11-3	天禧通寶	25.4	1.1	2.7		
111-14	紹聖元寶	23.8	1.6	3.9	篆書		11-4	天禧通寶	24.3	1.1	3.1		
111-15	祥符通寶	24.3	1.1	1.8			12-1	天聖元寶	24.8	1.1	3.0	真書 錯范	
112-1	太平通寶	24.4	1.2	3.2			12-2	天聖元寶	25.1	1.2	3.7	篆書	
112-2	天禧通寶	21.9	1.1	2.1			12-3	天聖元寶	24.6	1.3	3.4	真書	
112-3	皇宋通寶	25.0	1.1	2.8	篆書 模鉛錢		13-1	景祐元寶	25.1	1.3	3.5	篆書	
112-4	皇宋通寶	23.0	1.1	2.7			13-2	景祐元寶	23.8	1.2	3.0	真書	
112-5	皇宋通寶	24.6	1.0	2.9	篆書 背凸印 星形穿		13-3	景祐元寶	23.3	1.2	2.8	篆書	
112-6	元祐通寶	24.1	1.3	3.4	行書		14-1	皇宋通寶	24.6	1.2	2.6	真書	
112-7	元祐通寶	24.4	1.1	3.2	篆書		14-2	皇宋通寶	24.7	1.2	3.4	篆書	
112-8	祥符通寶	25.4	1.1	4.0			14-3	皇宋通寶	24.9	1.3	4.0	真書	
112-9	紹聖元寶	24.2	1.2	2.6	行書		14-4	皇宋通寶	23.8	1.2	3.5	真書	
112-10	嘉定通寶	23.9	1.2	2.9			14-5	皇宋通寶	24.5	1.2	3.7	真書	
113-1	祥符元寶	24.5	1.0	2.1			14-6	皇宋通寶	24.7	1.0	2.8	真書	
113-2	政和通寶	23.7	1.3	3.3	分楷		14-7	皇宋通寶	25.3	1.2	3.2	真書	
113-3	聖宋元寶	24.6	1.1	2.6	行書		14-8	皇宋通寶	24.8	1.0	2.6	篆書	
114-1	熙寧元寶	23.8	1.4	3.6	篆書		14-9	皇宋通寶	24.0	1.3	3.2	篆書	
114-2	祥符元寶	25.0	1.2	3.4			14-10	皇宋通寶	1.3	(0.7)			
114-3	皇宋通寶	24.3	1.1	2.6	真書		15-1	嘉祐元寶	24.6	1.2	3.4	篆書	
114-4	政和通寶	24.0	1.1	2.6	分楷		15-2	嘉祐元寶	23.7	1.2	3.0	篆書	
114-5	治平元寶	24.5	1.2	2.2	真書		16-1	嘉祐通寶	24.3	1.2	3.2	真書	
115-2	元豐通寶	24.2	1.2	3.3	篆書		16-2	嘉祐通寶	24.0	1.3	3.6	篆書 錯范	
115-3	元豐通寶	24.3	1.3	3.5	篆書		16-3	嘉祐通寶	24.4	1.2	3.3	篆書	
115-4	至道元寶	25.1	1.0	2.2	真書		16-4	嘉祐通寶	(23.8)	1.2	(3.2)	篆書	
115-5	開元通寶	24.4	1.4	3.7			16-5	嘉祐通寶	24.8	1.0	3.2	篆書	
116-1	咸平元寶	24.2	0.8	2.2			17	治平元寶	24.0	1.3	3.0	真書	
116-2	聖宋元寶	(22.8)	1.1	(1.4)	行書		18	治平通寶	23.7	1.4	3.4	篆書	
116-3	嘉祐通寶	24.6	1.3	2.8	真書		19-1	熙寧元寶	24.1	1.2	3.7	真書	
116-4	皇宋通寶	24.0	1.2	2.2	篆書		19-2	熙寧元寶	24.1	1.3	3.6	真書	
5	【括】						19-3	熙寧元寶	23.6	1.4	2.8	真書	
1-1	開元通寶	24.0	1.2	3.3	背上月		19-4	熙寧元寶	23.3	1.3	3.3	真書	
1-2	開元通寶	22.8	1.2	2.9			19-5	熙寧元寶	24.0	1.3	3.3	真書	
1-3	開元通寶	23.7	0.8	1.5			19-6	熙寧元寶	24.3	1.3	2.9	真書 錯范	
1-4	開元通寶	23.6	1.3	2.4	背孕星		19-7	熙寧元寶	23.9	1.2	3.3	真書	
1-5	開元通寶	23.1	1.1	2.6			19-8	熙寧元寶	23.3	1.4	3.4	真書	
1-6	開元通寶	24.1	1.3	4.1	背上梓		19-9	熙寧元寶	24.0	1.2	2.9	篆書	
1-7	開元通寶	25.1	0.9	2.4			19-10	熙寧元寶	25.0	1.0	2.4	篆書 星形穿	
1-8	開元通寶	25.0	1.4	3.3	背左月		19-11	熙寧元寶	24.2	1.2	3.1	篆書	
1-9	開元通寶	25.2	1.3	3.3			19-12	熙寧元寶	25.0	1.2	3.2	篆書	
1-10	開元通寶	24.0	1.1	2.5	背下月		19-13	熙寧元寶	23.8	1.3	3.8	篆書	
2	氣元重寶	25.4	1.3	3.7			19-14	熙寧元寶	23.9	1.2	3.2	真書	
3	開元通寶	24.5	1.0	2.9			19-15	熙寧元寶	24.2	1.2	2.9	篆書	
4	宋通元寶	23.2	1.1	2.9			19-16	熙寧元寶	24.0	1.1	2.8	真書	
5	太平通寶	24.3	1.2	2.7			19-17	熙寧元寶	23.6	1.3	3.6	真書	

19-18	熙寧元寶	(23.1)	1.2	(2.1)	篆書
20-1	元豐通寶	25.3	1.3	3.5	行書
20-2	元豐通寶	24.8	1.2	3.7	行書
20-3	元豐通寶	(24.6)	1.0	(2.8)	篆書
20-4	元豐通寶	(24.0)	1.1	(2.7)	篆書
20-5	元豐通寶	24.0	1.2	3.4	篆書
20-6	元豐通寶	(24.5)	1.1	(3.1)	篆書
20-7	元豐通寶	22.4	1.0	2.2	篆書
20-8	元豐通寶	23.6	1.1	3.1	行書
20-9	元豐通寶	24.4	1.2	3.6	行書
21-1	元祐通寶	24.4	1.2	3.3	行書
21-2	元祐通寶	24.7	1.3	3.7	行書
21-3	元祐通寶	24.7	1.0	3.2	篆書
21-4	元祐通寶	24.3	1.2	3.7	行書
21-5	元祐通寶	(24.0)	1.1	(3.3)	篆書
21-6	元祐通寶	(24.5)	1.1	(3.2)	行書
21-7	元祐通寶	24.4	1.1	3.4	篆書
21-8	元祐通寶	(21.8)	1.0	(2.0)	篆書
21-9	元祐通寶	(23.8)	1.4	(4.1)	篆書
21-10	元祐通寶	24.9	1.2	3.5	篆書
21-11	元祐通寶	24.1	1.1	3.0	篆書
21-12	元祐通寶	(23.9)	1.2	(2.8)	行書
21-13	元祐通寶	25.0	1.0	2.8	篆書 背上星
21-14	元祐通寶	24.3	1.1	3.1	篆書
22-1	紹聖元寶	(23.7)	1.3	(3.4)	行書
22-2	紹聖元寶	23.9	1.4	3.4	行書
22-3	紹聖元寶	(24.1)	1.2	(2.6)	篆書
22-4	紹聖元寶	(24.6)	1.1	(3.8)	篆書
22-5	紹聖元寶	24.0	1.3	3.6	篆書
23-1	元符通寶	24.5	1.3	3.8	行書
23-2	元符通寶	24.7	1.1	3.3	行書
23-3	元符通寶	(23.6)	1.2	(2.4)	篆書
23-4	元符通寶	(25.6)	1.2	(3.6)	行書
23-5	元符通寶	(24.3)	0.9	(2.7)	篆書
23-6	元符通寶	24.6	1.3	2.5	行書
24-1	聖宋元寶	(23.6)	1.2	(3.2)	篆書
24-2	聖宋元寶	23.8	1.2	3.4	行書
24-3	聖宋元寶	24.7	1.1	3.3	行書
24-4	聖宋元寶	25.3	1.1	3.7	行書
24-5	聖宋元寶	23.6	1.2	1.7	篆書
25-1	大觀通寶	(24.1)	1.5	(3.5)	
25-2	大觀通寶	(23.8)	(1.1)	(1.9)	
26-1	政和通寶	(25.1)	1.2	(3.3)	分楷
26-2	政和通寶	(23.8)	1.3	(3.7)	篆書
26-3	政和通寶	(24.8)	1.0	(1.9)	分楷
26-4	政和通寶	23.9	1.1	3.5	分楷
26-5	政和通寶	24.7	1.1	2.6	篆書
27	宣和通寶	24.0	1.2	3.1	分楷
28	淳熙元寶	(24.1)	1.3	(3.5)	真書 背十
29	慶元通寶	(21.3)	1.4	(2.0)	背元
30	成淳元寶	(23.2)	1.1	(2.7)	背二

#### 錢種別統計

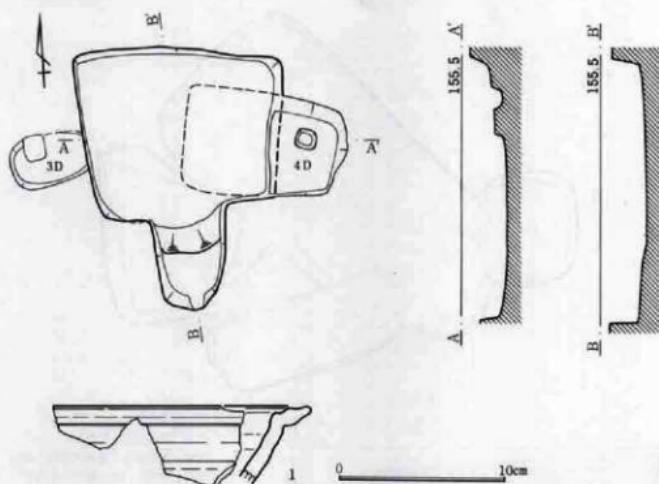
錢貨名	國	初鑄年	枚數	%	順位
1 開元通寶	唐	621	61	6.5	5
2 乾元重寶	唐	758	7	0.7	22
3 開元通寶(註1)	唐	845	4	0.4	25
4 周元通寶	後周	955	1	0.1	28
5 唐國通寶	南唐	959	2	0.2	27
6 開元通寶(註2)	南唐	960	1	0.1	28
7 宋通元寶	北宋	960	2	0.2	27
8 太平通寶	〃	976	10	1.1	19
9 淳化元寶	〃	990	7	0.7	22
10 至道元寶	〃	995	16	1.7	15

11	咸平元寶	〃	998	13	1.4	17
12	景德元寶	〃	1004	21	2.2	13
13	祥符元寶	〃	1009	28	3.0	10
14	祥符通寶	〃	1009	21	2.2	13
15	天禧通寶	〃	1017	14	1.5	16
16	天聖元寶	〃	1023	53	5.6	6
17	明道元寶	〃	1032	4	0.4	25
18	景祐元寶	〃	1034	19	2.0	14
19	皇宋通寶	〃	1038	1311	3.9	1
20	至和元寶	〃	1054	12	1.3	18
21	至和通寶	〃	1054	6	0.6	23
22	嘉祐元寶	〃	1056	12	1.3	18
23	嘉祐通寶	〃	1056	26	2.8	11
24	治平元寶	〃	1064	16	1.7	15
25	治平通寶	〃	1064	3	0.3	26
26	熙寧元寶	〃	1068	84	8.9	4
27	元豐通寶	〃	1078	1081	1.5	2
28	元祐通寶	〃	1086	86	9.1	3
29	紹聖元寶	〃	1094	39	4.1	7
30	元符通寶	〃	1098	24	2.5	12
31	聖宋元寶	〃	1101	29	3.1	9
32	大觀通寶	〃	1107	8	0.8	21
33	政和通寶	〃	1111	37	3.9	8
34	宣和通寶	〃	1119	3	0.3	26
35	建炎通寶	南宋	1127	1	0.1	28
36	淳熙元寶	〃	1174	5	0.5	24
37	紹熙元寶	〃	1190	2	0.2	27
38	慶元通寶	〃	1195	5	0.5	24
39	嘉泰通寶	〃	1201	1	0.1	28
40	開禧通寶	〃	1205	2	0.2	27
41	嘉定通寶	〃	1208	9	1.0	20
42	淳祐元寶	〃	1241	1	0.1	28
43	咸淳元寶	〃	1265	1	0.1	28
不明						7
合計						942

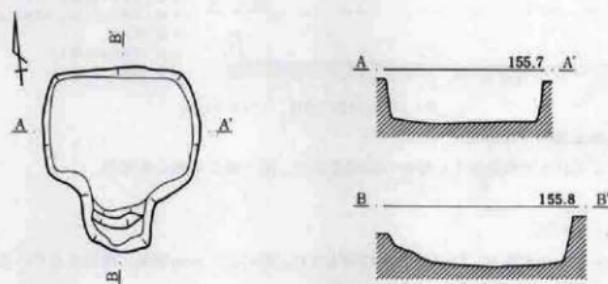
(註1)会昌開元とか紀地銭と称される

(註2)書体が篆書

2号竖穴遺構



3号竖穴遺構



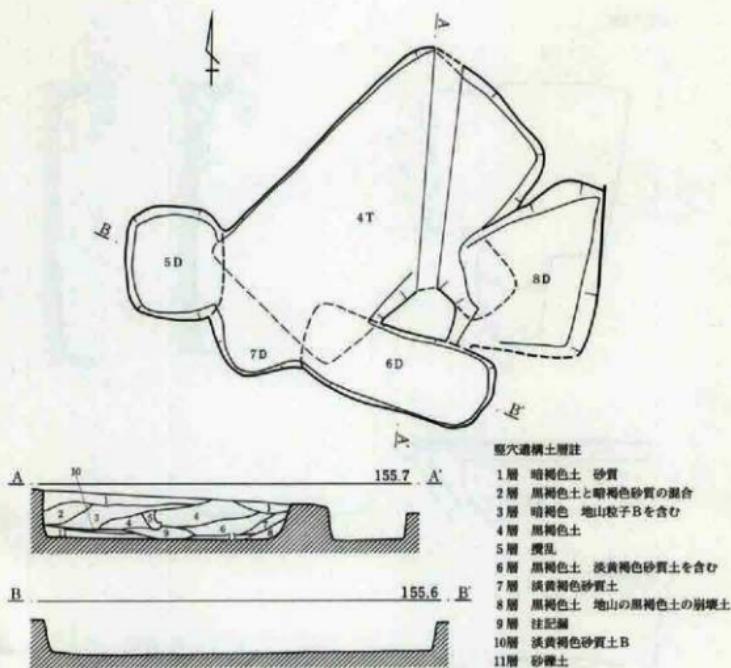
第40図 2・3号竖穴遺構・出土遺物

板状を呈する。

規模は、主室部の東辺2.2m、西辺2.65m、北辺3.4m、南辺2.75m、張り出し長は1.5m前後、最大幅1.2mを測る。入り口の主軸はN-2°-Wにとる。

壁面は垂直気味とし、壁高は35~44cmが残存する。主室部の床面は疊層面であり、入り口部に向けて南方に緩やかな傾斜を呈する。

遺物は、入り口部で瀬戸の所産である折縁鉢の口縁部片が1点出土した。



第41図 4号竖穴造構、5~8号土坑

#### 2号竖穴造構出土遺物 (第40図)

瀬戸産と考えられる灰釉を施す折縁鉢の口縁部片で、胎土はやや粗な灰褐色。

#### 3号竖穴造構 (第40図)

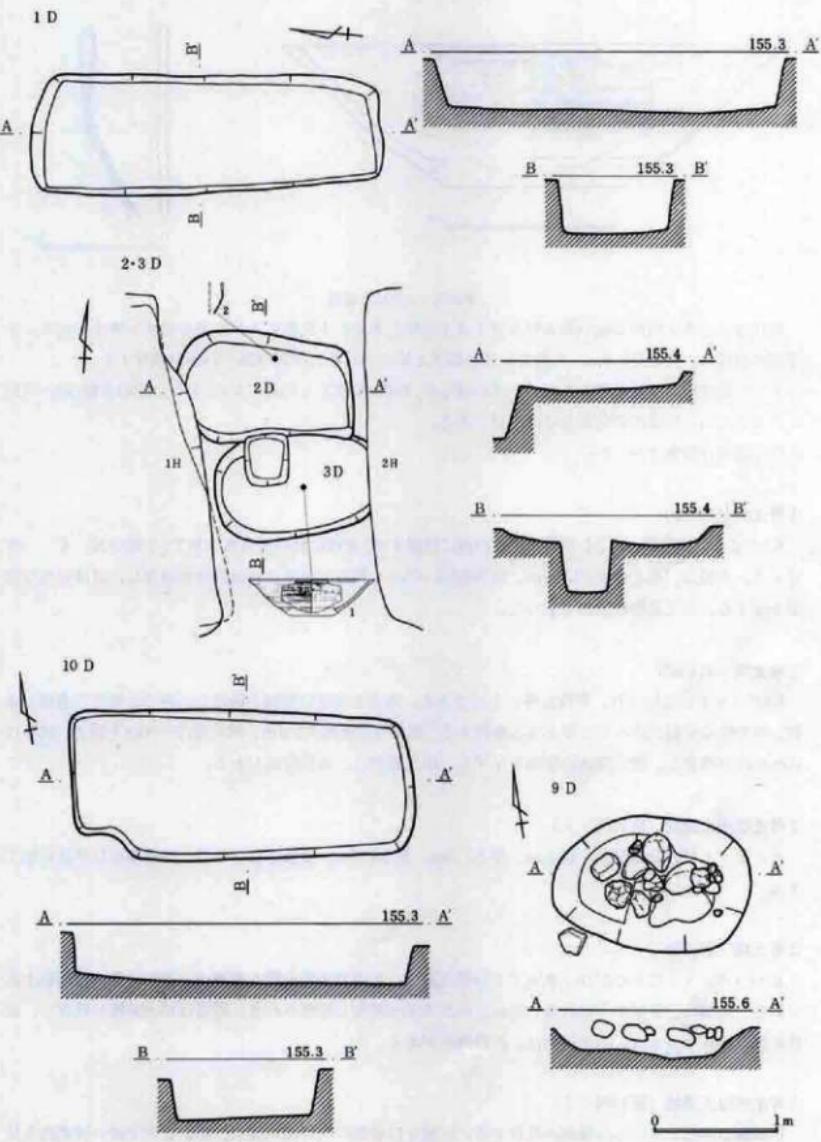
調査区の中央やや北東寄り、L6グリットに検出され、標高155.50m前後に構築されている。南東方向に8号土坑や4号竖穴造構等が集中して配されている。

形状は、東西に長い隅丸方形を呈する主室と南方に張り出す入り口部を付す。規模は、主室部の東西最大長2.5m、入り口部から主室部北壁まで3m、張り出し長は東辺で80cm、西辺で1mと食い違い、最大幅1.1mを測る。入り口の主軸はN-7°-Eにとる。

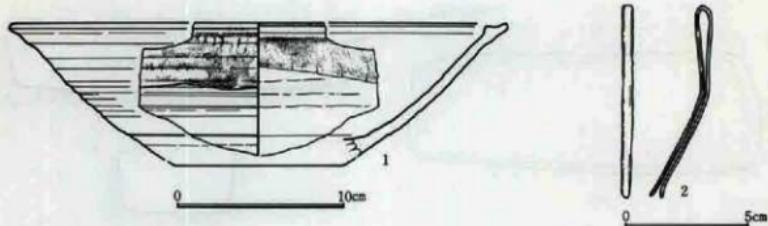
壁面は垂直気味とし、主室部の壁高は50~71cmが残存する。入り口部分には段状のテラスが設けられている。主室部の床面はほぼ平坦とする。出土遺物は皆無であった。

#### 4号竖穴造構 (第41図)

K6・7グリットにその主体を占め、標高155.40m前後に構築されている。南辺部に5~7号土坑、東辺の張り出し部で8号土坑が重複する。



第42圖 1~3號・9・10號土坑



第43図 土坑出土遺物

形状は、北東～南西に長い長方形を呈する主室部と東辺の中央部に入り口部を付すと考えられる。主室部の規模は、長軸長2.8m、短軸長5.15m前後と推定される。壁高は56～74cmが残存する。

入り口部はその左壁と考えられる一部が残るが、形状、規模とも明確でない。入り口部の主軸はN—135°—Sにとる。主室部の床面はほぼ平坦である。

出土遺物は皆無であった。

#### 1号土坑（第42図）

K3グリットに包括され、1号竪穴造構の西に位置する。東西に長い長方形土坑で、主軸はN—6°—Wにとる。規模は、南北最大長2.85m、東西幅90～95cmを測る。壁高は40cm前後が残存し、ほぼ平坦な底面を呈する。出土遺物は皆無であった。

#### 2号土坑（第42図）

L4グリットに包括され、東西に長い土坑である。東で2号竪穴造構と隣接し、西で1号竪穴造構と重複、南で柱穴状掘り込みと3号土坑と重複する。規模は、東西長1.4m、南北長75～90cmを測る。壁高は10cm前後が残存し、浅い皿状の底面を呈する。出土遺物は、金属製品がある。

#### 2号土坑出土遺物（第43図—2）

ピンセット状の金属製品。幅4mm、厚さ1.5mm、長さ7.7cm、重量3gである。先端部をU字状に加工する。

#### 3号土坑（第42図）

K・L4グリットにまたがり、東辺で2号竪穴造構、北辺で2号土坑と重複する東西に長い楕円形土坑である。規模は、形状から東西長1.35m、南北長80cm前後と推察される。壁高は10cm前後が残存し、皿状の掘り込みを呈する。出土遺物は、折縁鉢片がある。

#### 3号土坑出土遺物（第43図—1）

折縁鉢の体部下半から口縁部が残存する。灰釉を口縁部の内外面に施す。胎土は密で淡い灰褐色を呈する。練籠水引き整形後、体部下半に回転ヘラ削りを施す。

#### 4号土坑（第40図）

K・L5グリットにまたがり、2号竪穴遺構の東辺で重複する東西に長い長方形土坑である。2号竪穴遺構との新旧関係は、4号土坑が後出の所産であるが、底面に検出された1号柱穴群に拘わる柱穴との新旧関係は不明である。

規模は、東西長2.6m、南北長1.65m前後を測る。壁高は30~38cmが残存し、底面は中央部分がやや窪む皿状を呈する。出土遺物は皆無であった。

#### 5号土坑（第41図）

K6グリットに包括され、4号竪穴遺構の南西部で重複する。形状は、南北にやや長い隅丸方形を呈し、規模は、南北長1.8m、東西長1.6mを測る。壁高は50cm前後が残存する。底面はほぼ平坦である。出土遺物は皆無であった。

#### 6号土坑（第41図）

K6・7グリットにまたがり、4号竪穴遺構と重複する。形状は、東西に長い長方形を呈する。規模は、東西長3.2m、南北長1.2m前後を測る。壁高は40cm前後が残存する。底面は平坦である。出土遺物は皆無であった。

#### 7号土坑（第41図）

K6グリットに包括され、4号竪穴遺構、5・6号土坑と重複する。南辺と西辺の一部が残存するのみであるが、形状は方形を呈すると考えられる。規模は明確でない。壁高は47cmほど残存する。出土遺物は皆無であった。

#### 8号土坑（第41図）

K7グリットに包括され、4号竪穴遺構と重複する。形状・規模とも明確を欠く。北辺部で75cmの壁高が残存する。出土遺物は皆無であった。

#### 9号土坑（第42図）

L6グリットに包括され、3号竪穴遺構と4号竪穴遺構間の傾斜変換部に検出された。形状は東西に長い楕円形を呈する。規模は長軸長1.6m、短軸長1.08mを測る。底面は有段があり東方が窪み、最深部で25cmを測る。上面に河床礫が混入している。出土遺物は皆無であった。

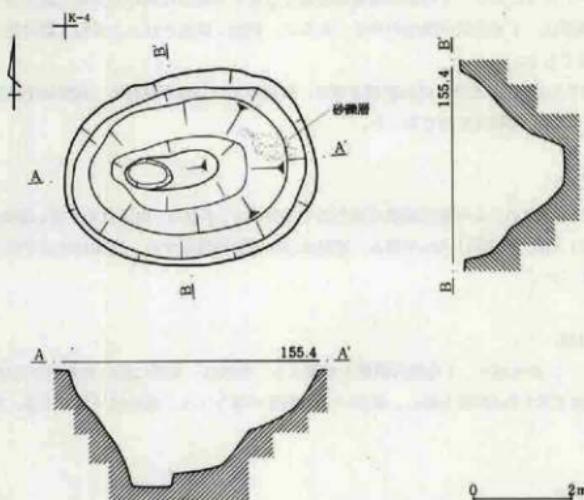
#### 10号土坑（第42図）

J5・6グリットにまたがり、標高155.20mの平坦部に位置する東西に長い長方形土坑である。規模は東西長2.75m、南北1.1~1.2mを測る。南北隅は入り隅状となっていることから作り替えの可能性が考えられる。壁高は28~36cmが残存する。出土遺物は皆無であった。

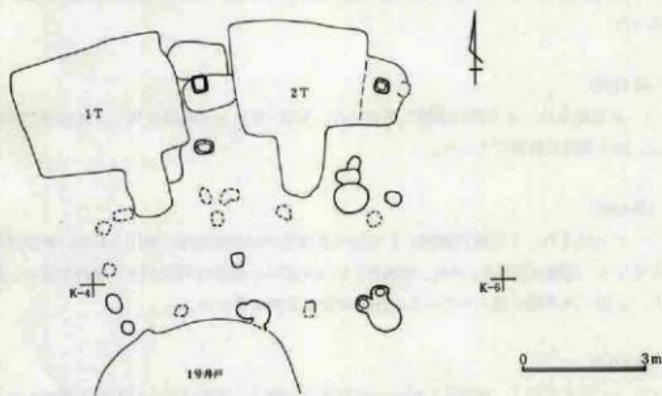
#### 11号土坑（第48図）

I6グリットに包括され、2号柱穴群内に検出された。形状は、東西に長い隅丸方形を呈する。規模は長

軸長1.6m、短軸長1.2mを測る。壁高は25cm前後が残存する。出土遺物は皆無であった。



第44図 1号井戸

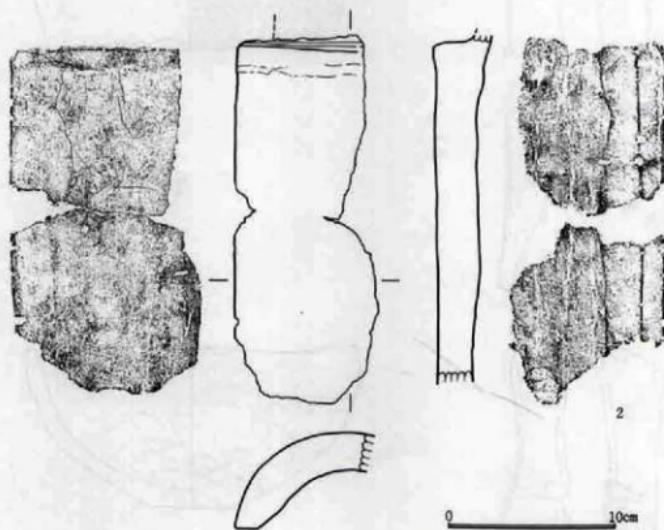
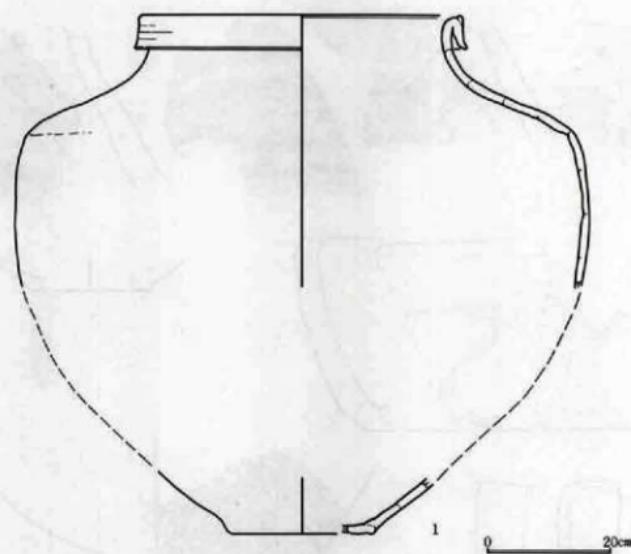


第45図 1号柱穴群

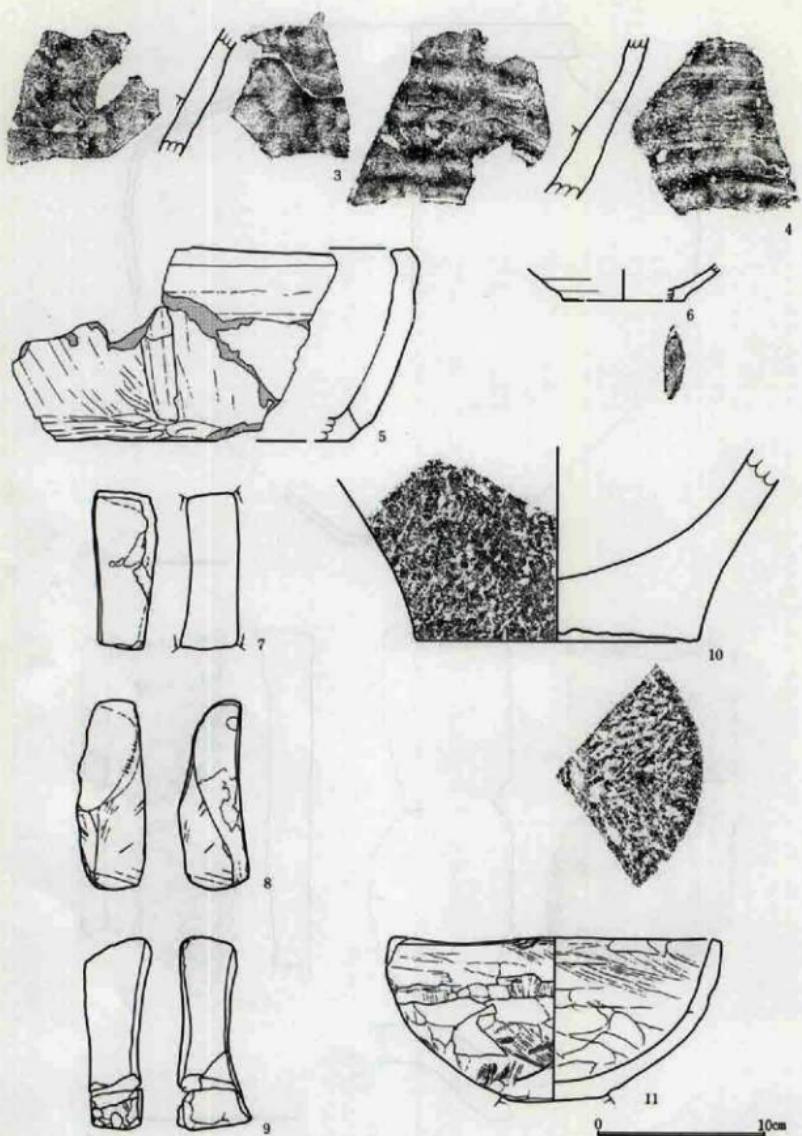
#### 1号井戸（第44図）

調査区のほぼ中央、J4グリッドに検出され、標高155.20m前後の平坦部に構築されている。北方には1号柱穴群、竪穴遺構群と土坑群、南東方向に石組を伴う2号柱穴群が配されている。

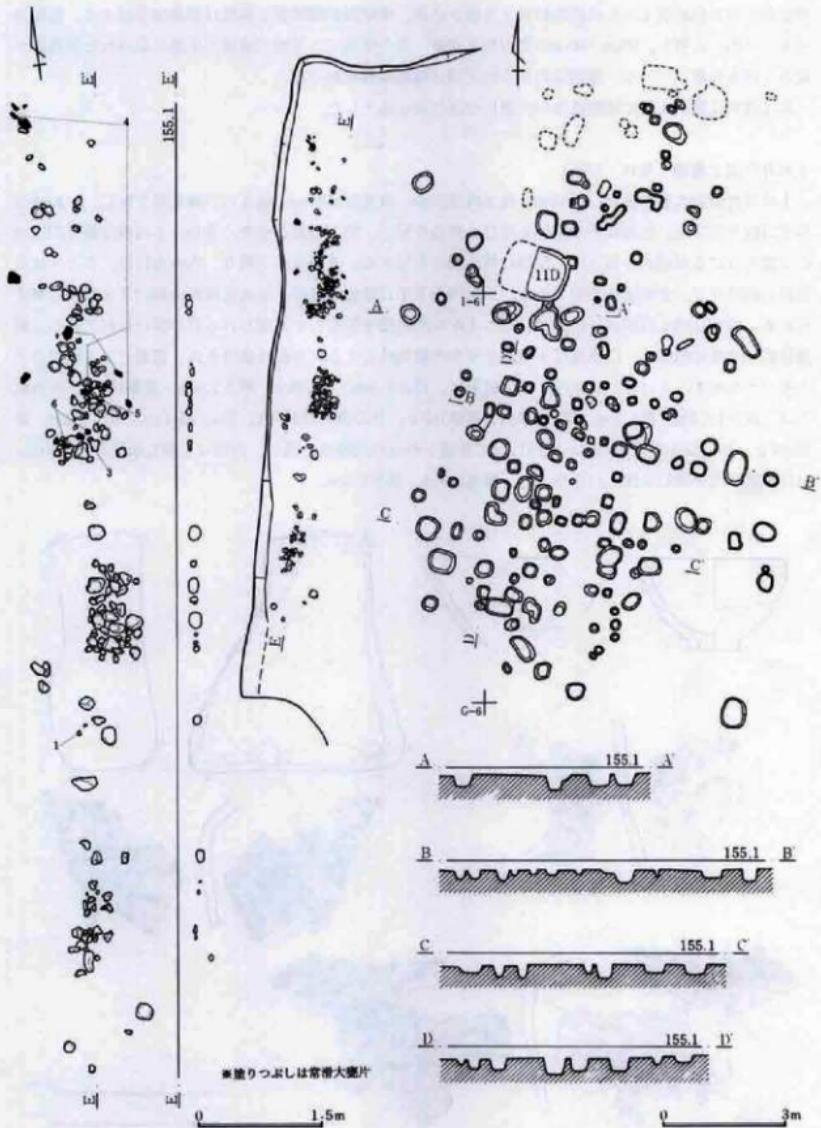
形状は、東西に長い楕円形を呈する。規模は長軸長5.05m、短軸長3.9m、最深部で2.15mを測る。



第46図 1号井戸出土遺物 (1)



第47図 1号井戸出土遺物 (2)



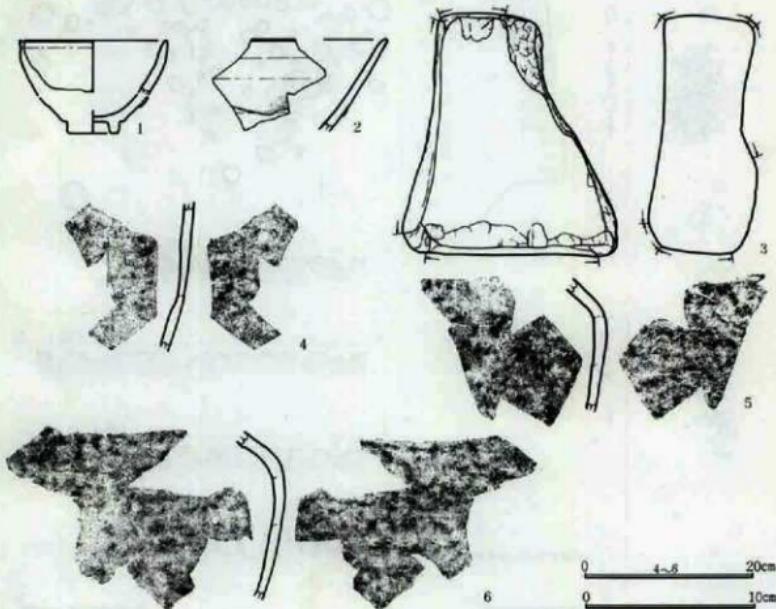
第48図 2号柱穴群

検出面の黄褐色砂質土から灰白色粘質土を掘り込み、東壁面が階段状で他壁は摺鉢状を呈する。底面は中央より西方に有り、90cm×60cmの楕円形とする。東の壁面で2号竪穴造構の床面に見られた砂礫層が統き、湧水を導いている。施設に拘わる出土物は確認されなかった。

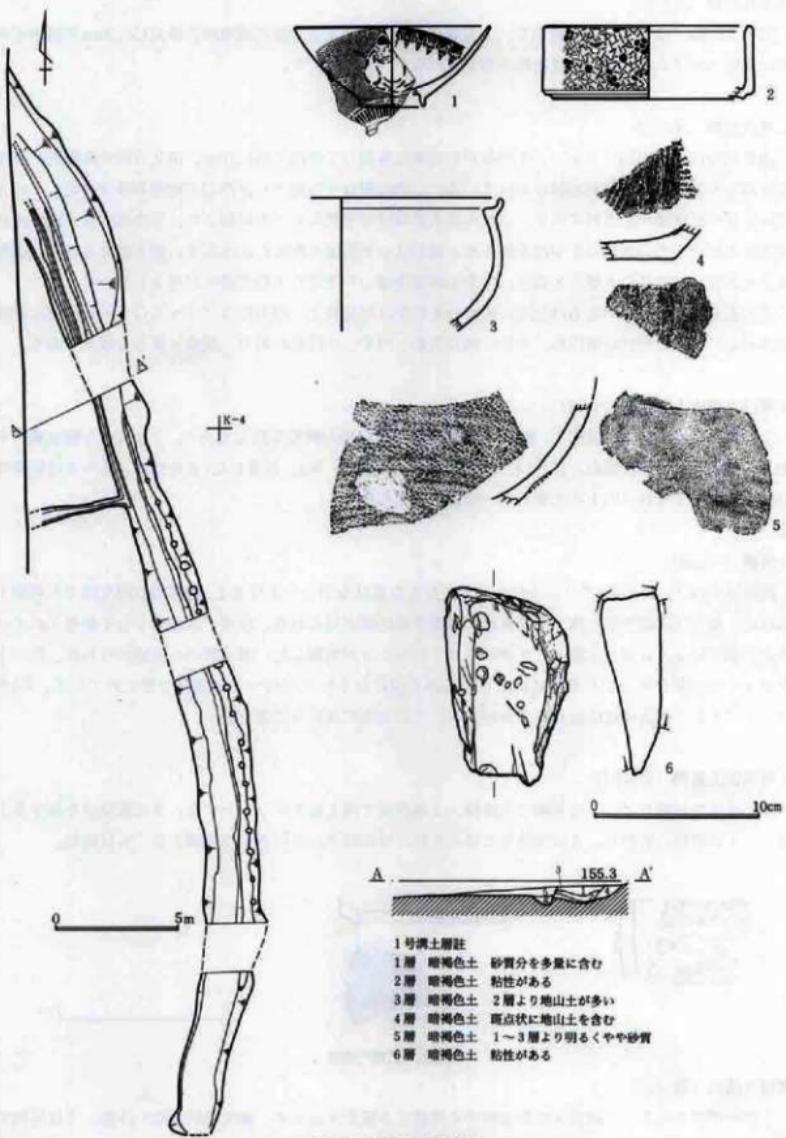
出土遺物は埋土上面で常滑焼きの大甕片や瓦片等が出土した。

#### 1号井戸出土遺物（第46・47図）

1は常滑焼の大甕。復元口径51cm、復元底径23cm。復元器高84cm。幅広の口縁部を有し、いわゆるN字口縁を呈する。色調はやや紫色を帯びる褐色を呈し、胎土に長石を多く含む。2は残存長さ22.2cmの玉縁を設ける有段式の男瓦片。色調は黒灰褐色を呈する。表面はヘラ削り、内面布目痕。3と4は瓦器質の捏鉢片で、全体像は不明である。3の内面下半は摩滅の痕跡。5は瓦器質の脚付き火鉢片と考えられる。僅かに残る底部は砂目底で、立ち上がり部に脚を装着したと思われる孔が開けられている。胴部は直立気味に内湾し、口唇部は平坦部をやや内傾気味とする。外面は研磨され、指頭による級位のアクセントを施す。6はカワラケ片。7の砥石は、長さ9.5cm、幅3.8cm、厚さ3.5cm、重量185g。8の砥石は、長さ11.4cm、幅4.1cm、厚さ4.2cm、重量192g。9の砥石は長さ11.7cm、幅4cm、厚さ4.4cm、重量207g。10は安山岩質の石臼。底径17cmで底部と外面は調整痕を残し、内面は丁寧に研磨されている。11は古墳時代の碗形土器。口径18.8cm、器高9.9cm、底径5.5cm。



第49図 2号柱穴群出土遺物



第50図 1号溝・出土遺物

### 1号柱穴群（第45図）

J4・5、K4・5グリットに跨がり、1号井戸の北方と1・2号竪穴遺構間の標高156.30m前後の平坦部に構築されている。掘立柱建物跡が想定されるが、明確を欠く。

### 2号柱穴群（第48図）

調査区のはば中央J5グリット、1号井戸の南東に隣接して東西方向に10m、南北方向に直線的に22m程を測るL字形区画の段差が設けられている。この内部は平坦面とし、西辺の段差とほぼ併走して長さ12mに亘り河床礫が配されている。これらの大半はほぼ平坦なレベルに配され、中央部には方形気味に集中する部分とその南北に集中部が見られ、礫石状に平坦面を据えた20cm前後の礫も散見される。遺物は、北方寄りに常滑の大甕片と磁石、中央の礫集中部のやや南に天目茶碗片が出土している。

この東方には柱穴群が北方は北辺の段差のものがほぼ延長上、南方部はグリットGライン付近の範囲に広がる。柱穴の形状は梢円形、方形、隅丸方形、円形、小円形があり、規模・深さも様々である。

### 2号柱穴群出土遺物（第49図）

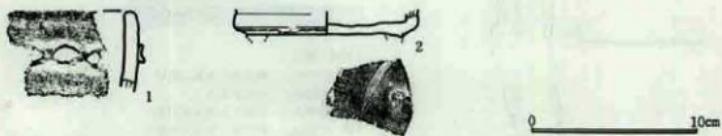
1は瀬戸天目茶碗の口縁部片。復元口径は8.8cm。灰白色の緻密な胎土である。2は灰釉を施す瀬戸平碗。3は砂岩質の置き砾石。長さ14.5cm、幅12.9cm、厚さ6.4cm、重量1,427gを測る。4～6は常滑焼の大甕片で、1号井戸出土の大甕と同一個体と考えられる。

### 1号溝（第50図）

調査区の西辺、M2～E4グリットにかけて緩やかな弧状を呈して走行する。調査前の現況図でも判明する様に、調査区の南西部と南部の東西に地割りの区画が見られる。現状では桑園として使用されているが、調査により以前は田圃として使用されていたことが判明した。溝は数回の改修が行われ、J3～4グリット間の東立ち上がり部分には、しがらみを設けた小柱穴が80～1m間隔で穿たれている。E4グリットポイント付近には砂溜めの窪みがあり、その先端には南方に溝が続く。

### 1号溝出土遺物（第50図）

1と2は型紙摺りで、1は茶碗で大黒様、2は段重で桜と梅をプリントする。3は蓋受けを有する土鍋片。4は摺鉢の底部片。5は火鉢片と考えられ、外面は平行に叩き目を充填する。6は砥石。



第51図 遺構外遺物

### 遺構外遺物（第51図）

1は平口縁を呈し、口縁部下に指頭押圧を連続する隆帯を巡らす。縄文時代後期の所産。2は灰釉を施す香炉形の陶器片。底部は糸切り後に調整を施し、3ヶ所に足を付すと考えられる。

## 第V章 群馬県内出土の埋納銭（備蓄銭）等と上大屋中組出土銭について

渡来銭の出土は、墓壙（六道銭の性格をもの）、溝、城館跡、経塚銭、備蓄銭等が知られていますが、県内では本遺跡の様に、豊穴遺構からのまとった出土は初見です。

過去に出土枚数の多い古銭一覧は、教材「群馬県の歴史－中世編－」（桜場 1981）に15例が報告され、筆者も太田市史の編纂事業に拘わる機会を得て、「牛沢出土の古銭について」（山下 1997）に2万枚以上の大量一括出土銭の分類と若干の考察を報告し、上記報告例を基礎に追加事例を含め23例を報告した。

大量出土の埋納銭（渡来銭）は、管見によると大正7年に多野郡小野村大字中栗須宿屋敷（現在の藤岡市中栗須字宿屋敷）が最古の報告であり、昭和50年代半ばまでの多くは、工事中や農作業中等の偶然の発見が大半であり、詳細報告は僅かであった。銭=お金になるとの風潮や珍しさから発掘以外の発見では工事関係者等に持ち去られる事が多く、現在では散逸を免れて僅かに一部が残るケースも多い。これららの状況を考慮すれば、他にも出土例は存在すると考えられる。

近年に至っては、発掘調査による出土例等が報告され、調査報告書や市町村史編纂事業に於いて分類や考察等が掲載される様になった。こうした資料増加もあり、再考を加えて群馬県内の中世に拘わる出土量の多い埋納銭の35例を紹介し（群馬県内出土の埋納銭等一覧）、若干の考察を試みる。

これらの出土地点は、中世の屋敷跡・城館跡・寺院跡等に拘わる地域からの出土が多く見られる。その最大出土量の埋納銭は、水沼出土銭（資料16）の総数49,215枚がある。しかし、古牧馬小学校出土銭（資料4）の常滑焼の大甕からは、それを超える枚数が推定される。第2次大戦に供出されて全体量は不明であるが、容器の大甕は器高67.6cm、口径47.3cm、胴部最大径71.6cmの法量があり、出土写真から推察しても10万枚前後の枚数が考えられる。

総数が1万枚を越えるもの（註1）の多くは、常滑焼きの甕や壺、木箱、樽等の容器に埋納されている。これらの事例は全国的な出土例から判断しても、その大半は「縛銭」の状態で容器に収納したことから、備蓄を目的とした行為と考えられる。備蓄銭の規定（櫻木 1994）に関しては、「中世の一括出土する大量の銭貨（一貫文=1,000枚以上）と規定して使用すれば問題ない」としている。

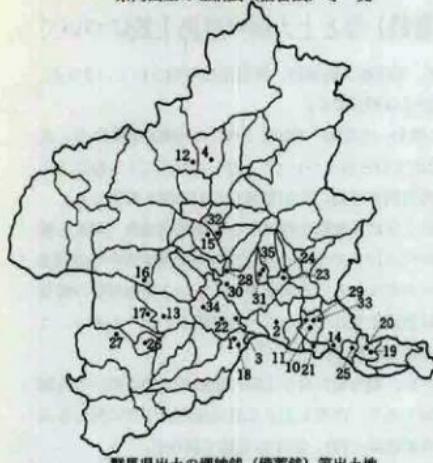
県内の特殊な事例としては、瀬戸焼の合子に50枚の渡来銭を埋納した木崎出土銭（資料10）がある。宗教儀礼と考えられる行為による奉賽銭と推察される。

この他には、土坑、石室、溝等からの出土がある。土坑からの出土銭は、袋状等のものに収納された可能性が考えられ、堤頭遺跡出土銭（資料23）では、何を急いだのであろうか？ごく浅い振り込みに比較的簡単に携帯できる883枚の「縛銭」を埋納している。

南町出土銭（資料15）は、稀な石室からの出土例である。この石室の規模は縦1.1m、横1.25m、深さ2mと報告されているが、石室の詳細な記載はない。出土状況は、「縛銭」で裸のままとされている。散逸の為に全体量は不明であるが、上記と同様に一時的な「隠し金」を意識した行為と推察されよう。溝からは、通常纏まつた「縛銭」での出土例は少ない。下東西遺跡出土銭（資料28）では、1縛の状態に近い出土が見られる。この出土状況を神谷（1993）は「一遍聖絵」の市場の中に市場で品物を購入しようとする男が縛繩に通した銭貨を携帯しており、当時銭貨を縛綱での状態で携帯していたことが窺え、出土遺構も溝であることから携帯していたものを遺失したと推定している。

県内の中世遺跡での豊穴住居跡や地下式土坑、溝、柱穴等からの出土例では、僅かな枚数であるが、本遺跡の約1貫文に近い枚数が豊穴遺構からの出土した事例は、流通史を考える上でも貴重である。

### 県内出土の埋納銭（備蓄銭）等一覧



群馬県出土の埋納銭（備蓄銭）等出土地

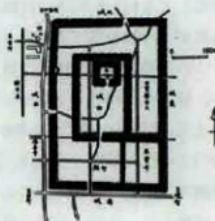
- 1 多野郡小野村大字中栗須宿屋敷249番地
- 2 伊勢崎市茂呂町飯玉神社
- 3 群馬郡高川村大字板井
- 4 利根郡月夜野町古馬小学校
- 10 新田郡新田町木崎170番地
- 12 利根郡新治村上羽場
- 13 安中市原市久昌寺西2923-2番地
- 14 太田市牛沢 15 渋川市金井南町1024番地
- 16 群馬郡倉渕村水沼 17 雪水郡松井田町小日向
- 18 藤岡市上戸塚林木142-6番地
- 19 芝原郡邑楽町中野前原3680番地
- 20 芝原郡邑楽町中野埴堀2256番地
- 21 新田郡尾島町大館字茶洗屋1532番地
- 22 高崎市上佐野寺前
- 23 助多郡柏川村大字一市字堤頭211番地
- 24 助多郡柏川村膳字八幡124番地
- 25 邑楽郡大泉町大字上小泉字満願寺
- 26 岩原市原386-1番地 27 甘楽郡下仁田町上小坂
- 28 前橋市青葉子町字清水上
- 29 新田郡新田町市野井本郷489-2番地
- 30 前橋市元總社町字草作
- 31 幸多郡大胡町茂木山ノ前713-1番地
- 32 北群馬郡子持村白井字南中道
- 33 新田郡新田町村田 34 高崎市豊岡後原
- 35 幸多郡大胡町上大屋ノ組

資料1. 宿屋敷出土銭多野郡小野村大字中栗須宿屋敷249番地（現在の藤岡市中栗須字宿屋敷）

- (1)発見年月日 大正7年(1918)2月19日
- (2)発見場所 煙
- (3)出土状況 陶製の蓋施錠1尺、身高8寸3分、口径5寸、底面4寸5分、胴径9寸5分、蓋高3寸2分、上径5寸3分、下径6寸5分
- (4)出土枚数 3,714枚(3,689枚)
- (5)銭種 51種(52種)
- (6)最古銭名 開元通寶
- (7)最新銭名 宣德通寶
- (8)出 典 駿河國及び上野國發掘の古銭 考古學雜誌9卷5号 1919日本考古学会
- (9)備 考 東京帝室博物館で保管

資料2. 飯玉神社出土銭伊勢崎市茂呂町飯玉神社

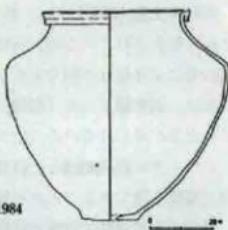
- (1)発見年月日 大正10年(1921)
- (2)発見場所 茂呂城外郭内、神社境内の大権の根元を伐採した時、根元から出土
- (3)出土状況 壺
- (4)出土枚数 14,251枚
- (5)銭種 59種
- (6)最古銭名 開元通寶
- (7)最新銭名 洪順通寶
- (8)出 典 古銭二萬枚を提出する上毛及上毛人第50号1921上毛縣土史研究会  
伊勢崎市史・通史編1原始 古代 中世1987伊勢崎市  
日本出土銭貨一覽日本考古學雜誌1962東京堂出版
- (9)備 考 永樂通寶が5割近く比率を占め、安南銭の洪順通寶(1509)を検出している。



那波城(山崎一氏作図)

資料3. 板井出土銭群馬郡高川村大字板井（現在の高崎市大字鳴川字板井）

- (1)発見年月日 大正14年(1925)2月1日 (2)発見場所 県道工事中
- (3)出土状況 田の地下4尺
- (4)出土枚数 約1,300枚残存(数万枚が推測される)
- (5)銭種 38種
- (6)最古銭名 貨泉
- (7)最新銭名 永樂通寶
- (8)出 典 關東縣亮色する支那の古銭に就て上毛及上毛人 第96号 1925上毛縣土史研究会
- (9)備 考 附記群馬の歴史・中世編と北田先生史編では玉井坂坂下が玉井坂坂下とするが玉井坂坂下の誤りである。



常滑焼大甕窯調査図

資料4. 古馬牧小学校出土銭利根郡月夜野町古馬牧小学校

- (1)発見年月日 昭和7年(1932)3月7日
- (2)発見場所 小学校増築工事中
- (3)出土状況 常滑焼第IV期(14世紀後半~15世紀初頭)の大甕に埋納され出土
- (4)出土枚数 不明 古銭は、第2次大戦時に供出。
- (5)銭種 不明
- (6)最古銭名 不明
- (7)最新銭名 不明
- (8)出 典 古馬牧村誌 相模京建史・中沢悟利根郡月夜野町古馬牧小学校出土の大甕「上毛野」創刊号1984
- (9)備 考 当地は曹洞宗玉泉寺の末寺である龍昌庵の跡地。

活用協会)によると、昭和15年10月～同16年3月末迄に行われ、「古銭類は無数なりしも其中判明せる分のみにても島根県の山本まつ姫より推算八十萬枚を供出されたる外、天理教本郷より約三十萬枚に及べり」と記し、供出集荷写真が掲載されている。

- 資料5、小林出土越山田郡休泊村大字下小林(現在の太田市下小林町)  
(1)発見年月日 昭和9年 (2)発見場所 不明 (3)出土状況  
(4)出土枚数 約一万余枚 (5)銭 種 不明  
(6)最古銭名 開元通寶 (7)最新銭名 永樂通寶  
(8)出 典 上毛新聞昭和19年1月20日付(確認できず) (9)備 考
- 資料6、旧生品村出土越群馬県旧生品村(現在の新田郡新田町村田・市野井・小金井・反町ほか)  
(1)発見年月日 不明 (2)発見場所 不明 (3)出土状況 不明  
(4)出土枚数 2,829枚 (5)銭 種 52種  
(6)最古銭名 開元通寶 (7)最新銭名 宣德通寶  
(8)出 典 日本書古学辞典 1962 東京堂出版 (9)備 考
- 資料7、旧荒砥村出土越群馬県旧荒砥村(現在の前橋市)  
(1)発見年月日 不明 (2)発見場所 不明 (3)出土状況 不明  
(4)出土枚数 2,347枚 (5)銭 種 51種  
(6)最古銭名 開元通寶 (7)最新銭名 世高通寶  
(8)出 典 日本書古学辞典 1962 東京堂出版 (9)備 考 皇朝銭の万年通寶を検出。
- 資料8、旧宝泉村出土越群馬県旧宝泉村(現在の太田市大字宝泉と新田郡新田町の一帯)  
(1)発見年月日 不明 (2)発見場所 不明 (3)出土状況 不明  
(4)出土枚数 4,217枚 (5)銭 種 52種  
(6)最古銭名 開元通寶 (7)最新銭名 世高通寶  
(8)出 典 日本書古学辞典 1962 東京堂出版 (9)備 考
- 資料9、旧中野村出土越群馬県旧中野村  
(1)発見年月日 不明 (2)発見場所 不明 (3)出土状況 不明  
(4)出土枚数 13,028枚 (5)銭 種 57種  
(6)最古銭名 開元通寶 (7)最新銭名 万国通寶  
(8)出 典 日本書古学辞典 1962 東京堂出版 (9)備 考
- 資料10、木崎出土新田郡新田町木崎170番地  
(1)発見年月日 昭和39年頃 (2)発見場所 倒溝工事中 (3)出土状況 合子に内蔵  
(4)出土枚数 50枚 (5)銭 種 17種  
(6)最古銭名 開元通寶 (7)最新銭名 嘉泰通寶  
(8)出 典 新田町誌 第2巻 資料編(上) (9)備 考 實費銭
- 資料11、花香塚出土越新田郡新田町花香塚西859-1番地  
(1)発見年月日 昭和42年(1967)10月26日 (2)発見場所 県道倒溝工事中、集会所脇の火の見櫓のそば。  
(3)出土状況 地下60cmの所に木箱に埋納されて出土  
(4)出土枚数 1,290枚残存 (5)銭 種 55種  
(6)最古銭名 開元通寶 (7)最新銭名 宣德通寶  
(8)出 典 新田町誌・第二巻「資料編」(上) 1987新田町  
(9)備 考 安南銭の天保鑄寶が1枚、開元通寶に方穿を大きく円穿にした加工銭が出土。總数の3割程度が残存し、他は工事関係者が持ち去った。
- 資料12、上羽場出土越利根郡新治村上羽場  
(1)発見年月日 昭和43年(1968)3月7日 (2)発見場所 蔵の運動場 (3)出土状況 椅に埋納され出土  
(4)出土枚数 23,400枚 (5)銭 種 不明  
(6)最古銭名 不明 (7)最新銭名 不明  
(8)出 典 教材群馬の文化財一中世編—1981 群馬県教育委員会  
上毛新聞昭和43年3月9日  
(9)備 考 出典には銭名として永楽・寛宗・洪武・熙寧・元祐・祥符・開元等を記す。出土地は「城の平」と呼ばれている。太田市史通史編での発見年月日を昭和3年としたが昭和43年の誤りである。
- 資料13、久昌寺西出土越安中市原市久昌寺西2923-2番地  
(1)発見年月日 昭和43年(1968)7月8日 (2)発見場所 宅地造成中に出土 (3)出土状況 不明  
(4)出土枚数 約10,000枚(散逸) (5)銭 種 不明  
(6)最古銭名 不明 (7)最新銭名 不明  
(8)出 典 教材群馬の文化財一中世編—1981 群馬県教育委員会

(9) 考 安中市では、中野谷字西本郷敷でも備蓄銭と考えられる出土があったと安中市教育委員会大工原豊氏にご教授を受けた。

資料14、牛沢出土銭太田市牛沢

- (1)発見年月日 昭和44年(1969)  
(2)発見場所 真言宗成願寺西の県道小島・太田線側溝工事中。  
(3)出土状況 木箱に埋納されていたと思われる。  
(4)出土枚数 22,700枚以上  
(5)銭種 67種  
(6)最古銭名 開元通寶  
(7)最新銭名 世高通寶  
(8)出 典 山下誠信「牛沢出土の古銭について」 太田市史 通史編 中世 1997 太田市  
(9)備 考 皇朝銭の隆平永寶と富壽神寶、鳥銭、加工銭、模鋳銭等を検出。

資料15、南町出土銭波川市金井南町1024番地

- (1)発見年月日 昭和44年(1969) 7月26日  
(2)発見場所 梅沢得八氏の石室内  
(3)出土状況 銀銭のまま。  
(4)出土枚数 3,281枚が残存  
(5)銭種 48種  
(6)最古銭名 開元通寶  
(7)最新銭名 朝鮮通寶  
(8)出 典 波川市誌 第2巻 通史編・上 原始・古代 1993 波川市  
(9)備 考 波川市立図書館に保管

資料16、木沼出土銭群馬郡食瀬村木沼

- (1)発見年月日 昭和45年(1970) 9月7日  
(2)発見場所 橋樋工事中  
(3)出土状況 不明  
(4)出土枚数 49,215枚  
(5)銭種 不明  
(6)最古銭名 不明  
(7)最新銭名 不明  
(8)出 典 教材群馬の文化財―中世編―1981群馬県教育委員会(9)備考

資料17、小日向出土銭鐵井郡松井田町小日向

- (1)発見年月日 昭和45年(1970) 11月11日  
(2)発見場所 桧木根越しの農作業中  
(3)出土状況 不明  
(4)出土枚数 235枚  
(5)銭種 不明  
(6)最古銭名 不明  
(7)最新銭名 不明  
(8)出 典 教材群馬の文化財―中世編―1981群馬県教育委員会  
(9)備 考 銭種の内訳として、景元(景祐元寶か景祐元寶)、政和(政和通寶)、至元(至元通寶か至和元寶)、皇宋(皇宋通寶か皇宋元寶)、慶元(慶元通寶)、祥符(祥符元寶か祥符通寶)、大觀(大觀通寶)、乾元(乾元重寶)、太平(太平通寶)、宣和(宣和通寶)、至和(至和通寶か至和通寶)、嘉祐(嘉祐元寶)、聖宋(聖宋元寶)等を上げている。

資料18、株木遺跡出土銭藤岡市上戸理株木142-6番地

- (1)発見年月日 昭和46年(1971) 6月22日  
(2)発見場所 小林一立石線の側溝工事中  
(3)出土状況 瓦に埋納  
(4)出土枚数 1,576枚  
(5)銭種 48種  
(6)最古銭名 開元通寶  
(7)最新銭名 宣德通寶  
(8)出 典 B4株木遺跡発掘報告書付属株木遺跡出土古銭1984藤岡市教育委員会  
(9)備 考 報告書には加治木系ビタ銭が若干含まれていると記しているが、疑問である。  
銭種に聖宋通寶の分類があるが、拓図から皇宋通寶の誤認と考えられる。

資料19、前原出土銭邑楽郡邑楽町中野前原3680番地

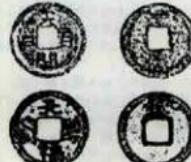
- (1)発見年月日 昭和47年(1972) 4月24日  
(2)発見場所 農作業中  
(3)出土状況 瓦に埋納されて出土  
(4)出土枚数 約1,500枚  
(5)銭種 約50種  
(6)最古銭名 不明  
(7)最新銭名 不明  
(8)出 典 教材群馬の文化財―中世編―1981 群馬県教育委員会(9)備考

資料20、坂場出土銭邑楽郡邑楽町中野埴塚2256番地

- (1)発見年月日 昭和52年(1977) 10月20日  
(2)発見場所 農作業中  
(3)出土状況 常滑焼の壺に埋納  
(4)出土枚数 1,7991枚  
(5)銭種 不明  
(6)最古銭名 不明  
(7)最新銭名 不明  
(8)出 典 邑楽町誌上 歴史編 第二章 中世  
(9)備 考 常滑焼の壺は16世紀初と考えられ、銭種の内訳は淳平・景祐・大中・祥符・天聖などがある。

資料21、茶洗屋出土銭新田郡尾島町大館字茶洗屋1532番地

- (1)発見年月日 昭和54年(1979) 8月20日  
(2)発見場所 農作業  
(3)出土状況 不明  
(4)出土枚数 2,408枚  
(5)銭種 56種  
(6)最古銭名 開元通寶  
(7)最新銭名 朝鮮通寶  
(8)出 典 教材群馬の文化財―中世編―1981 群馬県教育委員会  
(9)備 考 鳥銭の天開通寶と安南銭の天福鎌寶が見らる、この2点の拓本資料と銭種等は、尾島町教育委員会のご教授により掲載する。



資料22. 下佐野遺跡出土銭高崎市上佐野寺前

- (1)発見年月日 昭和55年(1980) (2)発見場所 発掘調査 (3)出土状況 土坑  
(4)出土枚数 5,992枚 (5)銭 種 49種  
(6)最古銭名 開元通寶 (7)最新銭名 宣徳通寶  
(8)出 典 下佐野遺跡 I地区・寺前地区(4中世・近世編)1989群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団  
(9)備 考 県内では最初の発掘調査での検出事例である。銭種別順位で永楽通寶が1位を占める。

資料23. 堀頭遺跡出土銭勢多郡柏川村大字一日市字堀頭211番地

- (1)発見年月日 昭和55年(1980) 10月～同56年1月 (2)発見場所 発掘調査 (3)出土状況 浅い土坑  
(4)出土枚数 883枚 (5)銭 種 44種  
(6)最古銭名 開元通寶 (7)最新銭名 洪武通寶  
(8)出 典 堀頭遺跡 昭和55年度県営圃場整備事業柏川地区に係る堀頭文化財発掘調査報告書(2) 1988柏川村教育委員会  
山下信蔵  
勢多郡柏川村「堀頭遺跡」出土の埋納銭について群馬文化219号  
(9)備 考 帯銭状態で出土し、無文銭が見られる。

資料24. 八幡出土銭勢多郡柏川村膳字八幡124番地

- (1)発見年月日 不明 (2)発見場所 須藤静太郎氏、聖天洞跡で発掘 (3)出土状況 不明  
(4)出土枚数 2,065枚 (5)銭 種 不明  
(6)最古銭名 不明 (7)最新銭名 不明  
(8)出 典 柏川村文化財目録 柏川村誌 1972 柏川村 (9)備 考 現在、県へ提出中。県の預かり書。

資料25. 満願寺出土銭邑楽郡大泉町大字上小泉字満願寺

- (1)発見年月日 不明 (2)発見場所 不明 (3)出土状況 常滑焼の壺(高さ58.9cm、幅57.8cm)  
(4)出土枚数 約10,000枚 (5)銭 種 不明  
(6)最古銭名 不明 (7)最新銭名 不明  
(8)出 典 教材群馬の文化財一中世編-1981 群馬県教育委員会  
群馬県史通史編3中世  
(9)備 考

資料26. 原出土銭富岡市原386-1番地

- (1)発見年月日 不明 (2)発見場所 不明 (3)出土状況 不明  
(4)出土枚数 16,650枚 (5)銭 種 不明  
(6)最古銭名 不明 (7)最新銭名 不明  
(8)出 典 教材群馬の文化財一中世編-1981群馬県教育委員会(9)備 考 県立博物館保管

資料27. 上小坂出土銭甘楽郡下仁田町上小坂

- (1)発見年月日 不明 (2)発見場所 工事中 (3)出土状況 不明  
(4)出土枚数 約10,000枚 (5)銭 種 不明  
(6)最古銭名 不明 (7)最新銭名 不明  
(8)出 典 教材群馬の文化財一中世編-1981 群馬県教育委員会  
群馬県立歴史博物館常設展示解説  
(9)備 考 群馬県立博物館常設展示一中世コナに展示。  
展示解説では、44種に分類(開元通寶～紹定通寶)している。

資料28. 下東西遺跡出土銭前橋市青葉子町字清水上

- (1)発見年月日 昭和58年2月7日～同59年3月5日 (2)発見場所 発掘調査 (3)出土状況 溝(SD-32)  
(4)出土枚数 73枚 (5)銭 種 25種  
(6)最古銭名 開元通寶 (7)最新銭名 永楽通寶  
(8)出 典 下東西遺跡一間越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第16集-1987財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
(9)備 考

資料29. 本郷出土銭新田市野井本郷489-2番地

- (1)発見年月日 昭和60年(1985) 4月6日 (2)発見場所 系井和仁氏、牛蒡作付けの農作業中  
(3)出土状況 20×30cmの円形、深さ15cmほどの土坑  
(4)出土枚数 3,970枚 (5)銭 種 55種  
(6)最古銭名 四銭半兩 (7)最新銭名 成淳元寶  
(8)出 典 新田町誌・第二巻「資料編」(上) 1987 新田町  
(9)備 考 発見場所は本郷B遺構とされ、孫兵衛屋敷(油屋)といわれた居館跡。鎌倉時代末から南北朝時代に埋納され、新田氏一族に関わりが深い在地領主層の蓄蔵銭の可能性を想定している。

## 資料30. 草作遺跡出土銭前橋市元郷社町字草作

- (1)発見年月日 平成元年(1989) 再調査 (2)発見場所 (3)出土状況 不明  
 (4)出土枚数 不明 (5)銭種 不明  
 (6)最古銭名 不明 (7)最新銭名 不明  
 (8)出 典 展示解説「前橋市内出土の古銭」  
 文化財調査報告書第20集 前橋市教育委員会  
 (9)備 考 以前に大量の出土銭貨があり、その地点を再調査。開元通寶、太平通寶などの北宋銭、嘉定通寶と淳祐通寶の南宋銭、洪武通寶と永樂通寶の明銭が出土した。一点、治平元寶(1080~天正・元禄)が含まれるとしている。

## 資料31. 山ノ前出土銭勢多郡大胡町茂木山ノ前713-1番地

- (1)発見年月日 平成2年(1990) 3月18日 (2)発見場所 煙 (3)出土状況 特に埋納  
 (4)出土枚数 約30,000枚 (5)銭種 不明  
 (6)最古銭名 不明 (7)最新銭名 至大通寶?  
 (8)出 典 (9)備 考 現在、整理中。

## 資料32. 南中道遺跡出土銭北群馬郡西白井字南中道

- (1)発見年月日 平成2年(1990) 4月 (2)発見場所 白井南中道遺跡、ローム探掘坑 (3)出土状況  
 (4)出土枚数 447枚 (5)銭種 35種  
 (6)最古銭名 開元通寶 (7)最新銭名 淳熙元寶  
 (8)出 典 白井遺跡群一中世編(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡)1993年法團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 (9)備 考 いくつか誤脱が見られる。無文銭・模鋳銭・加工銭が含まれる。

## 資料33. 村田出土銭新田郡新田町村田

- (1)発見年月日 平成3年(1991) 2月 (2)発見場所 新田生品住宅地建設工事中 (3)出土状況  
 (4)出土枚数 (5)銭種  
 (6)最古銭名 (7)最新銭名  
 (8)出 典 新田町の遺跡町内遺跡詳細分布調査報告書 1998 新田町教育委員会  
 (9)備 考

## 資料34. 後原出土銭高崎市豊岡後原

- (1)発見年月日 平成6年(1994) (2)発見場所 中豊岡市宮住宅の改築工事中 (3)出土状況  
 (4)出土枚数 602枚 (5)銭種  
 (6)最古銭名 (7)最新銭名  
 (8)出 典 大西雅広群馬県出土銭貨情報出土銭貨第3号 (9)備 考

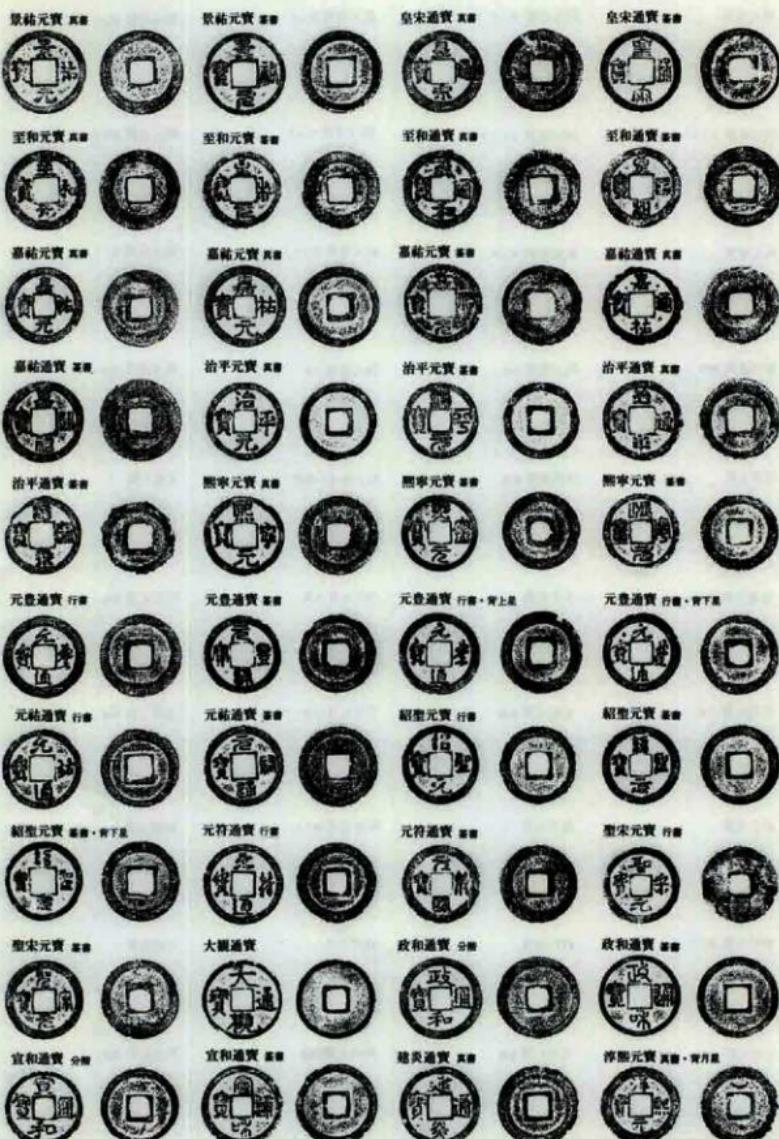
## 資料35. 中組遺跡出土銭勢多郡大胡町上大屋中組

- (1)発見年月日 平成9年(1997) (2)発見場所 土地改良事業に伴う発掘調査 (3)出土状況 整穴遺構  
 (4)出土枚数 942枚 (5)銭種 43種  
 (6)最古銭名 開元通寶 (7)最新銭名 咸淳元寶  
 (8)出 典 本報告書 (9)備 考

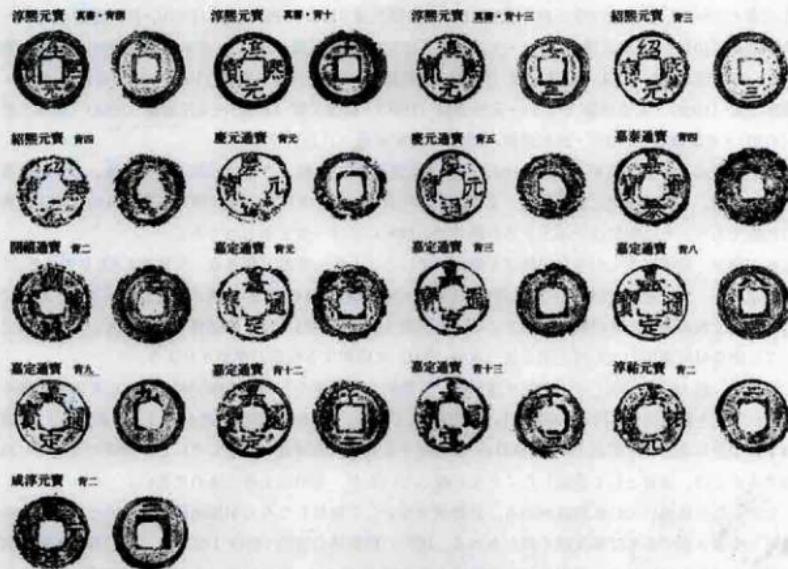
開元通寶	乾元重寶	持符元寶	天禧通寶	天聖元寶	皇宋通寶	嘉祐元寶	嘉祐通寶
萬聖元寶	元祐通寶	元祐通寶	紹聖元寶	聖宋元寶	政和通寶	洪武通寶	永樂通寶
市野井・本郷	F	J	K	A	I	E	L N M H
上大屋中組	F	J	K	I	A	E	L N M C
堤頭	F	J	I	K	A	E	L M N C
株木	F	J	A	I	O	P	K L C D E
太田牛沢	F	J	P	K	I	A	O E L N
南中道	P	F	J	K	A	I	O G N E
花香塚・西	P	O	J	F	I	A	K E L N M
藤岡市中郷須 宿敷數	P	O	F	A	J	K	I N E L
下佐野	P	F	J	K	I	A	O E M L
尾島町大館	P	J	F	I	K	A	E O L M
生品村	P	F	J	I	O	K	A E B N



第52圖 1號竖穴道構出土古錢銅種（1）



第53圖 1號堅穴鑄構出土古錢錢種（2）



第54図 1号竖穴道構出土古錢鉢 (3)

こうした出土銭の大半は、中国からの渡来銭であるが、朝鮮銭、琉球銭、安南銭や我が国の皇朝十二銭（註2）、私鋳銭、島銭、加工銭を含んでいる。

本遺跡では古文銭・金・元、明、琉球銭等の出土は無く、唐銭3種、後周銭1種、南唐銭2種、北宋銭28種、南宋銭9種と模鋳銭が検出された。

『古文銭』 前漢時代の八銖半両・四銖半両、新時代の大泉五十・貨泉、後漢時代の五銖等が知られている。その出土率は低いが、本郷出土銭（資料29）では4千枚以下の残存でも四銖半両一枚と五銖が5枚出土し、永樂通寶を最新銭とする板井出土銭（資料3）では約1,300枚の出土銭の中に貨泉が見られる。参考として大量の出土銭では無いが、太田市の大塚・間之原遺跡確認調査（宮田 1981）で検出された土壙から貨泉2枚・宣和通寶2枚・布泉1枚の六道銭として埋納した出土銭（註3）がある。

『唐銭』 開元通寶は、初唐開元（621）・会昌開元（845）と南唐時代に鑄造された南唐開元（960）に分類される。初唐開元は元等の書体で細分され、背面には月・星等の場変わりがあり多種に及ぶ。出土枚数は61枚で5位である。会昌開元は紀地銭とも称され、背面に鑄造地の地名の一文字がある。その地名は22種類があり、本土出土銭に潤・洛・鄆・梓の4種が出土している。

乾元重寶（758）は開元通寶の10倍に当たる10文銭として鑄造され、背面の月の場変わりがある。全体の7.6%を占める。

『後周銭』 周通元寶（955）の1種1枚が出土。

『南唐銭』 唐國通寶（959）と上記した南唐開元と称される篆書の書体である開元通寶がある。

『北宋銭』 全体の87%を占める。出土した銭種は28種である。宋通元寶（960）・太平通寶（976）・淳

化元寶（990）・至道元寶（995）・咸平元寶（998）・景德元寶（1004）・祥符元寶（1009）・祥符通寶（1009）・天禧通寶（1017）・天聖元寶（1023）・明道元寶（1032）・景祐元寶（1034）・皇宋通寶（1038）・至和元寶（1054）・至和通寶（1054）・嘉祐元寶（1056）・嘉祐通寶（1056）・治平元寶（1064）・治平通寶（1064）・熙寧元寶（1068）・元豐通寶（1078）・元祐通寶（1086）・紹聖元寶（1094）・元符通寶（1098）・聖宋元寶（1101）・大觀通寶（1107）・政和通寶（1111）・宣和通寶（1119）がある。

出土枚数は、1位が皇宋通寶の131枚、2位は元豐通寶の108枚、3位は元祐通寶の86枚、4位は熙寧元寶の84枚、6位は天聖元寶の53枚、7位は紹聖元寶の39枚、8位は政和通寶の37枚、9位は聖宋元寶の29枚であり、その順位は全国出土銭の統計値の傾向にほぼ一致するものである。

『南宋錢』 背面に多くが年号の数字を鋲出していることから番錢と称される。全体の2.8%を占める。

『琉球錢』 大世通寶（1454）・世高通寶（1461）・金圓世寶（1470）の3種が知られているが、県内では現在まで世高通寶のみが検出されている。牛沢出土銭（資料14）は世高通寶を最新銭とし、備蓄銭としては徳島県阿南市出土の長生出土銭（永井 1994）に匹敵する枚数が推察されよう。

皇朝十二銭（阿部 1997）は、古墳や住居跡、宗教的な場所等からの出土例が報告され、その機能論や土器の年代を探る好例（中沢 1990）として使用されている。県内の大量埋納銭からは、荒砥村出土銭（資料7）で万年通寶、牛沢出土銭（資料14）から隆平永寶と富壽神寶が出土している。中世の流通銭に混在することは、銭貨として流通したことを示唆しているが、その出土率は極めて低い。

上記した官鋳銭の他に私鋳銭がある。官鋳銭を型として鋲写したものが模鋳銭であり、それを数次の鋲写しを繰り返すことで無文銭を鋲たされる。国内の模鋳銭の特徴（鷲谷 1997）は、銭の背面が縁や郭の段差をほとんど持たない平坦に近い状態のものや銭の「薄さ」、科学分析から見た金属組成の特徴をあげている。その出現は、鈴木氏の最新銭区分（鈴木 1992）の第2期に当たる14世紀第一～第三四半期から登場するとされている。県内では最新銭を世高通寶とする牛沢出土銭（資料14）には、黒褐色の肌を呈し、銭径が2.1～2.3cmの無文銭が10枚以上出土している。洪武通寶とする堤頭遺跡出土銭（資料23）、淳熙元寶とする南中道遺跡出土銭（資料32）と咸淳元寶とする本遺跡（資料35）等に見られる。

後者の2ヶ所は出土枚数が少ないために、その埋蔵年代の判断は造構等との総合的な判断が要求されるが、可能性としては、第1期区分（鈴木他 1992）に該当するかも知れない。今後の資料増加に結論を委ねたい。

私鋳銭には島銭と称されるものもある。銭銘をまねたり、公鋳銭にはない銭銘を独特の書体で製作したものである。牛沢出土銭（資料14）で4枚の太平通寶と茶洗屋出土銭（資料21）で天開通寶が検出された。今後、資料分析の行われていない大量出土銭からの検出は可能性があり、分類作業が待たれる。

加工銭は、鋳造された銭貨の流通時に加工を施したものである。筆者も牛沢出土銭（資料14）で6種の分類を行っている。その代表的な事例を紹介する。

1、削銭と称され銭銘を削除するもので、琉球銭の大世通寶と世高通寶は永楽通寶の「永楽」の2字を削去して「大世」、「世高」の文字を嵌め込んで鋲出したもので、この行為による私鋳銭が鋲出された可能性も考えられる。

2、肌に小孔を穿つもので、小孔の数や場所、大きさ等で多種である。

3、雨乞い銭（大謙 1978）と称されるもので、中央から輪に向かって放射状に溝を刻みを施す。雨乞いの神事に際して神仏に供えたものとされ、この風習は古くから各地にあったとされる。今後は、民俗事例や宗教事例の照合により、明確な意図が解明されよう。

4、穿孔を加工するもの。方形の郭を削り円形としたもので、この行為は寛永通寶（註4）にも見られる。近年、穿孔形に星形のものを取り上げる報告（神谷他 1993）が散見され、これを加工銭とかダミー銭であろうとの見解がある。私見としては、郭孔の仕上げ時に鑿が45°ほど擦れることにより生じたと判断する。鋳造時から星形の郭を意図すれば、その行為は面と背にも星形の郭が存在すると考えられるが、背の郭は方形であることから、作業工程で生じたものと推察される。

5、切銭、磨輪銭と称されるもの。切銭は縁の一部を削り取る行為を施したもの。磨輪銭は、特に折二の様に一文銭より一回り大きな銭貨の縁を削り、一文銭と同様な大きさに整形されたものが多い。一文銭にも磨輪銭があるが、細縁との明確な区別から判断しなければならない。

この他に、小孔と穿孔を加工する組み合わせ等が見られる。

これらの埋納銭の埋蔵時期の推定には、出土銭の最新の鋳造年代を持つ銭貨により、時代区分の設定が試みられている。「出土渡来銭の埋没年代」（是光 1985）での4期5区分、「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」（鈴木 1992）では埋蔵銭の数量的分析結果と分析資料を取り入れ8期区分、「埋蔵時期の推定と最新銭」（永井 1994）では9期の区分を行っている。三者の区分を要約したのが出土銭埋蔵年代区分表である。

第6表出土銭埋蔵年代区分表

最新銭名	是光区分	鈴木区分水井区分	
成淳元寶(1265)	第1期 (14世紀前半)	第1期 (13世紀第四四半期中心)	第1期 (13世紀第四四半期～14世紀第一四半期中心)
至大通寶(1310)	第2期 (14世紀後半)	第2期 (14世紀第二四半期中心)	第2期 (14世紀第三四半期中心)
洪武通寶(1368)	第3期1類	第3期 (14世紀第四四半期中心)	第3期 (14世紀第四四半期中心)
永楽通寶(1408)	〃	第4期 (15世紀第二四半期中心)	第4期 (15世紀第一四半期～第二四半期中心)
朝鮮通寶(1423)	〃	第5期 (15世紀第三四半期中心)	第5期 (15世紀第二四半期中心)
宣德通寶(1433)	〃 (15世紀後半～16世紀前半)	第6期 (15世紀第四四半期～16世紀第一四半期中心)	第6期 (15世紀第三四半期中心)
大世通寶(1446)	第3期2類 (16世紀後半)	第7期 (16世紀第二四半期中心)	第7期 (15世紀第三四半期以降)
弘治通寶(1488)	〃	第8期 (16世紀第三四半期中心)	第8期 (15世紀第四四半期以降)
洪順通寶(1509)	〃		
寛永通寶(1626)	第4期		第9期 (16世紀第二四半期以降)

県内の事例は未報告が多く、報告がされていても散逸が多い為に信頼性に乏しい資料である。この状態を加味して最新銭貨を分類し、三者の埋蔵年代区分に準拠して埋蔵年代を推測する。

南宋銭の最新銭名のものは、南中道遺跡出土銭（資料32）の淳熙元寶（1174）が1例、奉賛銭と考えられる木崎出土銭（資料10）の嘉泰通寶（1201）1例、本郷出土銭（資料29）と本遺跡（資料35）は成淳元寶（1265）の2例である。奉賛銭を除く3例は土坑状の掘り込みに埋納され、出土枚数も5,000枚以下であり、模倣銭が2例に見られる。これらは三者の分類では、共通して第1期に分類され、13世紀第四四半期～14世紀第一四半期に該当する。しかし、永井分類では至大通寶の検出率が1/5,000以下と判断した場合、14世紀第三四半期までの可能性を示唆している。県内の事例も5,000枚以下の総数の為に、出土率の少ない至大通寶を含んでいない可能性が考えられるので、13世紀第四四半期～14世紀第三四半期と埋蔵年代と推察する。現在整理中ではあるが、山ノ前出土銭（資料31）は、至大通寶が最新銭である可能性が高い。総数は30,000枚前後と推定されるが至大通寶の出土率は極めて少いことは、永井氏の示唆を暗示させる。

明銭と朝鮮通寶の最新銭名での区分は、是光分類が第3期1類として洪武通寶～宣徳通寶の間とし、

埋蔵年代を15世紀後半～16世紀前半とした。鈴木分類と永井分類は、洪武通寶・永樂通寶・朝鮮通寶・宣德通寶を第3～6期の共通錢貨としているが、洪武通寶を除いて微妙な埋蔵年代の擦れが見られる。

県内の事例では、洪武通寶（1368）が堤頭遺跡出土錢（資料23）の1例、永樂通寶（1408）は板井出土錢（資料3）、小林出土錢（資料5）、下東西遺跡出土錢（資料28）の3例、宣德通寶（1433）は宿屋敷出土錢（資料1）、花香塚出土錢（資料11）、上羽場出土錢（資料12）、株木出土錢（資料18）、下佐野遺跡出土錢（資料22）の5例と一番多い。李氏朝鮮の朝鮮通寶（1423）は南町出土錢（資料15）と茶洗屋出土錢（資料21）の2例がある。

洪武通寶は14世紀第四四半期を中心とする埋蔵年代、永樂通寶は15世紀第二四半期前後、朝鮮通寶と宣德通寶は15世紀後半～16世紀前半の埋蔵年代と推察する。該期は、その出土枚数も5,000枚を超えるものが多く、頑丈な壺・壺・木箱に埋納される事例が見られる。そして、14世紀第四四半期までには見られなかった島銭が検出されている。

琉球銭の世高通寶（1454）は、旧荒砥村出土錢（資料7）、旧宝泉村出土錢（資料8）、牛沢出土錢（資料14）の3例があり、埋蔵年代は三者三様の年代を提示しているが、16世紀前後と推察して見たい。

安南銭の洪順通寶（1509）は飯玉神社出土錢（資料2）の僅か1例あり、その埋蔵年代は16世紀半ば前後としたい。

この埋蔵年代の推定は、出土錢の最新錢名のみに準拠したものであり、その実年代は絶対的なものでないことは論を挙げない。今後、遺構や埋納器の壺・壺等の製作年代との資料対比の積み上げにより、緻密な埋蔵年代が推察されよう。

(註1) 鈴木氏は、千枚以上の備蓄銭は1994年4月現在で、173例の存在が知られていると報告している。

(註2) 阿部氏は、皇朝十二銭の呼称に対して、「古代の官銭」の呼称を提唱している。

(註3) 宮田氏は、元来同種2枚ずつの6枚の存在を想定し、布泉をもつてると子宝に恵まれるという信仰があったようであり、被葬者（子供）の再生を願って預納したものと推察している。

(註4) 群馬県では、大島上城遺跡（1988 群馬県埋蔵文化財調査事業団報告 第78集）・神保上松遺跡（1997 群馬県埋蔵文化財調査事業団報告 第214集）で出土している。

#### 主要参考・引用文献

- 1978 大鎌淳正 古錢語事典 日本貨幣商協同組合
- 1981 宮田 毅 大塚・間之原遺跡確認調査の概要—第2次調査（白金・櫻戸・大塚・高原地区）— 太田市教育委員会
- 1985 特集・出土渡来銭研究の現況 考古学ジャーナル7 No.249.
- 1985 飯田孝他 厚木市史資料叢書1 厚木の埋蔵古銭 厚木市役所
- 1990 中沢悟他 研究紀要—7— 財團法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 1992 鈴木公雄 「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」 「史學」（第61巻 第3・4号） 三田史学会
- 1994 鈴木公雄他 第5回「考古学と中世史研究」シンポジウム「中世」から「近世」—中世考古学及び隣接学から— 筑波大学人間文化研究所
- 1994 永井久美男他 中世の出土銭—出土銭の調査と分類— 兵庫埋蔵銭調査会
- 1997 阿部義平・鷲谷和彦他 お金の玉手箱—銭貨の列島2000年史— 財團法人歴史民族博物館振興会
- 1997 関孝一他 西条・岩船遺跡発掘調査報告書 中野市教育委員会
- 1997 谷藤保彦 神保城遺跡 関越自動車道（上越線）地盤埋蔵文化財発掘調査報告書 第41集 財團法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

## 第VI章 上大屋天王山遺跡

本遺跡は、上大屋中組遺跡の東方に町道を挟んで広がる低台地上に選地する。E調査区の標高159mほどから緩慢な南北方向への傾斜を呈し、B調査区の南西でその先端部が標高154mとなる。台地の東方から南方にはその大半を水田として利用されている旧河道の低地が続く。

検出された遺構は、古墳時代の住居跡、西方の中組遺跡と拘わると考えられる中世の地下式土坑、住居跡、溝を検出した。古墳時代の住居跡は、E調査区の北方にも広がると推察される。

### 検出された遺構と遺物（第56図～第68図）

#### 1号住居跡（第56図）

A調査区のG13グリットにその大半を占め、標高156.80m前後の平坦部に検出された。西方で重複する2号住居跡によって半分程が破壊されている。形状は、北東～南北方向に長い方形を呈する。規模は長軸辺が約3.9m、短軸辺3.3m前後を測り、長軸の主軸はN-53°-Eにとる。壁面は20cm前後が残存する。床面は平坦な硬化面で、炭化材が散在して残る。中央やや南よりには焼土が分布する。周溝は検出されなかった。柱穴は東辺に沿いP1とP2を検出したがその帰属は不明である。貯蔵穴は明確を欠く。遺物の残存は僅かであり、壁沿いに出土した。

#### 1号住居跡出土遺物（第57図）

1は小形甕片で、口縁は短く内湾し、やや胴長の球形を呈する胴部とする。最大径は胴部中位にある。復元口径15.6cm、残存器高16.7cm。口縁部は横撫で、胴部の内外面はヘラケズリの調整。色調は淡い黄褐色～黒褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成は良好。2は小形甕で、口縁は直線的に開き、やや下膨れの球形胴部とする。最大径は胴部中位にある。口縁口径12.3cm、器高13.6cm、底径4.2cm、胴部最大径18.3cm。胴部上半分はヘラミガキ、下半分はヘラケズリの調整。色調は褐色を呈し、胎土は粗砂粒を含む。焼成は良好。3は高壺の柱状脚部で、外面はヘラミガキの調整。色調は淡い黄褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は良好。4は砂岩質の砥石で火受けが見られる。長さ9.8cm、幅8.1cm、厚さ5.4cm、重量648g。

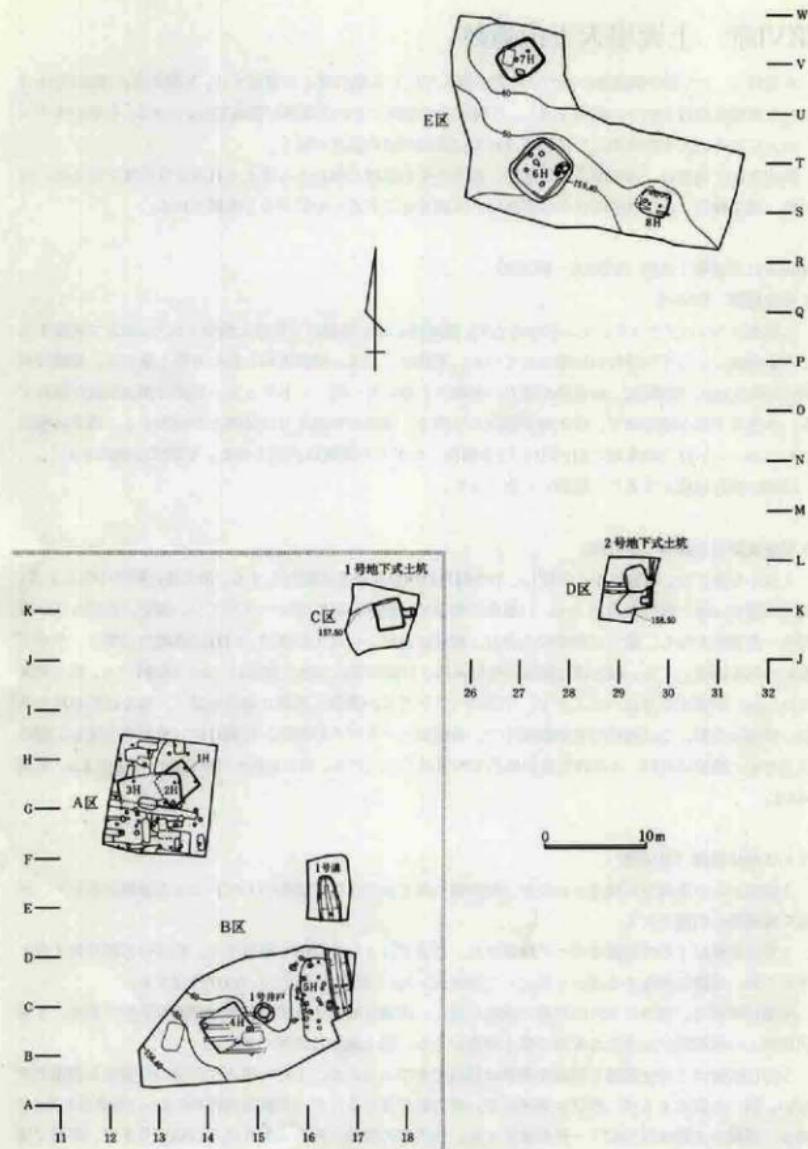
#### 2・3号住居跡（第56図）

A調査区の中央部分に検出されたが、耕作溝や長方形の土坑（通称いも穴）による破壊が著しく、形状や規模等の明確を欠く。

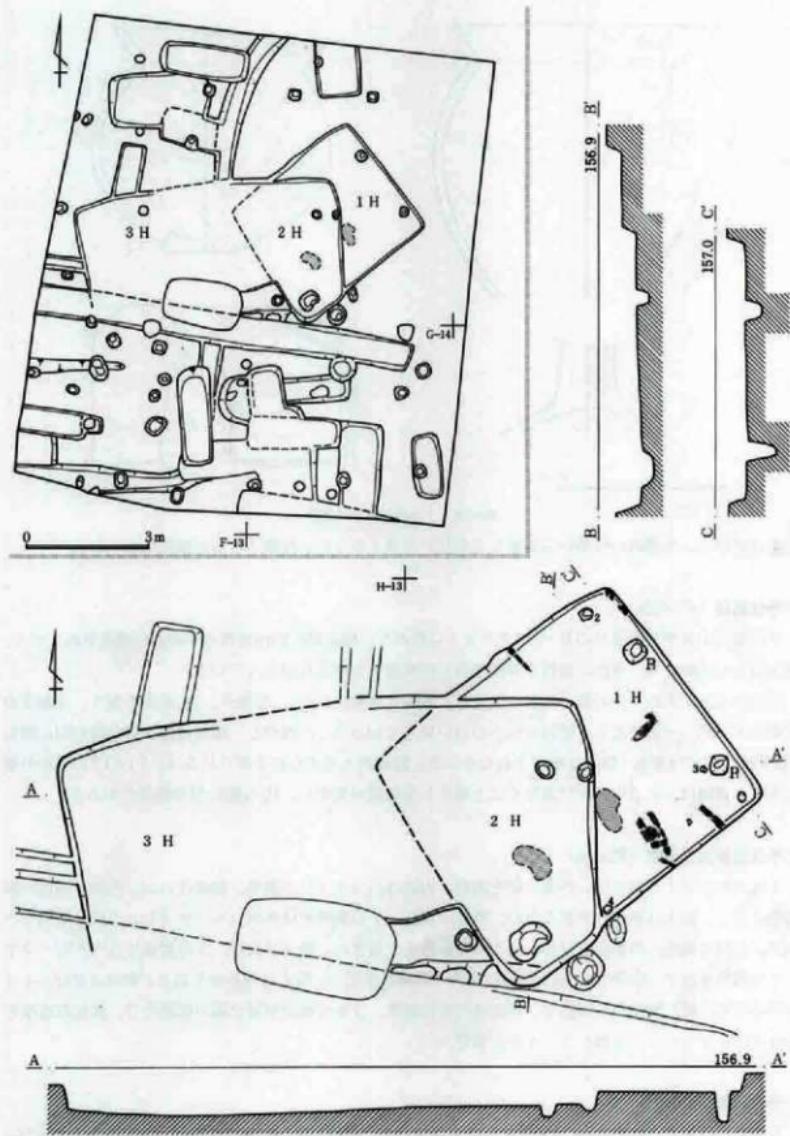
2号住居跡は1号住居跡を切って構築され、西方では3号住居跡と重複する。形状は方形を呈すると考えられ、規模は残存する辺から推定して南北長3.3mを測り、北辺で2.7mが残存する。

床面は平坦で、西方の3号住居跡の床面に統く。周溝は検出されず、柱穴の帰属は不明である。1号住居跡との重複部分に当たる床面に焼土分布がある。出土遺物は皆無であった。

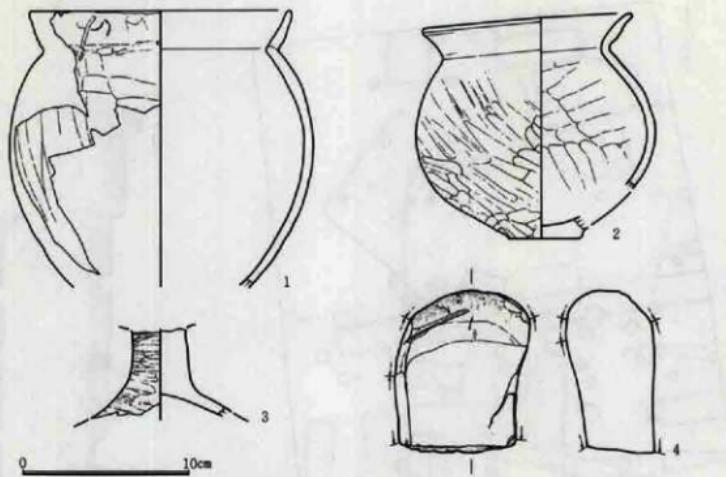
3号住居跡は2号住居跡と明確な差異は見いだせなかつたが、1軒の竪穴住居跡の可能性も否定できない。同一と仮定するば、形状は東西に長い長方形を呈する。その規模は東西長6.3m、南北長3.3mを測る。長軸の主軸はN-82°-E前後にとる。柱穴等の施設に拘わる掘り込みは検出できず、床面で僅かな古錢と判断される破片が出土した。



第55图 上大屋天王山道路全体图



第56図 A区全体図・1～3号住居跡



第57図 1号住居跡出土遺物

本住居跡は、本遺跡の性格から判断して中世に帰属するものと推察されるが根据に乏しい。

#### 4号住居跡（第58図）

B調査区中央やや西寄りのB・C14グリットに跨がり、標高156.55m前後の平坦部に構築されている。検出面から床面には、東西に走る耕作溝と南東部分に攪乱孔が及んでいる。

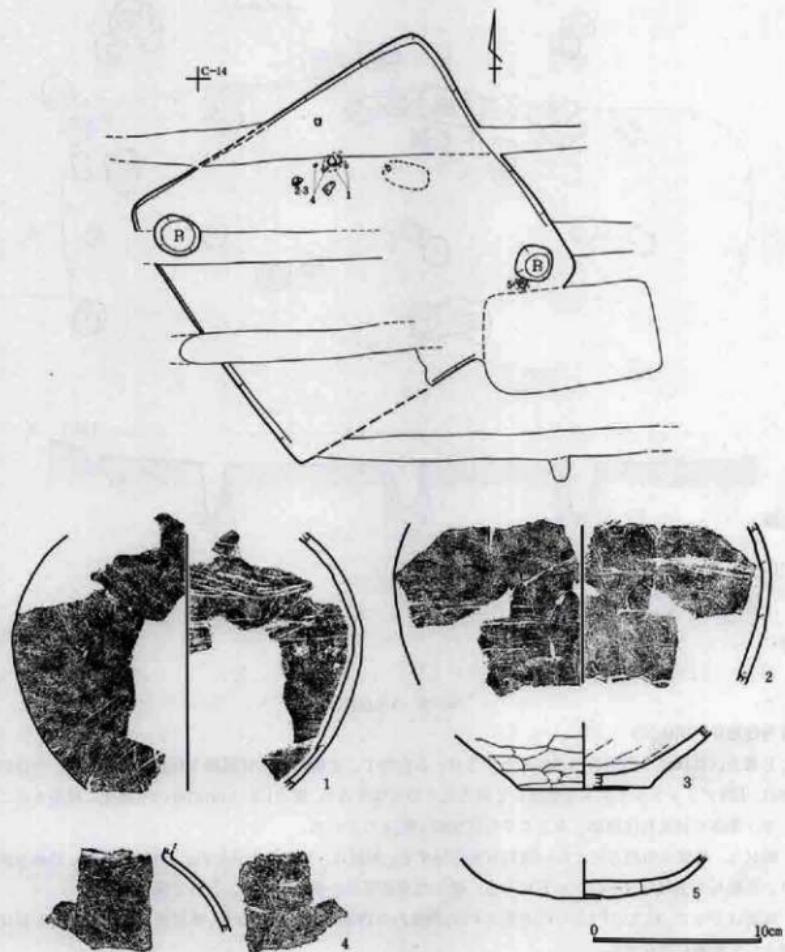
形状は北東～南西方向に長い方形を呈する。規模は長軸長4.2m、短軸長3.7m前後を測り、長軸長の主軸はN-55°—Eとなる。壁面は残存の良い東辺で10cmほどが残存し、床面は僅か耕作溝の間に硬化面が残る。周溝・炉址・柱穴は検出されなかった。貯藏穴と考えられる掘り込みは、P1とP2が東西の隅にある。遺物は床面の中央やや北寄りに土器片と炭化穀が集中し、P2の脇に塔の底部片がある。

#### 4号住居跡出土遺物（第58図）

1は球形を呈する胴部片。外面は刷毛調整、内面はヘラケズリの調整。胴部径21cm。色調は褐色～黒褐色を呈し、胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良好。2の胴部片は外面はヘラケズリ、内面は横撫での調整。色調は褐色～黒褐色を呈し、胎土に粗砂粒を少量含む。焼成は良好。3の底部片は外表面ヘラケズリの調整を施す。底部径7.6cm。色調は褐色～黒褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成は良好。4は大形の塔形土器の頸部から肩部で、外面は内面は調整。5も大形の塔形土器の底部片で、皿状の底部の中央に凹みをもつ。外面はヘラミガキの調整。

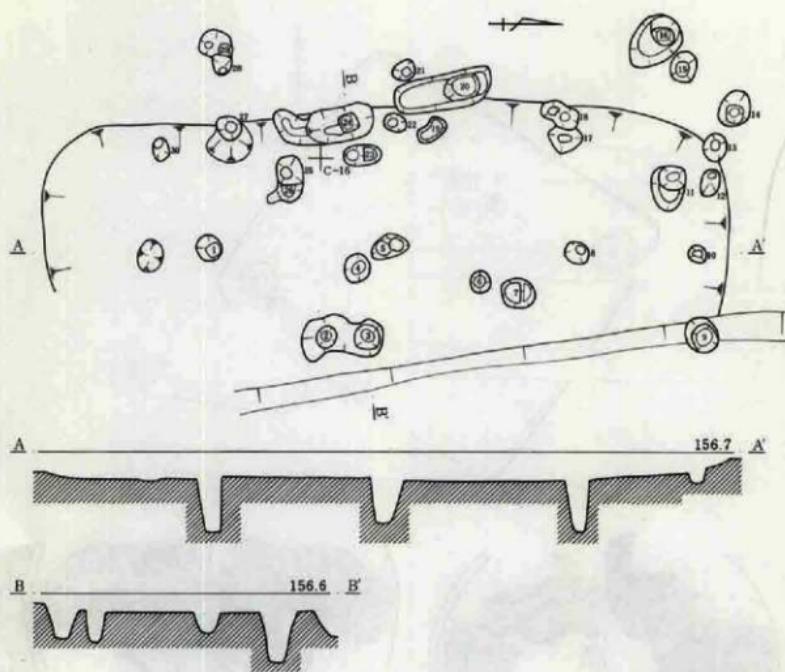
#### 5号住居跡（第59図）

B調査区の東方、B・C16グリットにその大半を占め、標高156.60m前後の平坦部に構築されている。東方は1号溝により破壊されている。



第58図 4号住居跡・出土遺物

形状は南北に長い隅丸長方形と考えられる。規模は南北長8.3m程を測り、東西長は1号溝により破壊された為に不明である。床面は浅い皿状を呈し、壁の周囲で緩やかに立ち上がる。柱穴は、住居跡内とその周囲に検出されたが、その所属は不明である。出土遺物は皆無であった。



第59図 5号住居跡

#### 6号住居跡（第60図）

E調査区は緩慢な南傾斜の平坦面とするローム台地で、古墳時代の住居跡3軒が検出された。当住居跡は、T27グリットポイントを包括して東方にその主体を占め、標高159.40m前後の平坦部に構築されている。東方に8号住居跡、北方に7号住居跡が配されている。

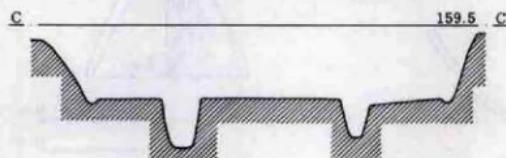
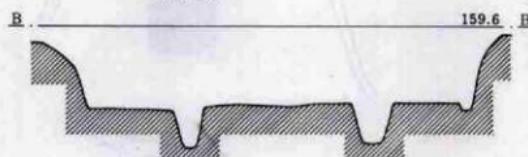
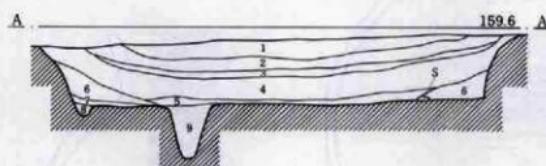
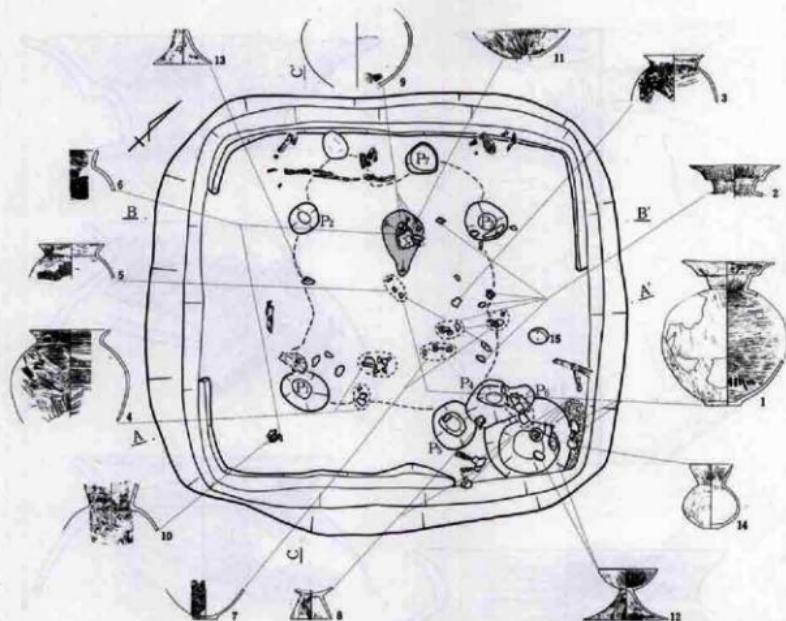
形状は、北東～南西方向に長い隅丸方形を呈する。規模は、長軸最大長5.8m、短軸最大長5.35mを測り、長軸長の主軸はN-43°—Eにとる。壁面は垂直気味か直線的とし、上方で開口する。

床面は平坦で、柱穴のP1からP6を除くP7に閉まれた内部が硬化面となり、本住居跡の建築部材が炭化材として床面に散在する。

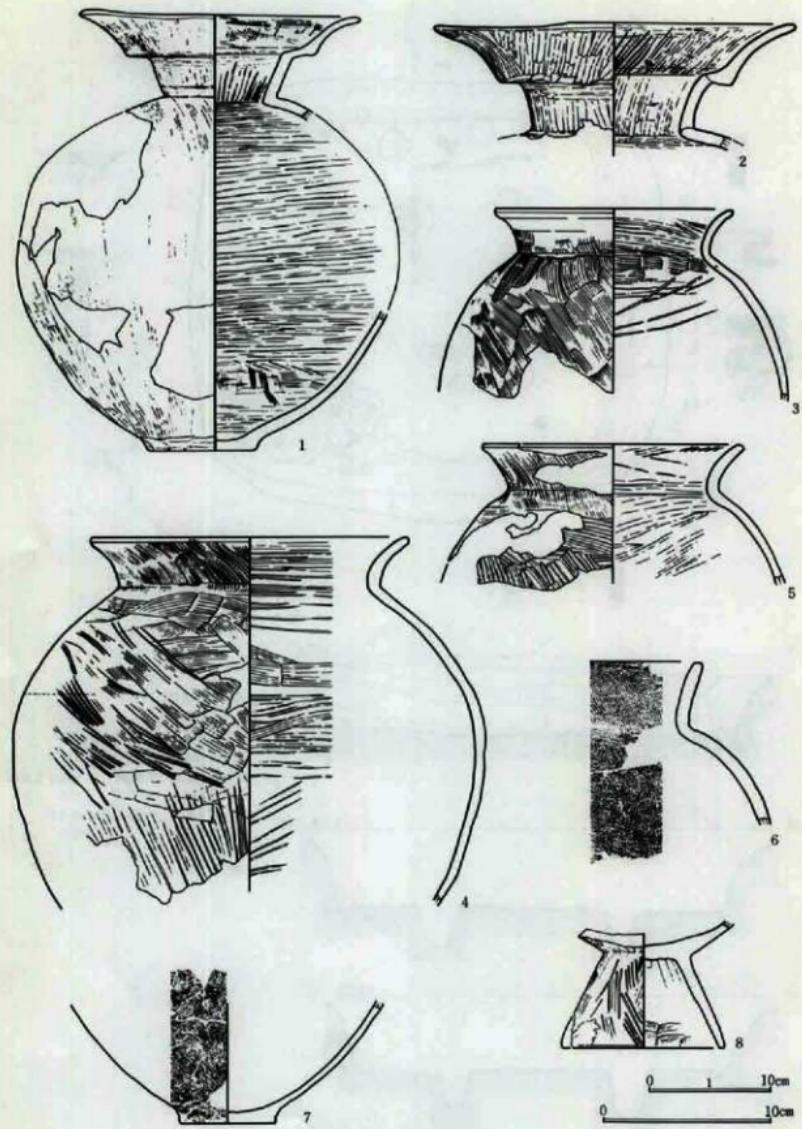
柱穴はP1～P7が検出され、P1～P4が主柱穴と考えられる。深さは38～51cmを測り、各の柱間は2.1mを測る。P4の箇所は建て替えの可能性があり、P5とP6が重複する。周溝は貯蔵穴のある東隅と南北辺の中央部分が欠損する。

貯蔵穴は東隅に設けられ、北方で壁面との隙間に粘土分布が見られる。形状は円形を呈し、P4とP6が重複する。規模は南北長1.04m、東西94cmで深さ50cmを測る。

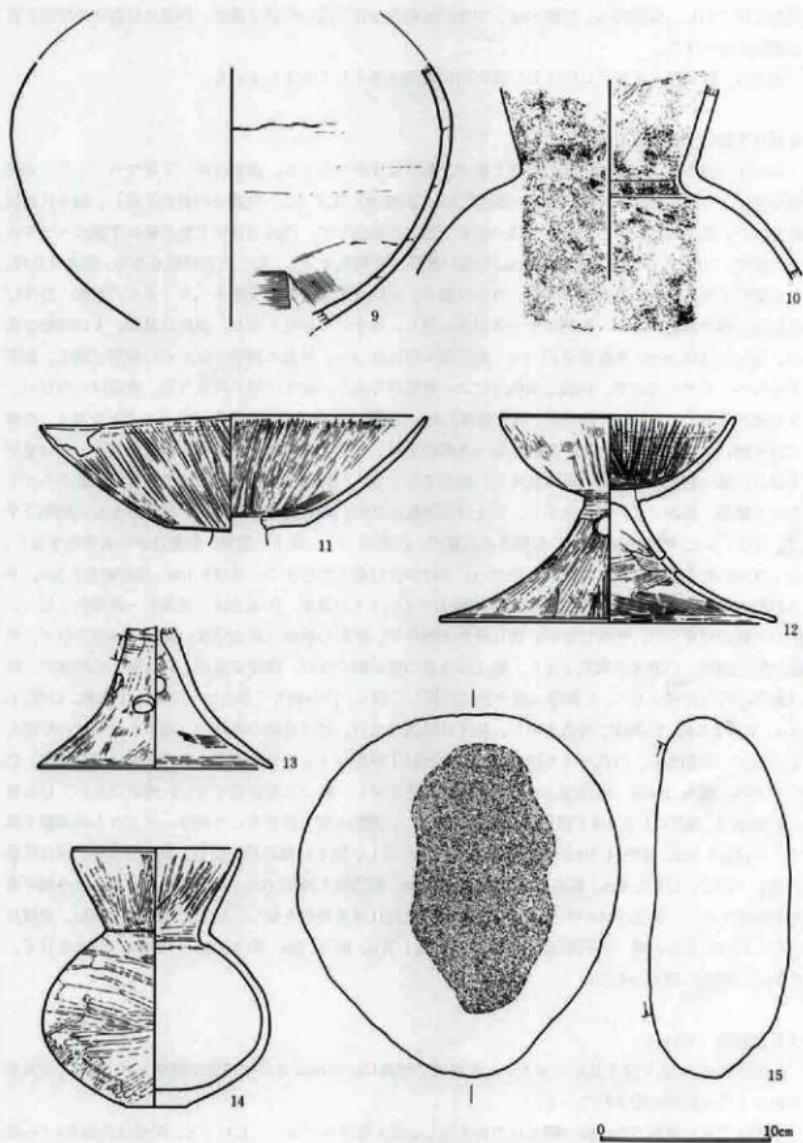
炉址は主柱穴のP2とP3のほぼ中央に検出された。形状は中央方向に向けて先端部を尖り氣味とする梢



第60図 6号住居跡



第61图 6号住居跡出土物（1）



第62图 6号住居跡出土遺物(2)

円形に焼土化し、長軸80cm、短軸50cm、中央部分が5cmほど浅い皿状に窪む。内部には高坏の坏部と壺と甕片が集中する。

遺物は、貯蔵穴と主柱穴に閉まれた硬化面の範囲に集中して出土している。

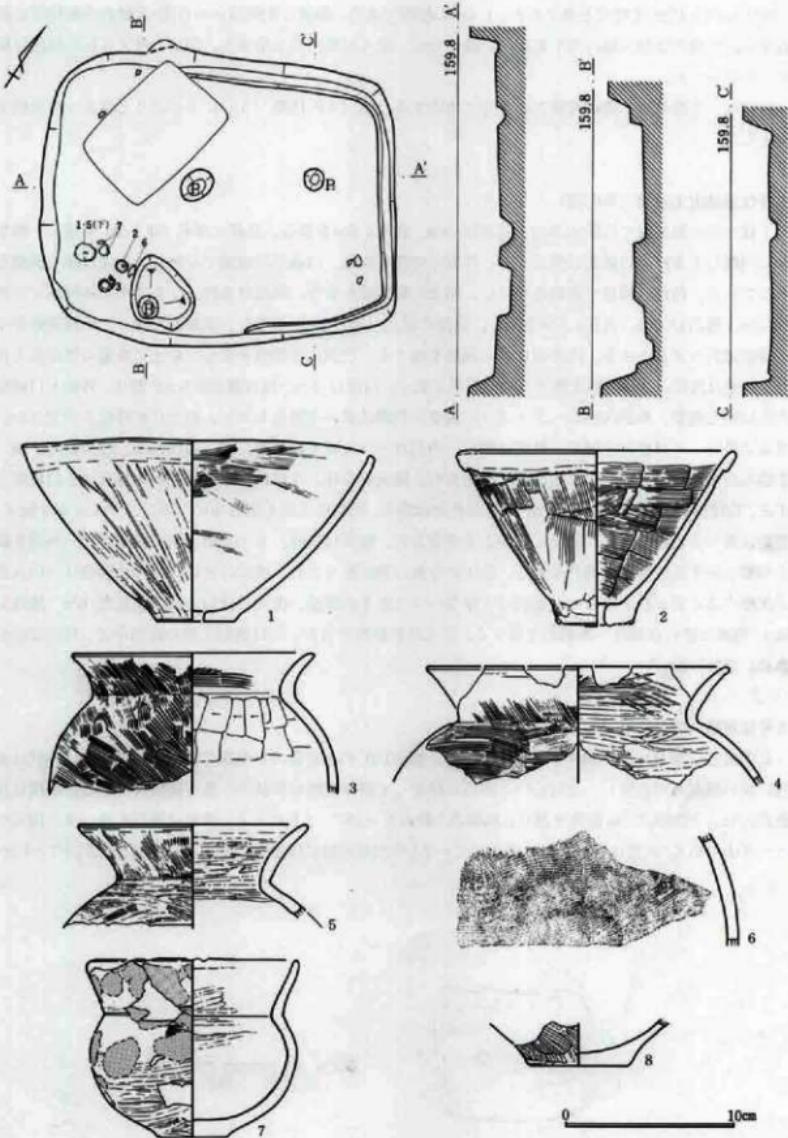
#### 6号住居跡出土遺物（第61・62図）

1は二重口縁を呈するほぼ完形の壺形土器で、胴部は球形を呈する。器面全体に丁寧なヘラミガキの調整を施す。口径22.2cm、器高35.6cm、底径8.3cm、胴部最大径30.9cm。色調は暗褐色を呈し、胎土は粗砂粒を含む。焼成は良好。2は二重口縁の壺形土器の口縁部で、内外面は刷毛整形後に丁寧なヘラミガキの調整。口径21.4cm、残存器高6.9cm。色調は褐色～赤褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成は良好。3は壺形土器で中位から底部を欠く。外面は刷毛、内面は頸部の刷毛を除きヘラミガキの調整。復元口径14cm、残存器高11.4cm。色調は赤～黒褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成は良好。4は壺形土器で、復元口径18.8cm、残存器高22.3cm、胴部最大径は28.4cm。外面の胴部中位から口縁部は刷毛、胴部下半はヘラミガキの調整。色調は褐色～にぶい黄褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成はやや甘い。5は壺形土器で、復元口径15.3cm、残存器高8.4cm。調整は外面が刷毛、内面がヘラミガキを施す。外面には火熱による剥がれがある。色調は暗～黒褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成は良好。6は壺形土器の口縁～胴部上半片で、直立気味の口縁部を呈する。口縁部外面に刷毛調整を残し、胴部はヘラミガキの調整。色調は淡い褐色を呈し、胎土は粗砂粒を含む。焼成はやや甘い。7は壺形土器の胴部下半で、底径5.5cm、残存器高7.3cm。胴部外面は刷毛、内面はヘラミガキの調整。色調は赤～黒褐色を呈し、胎土は粗砂粒を多く含む。焼成はやや甘い。8は脚台付壺の脚部片で、底径9.7cm。残存器高7.5cm。9は壺形土器の胴部片で、球形を呈する。外面はヘラミガキの調整。色調は淡い黄褐色～赤褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成は良好。10は壺形土器片で、球形の胴部に直立気味に開く口縁部を付す。外面は刷毛調整。色調は赤褐色を呈し、胎土に多量の粗砂粒を含む。焼成は良好。11は高坏の坏部で、坏底底部の外面に稜をもち、口縁部は緩やかに内湾して開く。内外面を丁寧なヘラミガキで調整。口径23.1cm、器高7.1cm。色調は赤褐色を呈し、胎土は焼成は良好。12は完形の高坏で、緩やかな椀状の坏部と富士山形の脚部とし、円孔を6ヵ所に穿つ。器面は丁寧なヘラミガキの調整。脚部内面は刷毛調整。口径13.9cm、器高12.4cm、底径20.2cm。色調は赤褐色を呈し、胎土は粗砂粒を含む。焼成は良好。13は器台の脚部で、裾部に1.2cmほどの円孔を6ヵ所に穿つ。調整は刷毛整形後に外面はヘラミガキの調整を施す。残存高8.5cm、底径14.1cm。色調は淡い赤褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成は良好。14は完形の壺形土器で、口径9.9cm、器高15.6cm、底径3.6cm、胴部最大径13.6cm。直線的な口縁部にやや偏平な球形胴部を付す。器面全体がヘラミガキの調整。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成は良好。15は出土した唯一の石製品の磨石で、長さ21.7cm、幅19.2cm、厚さ8.5cm、重量4,125gを計る。片面の平坦面に磨面がある。

#### 7号住居跡（第63図）

E調査区の北方、V27グリットポイントの周囲で標高159.65mほどの平坦部に構築されている。南方約6mに6号住居跡が配されている。

形状は北東～南西方向に長い隅丸長方形を呈し、長主軸はN-53°-Eにとる。規模は長軸長4.2m前後、短軸長最大3.5mを測る。壁面は残存する。床面はほぼ平坦であり、西隅に擾乱穴がある。



第63圖 7號住居跡・出土遺物

柱穴はP1とP2が主柱穴と考えられ、1.4mの柱間である。周溝は東壁沿いから南・北壁の中央付近に存在する。貯蔵穴は南方隅のやや東寄りに設けられ、歪んだ楕円形を呈する。炉址と考えられる施設は検出できなかった。

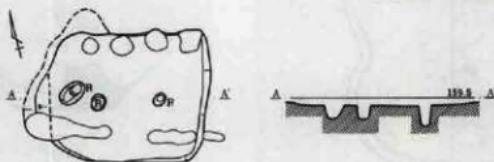
遺物は、完形の甌と壺が貯蔵穴の西方に集中する。甌（1）は壺（5）にすっぽりと埋まった状態で出土した。

#### 7号住居跡出土遺物（第63図）

1は完形の鉢形甌で口径20.8cm、器高10.9cm、底径4.6cmを測る。底部に単孔（径1cm）を施し、緩やかに内湾して素縁の口縁部に移行する。外面の体部は継位、口縁部は横撫で施し、内面は刷毛調整を施している。色調は褐色～赤褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成は良好。2も完形の鉢形甌で口径16.3cm、器高10.6cm、底径4.5cmを測る。底部に単孔（径1.2cm）を施し、直線的に開く、所謂逆錐形で口縁部は折り返しとする。内外面は刷毛調整を施す。色調は赤褐色を呈し、胎土に多量の粗砂粒を含む。焼成は良好。3は壺形土器で、胴部下半を欠く。口径14.2cm、残存器高8.5cmを測り、外面と口縁部内面は刷毛調整、胴部内面はヘラケズリの調整。色調は淡い赤褐色を呈し、胎土に粗砂粒を少量含む。焼成は良好。4は壺形土器で、外面は刷毛、内面はヘラミガキの調整。復元口径18cm、残存器高7cm。色調は暗褐色を呈し、胎土に粗砂粒を少量含む。焼成は良好。5は縛った頸部から外反する口縁部とする。口径13.6cm、残存器高6.1cm。口縁部外面は刷毛、同胴部は刷毛調整後に丁寧なヘラミガキを施す。色調は黄～赤褐色を呈し、胎土に粗砂土を少量含む。焼成は良好。6の壺形土器の胴部で、外面を刷毛調整を施す。色調は赤褐色を呈し、胎土に少量の粗砂粒を含む。焼成は良好。7の小形壺は、内外面が火熱による剥がれが著しい。器面は丁寧なヘラミガキの調整。復元口径12.4cm、器高19.8cm、底径5.8cm。色調は淡い赤褐色～黒褐色を呈する。胎土に粗砂粒を含む。8は壺形土器の底部片で、外面は刷毛調整。底径5.8cm。

#### 8号住居跡（第64図）

E調査区の東方、R・S29グリットに跨がり、標高159.45m前後の平坦部に構築されている。形状は東西に長い隅丸方形を呈し、北辺沿いと南辺に併走して耕作痕跡が形状の一部を破壊している。規模は長軸長2.9m、短軸長2.3m前後を測り、長軸の主軸はN-107°-Eにとる。壁面は残存の良い東と南辺で3～4cmである。床面はほぼ全体に硬化している。柱穴は長軸に併走して中央に1.1mの柱間でP1とP2が



第64図 8号住居跡

あり、主柱穴と考えられる。P2のに隣接してP3が検出された。周溝・貯蔵穴・炉址は検出されなかった。出土遺物は皆無であった。

#### 1号溝（第65図）

B調査区の東方、B16～E16グリットに跨がり南北に走行する。その先端部はE16グリットにあり、南方で5号住居跡を壊して普請されている。北方の延長上や東西方向には、試掘結果から溝は存在しない。調査区での全長は14.5m、幅2.1mを測る。掘り込みは断面形がU字形とし、底面は南方に緩やかな傾斜としている。主軸はN-9°-Wにとる。C16グリットには横脚部が存在したことを示唆する柱穴が2.1m間隔で6ヶ所に確認された。

#### 1号井戸（第65図）

B調査区のC14・15グリットに跨がり、東方に中世の5号住居跡、西方に4号住居跡が位置する標高156.60m前後の平坦部に構築されている。

形状は円形を呈し、規模は1.85～1.9mの径を測る。掘り込みは検出面から70cm前後はロート状に開口し、下部は1.2mほどの円形で下方に連れて径を減少させている。深さ2.15m付近で湧水と埋土の軟弱から掘り下げを断念した。出土は皆無であった。

#### 1号地下式坑（第66図）

C調査区のJ・K17グリットに跨がり、標高157.50m前後の平坦部に構築されている。形状は、方形の主室部に東辺の中央やや南寄りに東西に張り出す入り口部を付す。規模は、主室部の東西長2.7～2.8m、南北長2.9m前後を測り、床面上に堆積したローム状態から天井が存在した可能性が考えられる。壁面は直線気味に立ち上がり、68～77cmが残存する。床面はほぼ平坦である。入り口部は東辺より1.35mほど張り出し、幅80cm前後とする。入り口部から主室部には二段のテラスを設けている。入り口部の主軸はN-80°-Eにとる。出土遺物は、底面の天井部崩落土の上からである。

#### 1号地下式坑出土遺物（第67図）

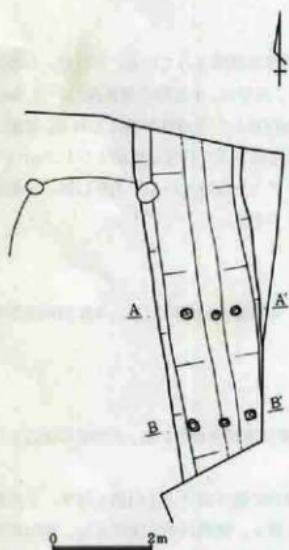
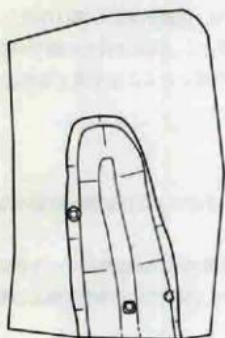
1は安山岩質の石鉢片で、内外面に火受けによる変色がある。2は安山岩質の凹石。3は初鋳造年を1408年とする明時代の永楽通寶。4と5は焼締陶器片。

#### 2号地下式坑（第66図）

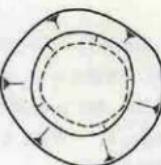
D調査区のK29グリットに包括され、標高158.55m前後の平坦部に構築されている。主室部の南辺と入り口部の上面を溝状の掘り込みにより破壊されている。

形状は南北に長いやや歪んだ方形の主室部に東辺の南寄りに東西に張り出す入り口部を付す。主室部の辺はやや弧状を呈し、規模は長軸長2.7m、短軸長2.2m前後を測る。壁面は垂直気味とし、90cm前後が残存する。三隅がオーバーハングし、堆積状態からも天井部の存在が示唆される。床面は入り口部底面から緩慢な傾斜で主室部に移行し、主室部は平坦とする。入り口部の70cmほど東に張り出し、幅70cmで、主軸はN-80°-Eにとる。出土遺物は皆無であった。

1号溝



1号井戸

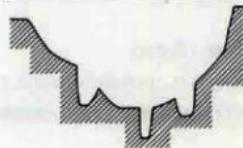


156.7

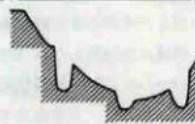
0

1.5m

A 156.6 A'

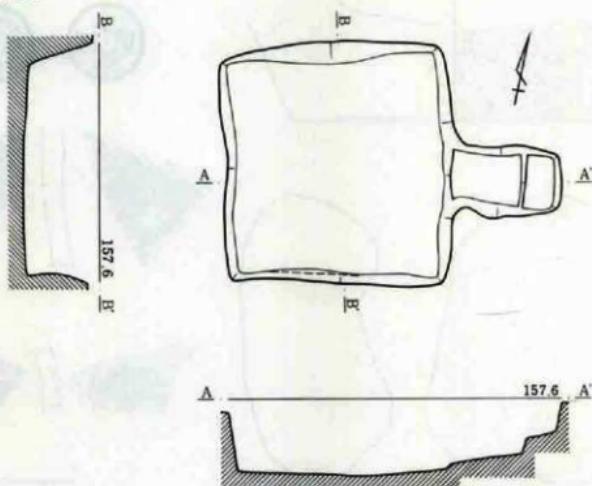


B 156.5 B'

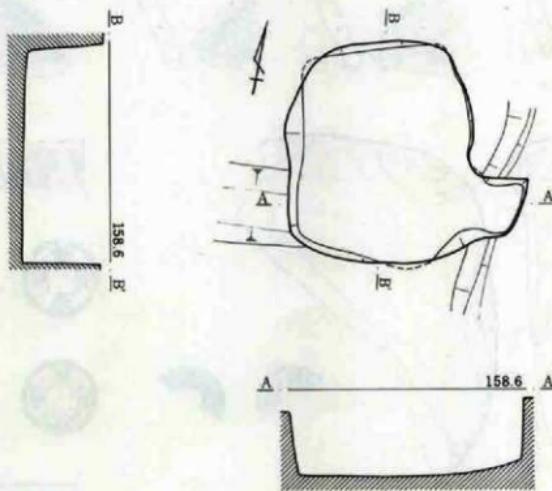


第65図 1号溝・1号井戸

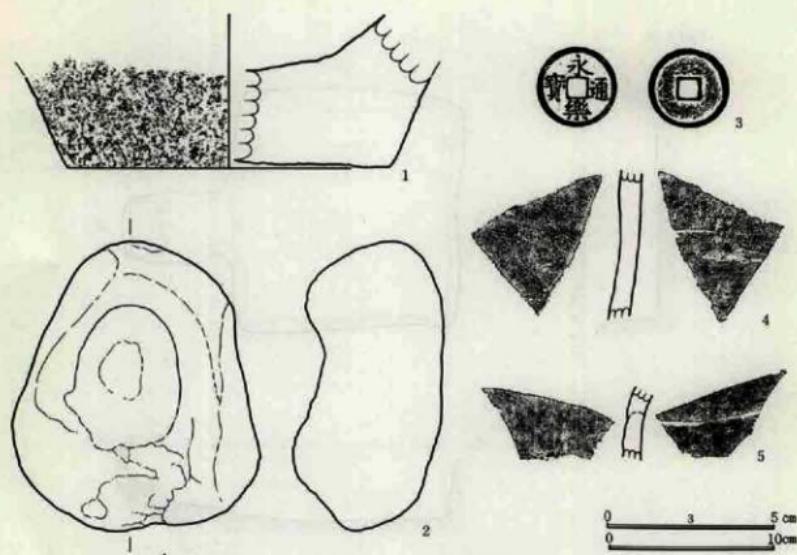
1号地下式土坑



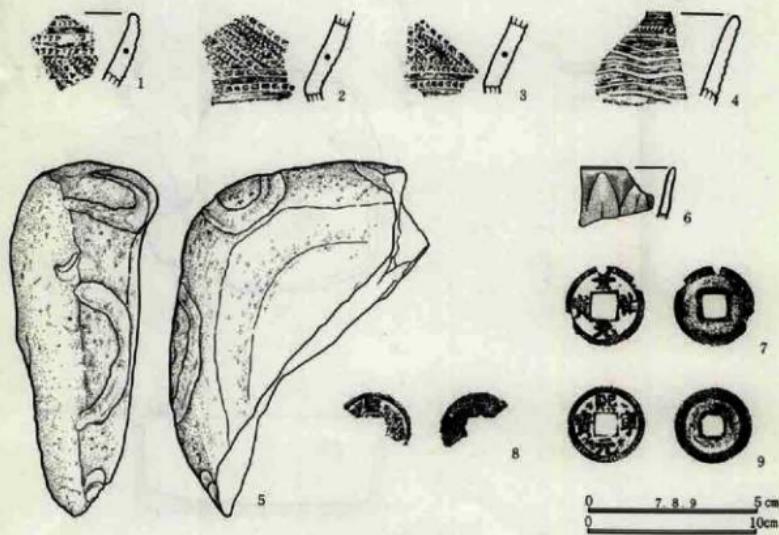
2号地下式土坑



第66圖 1・2号地下式土坑



第67図 1号地下式坑出土遺物



第68図 遺構外遺物

#### 遺構外遺物（第68図）

検出された遺物は、繩文式土器片、石皿、青磁片、古銭がある。1～3は胎土に纖維を含む、前期黒浜式に比定され、同一個体の可能性がある。爪形文を連続させる平行沈線文で口唇部下と頸部を区画し、区画内にユニオンジャックの文様を施すと考えられる。4は前期諸磯b式に比定され、区画文内に波状文を施す。5の石皿片は、周縁部に円弧文を施す。6の青磁片は、龍泉窯の鎮連弁碗の口縁部片で淡い緑青色を呈する。7は景德元寶（初鑄造年1004）、8は皇宋通寶（初鑄造年代1038）、9は熙寧元寶（初鑄造年1068）。

## 第VII章 上大屋中組・天王山遺跡の成果とまとめ

本県の古墳時代の年代的位置付けは、石川氏他によりテフラの降下時期に準拠しての検討（註1）や前期の石田川式土器（註2）を中心に進展し編年がなされている。上大屋天王山遺跡では古墳時代に該当すると考えられる5軒の住居跡が検出され、覆土にAs-C鉱石を含む黒褐色土が確認されたが、純層はみとめられなかった。この結果は2次堆積と考えられ、As-Cの降下と考えられる4世紀中葉前後以後の所産とするのが妥当であろう。

出土遺物を概観すると、床面からは良好な土器の検出があった6号住居跡からは、球形の胸部を呈する複合口縁の系譜の壺、「く」の字状を呈す單口縁の壺、富士山形の裾部を呈する高壺や器台、壺がある。7号住居跡からは、2点の壺と「く」の字状を呈す單口縁の壺等があり、他の住居跡からも石田川式期を代表するS字状口縁台付壺は見られなかった。

壺・壺は球形胸を呈し、壺の調整はその多くが刷毛であり、和泉式期の現象である長胴化とヘラケズリ調整は見られず古式の要素を残している。高壺や器台も柱状脚の前段階の要素である。

これらを総合して判断すれば、石田川式期（五領式期）の要素を残し、和泉式を繋ぐ狭間の様相と考えられ、5世紀の前半代の所産と推察するが今後の類例の増加が待たれる。

中世の所産と考えられる遺跡は、本町では断続的に行われている大胡城跡や茂木古墓・日光道東遺跡の古墓があるが、居住を主体とする遺跡の調査は初めてである。中組と天王山遺跡では竪穴遺構（註3）・井戸・柱穴群、竪穴住居跡・地下式坑（註4）・溝などを検出した。出土遺物は、15世紀前後の所産と考えられる常滑の大壺・瀬戸の折縁鉢・天目茶碗などと一括大量出土の古銭がある。

中組遺跡では、平坦に削平されたL字形区画内に配されたと考えられる建物の構造、柱穴群と疊分布、出土した男瓦の建物との関係、竪穴遺構の機能論、天王山遺跡では、地下式坑の機能論や竪穴住居跡とした5号住居跡があり、これらの空間は、中組遺跡を中心とする同時性の強い生活空間であると考えられる。これらを総合した時空を解明することで本遺跡が理解されよう。

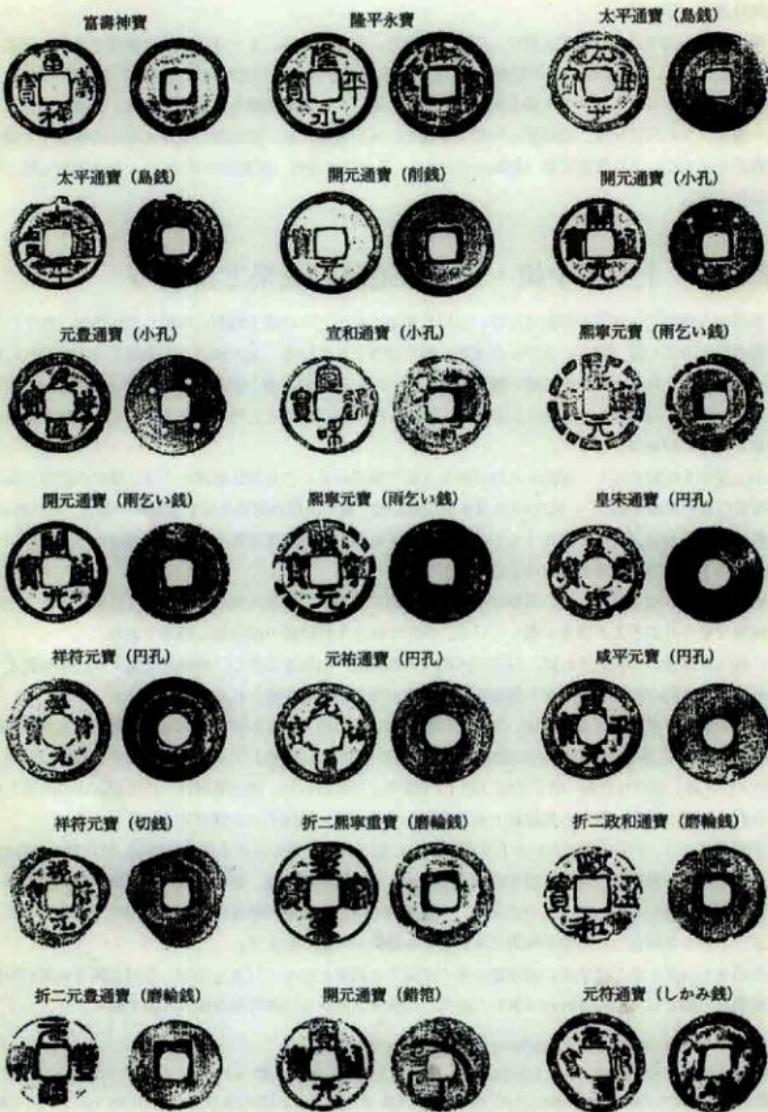
担当者の力量不足と浅学故に諸問題を多く産出する結果となってしまったが、今回の調査結果が中世史解明の一助として活用されれば幸いであり、今後多方面からの御指導を願うものである。

（註1）テフラ層を鍵層として古墳時代の土器の相対編年を試みている。

（註2）石田川式土器の標式遺跡である太田市石田川遺跡を先駆とし、各氏により石田川式土器のS字状口縁台付壺の編年が行われている。

（註3）中組遺跡では4基の竪穴遺構を検出したが、その形状は地下式壙・地下式土壙・地下式倉庫と称されているものに類似する。しかし、天井部の存在が明確でなく、その性格も今後の資料増加に委ね、判断すべきと考える為に竪穴遺構と称した。

（註4）天王山遺跡では、地下式坑とした遺跡が2基検出された。明らかに天井部をもつ主室部が想定されるが、蓋板を明かすことから地下式坑と称した。



第69図 参考資料 牛沢出土銭からの皇朝十二銭・島錢・加工銭等

写真図版



作業風景



測量風景



1 上大屋下組遺跡調查區全景



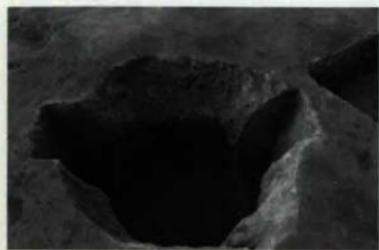
2 1号居住跡土層



3 As-C 集積狀況



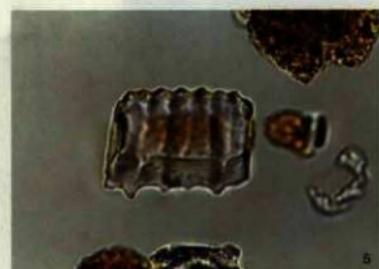
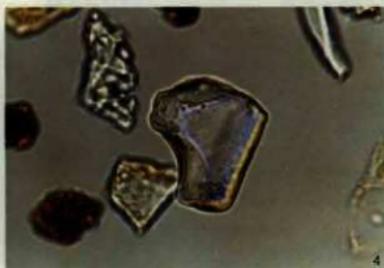
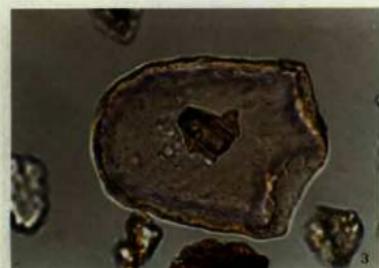
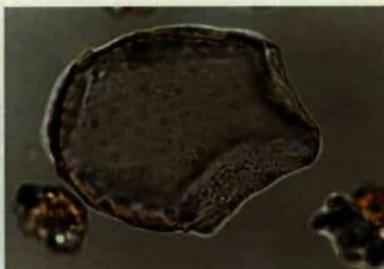
4 1号居住址



5 1号土坑



6 2号土坑



植物珪藻体の顕微鏡写真

(倍率はすべて250倍)

No.	分類群	地 点	試料名
1	イネ	第3トレンチ中央	5
2	ヨシ属	第1トレンチ東	1
3	ヨシ属	第3トレンチ中央	4
4	スキ属型	第3トレンチ中央	2
5	ネサザ属型	第2トレンチ東	5
6	イネ科の茎部起源	第1トレンチ東	2



1 上大屋中組遺跡全景



2 同主要部



1 中組1号竖穴遺構



3 同2号竖穴遺構



2 同古錢出土狀況



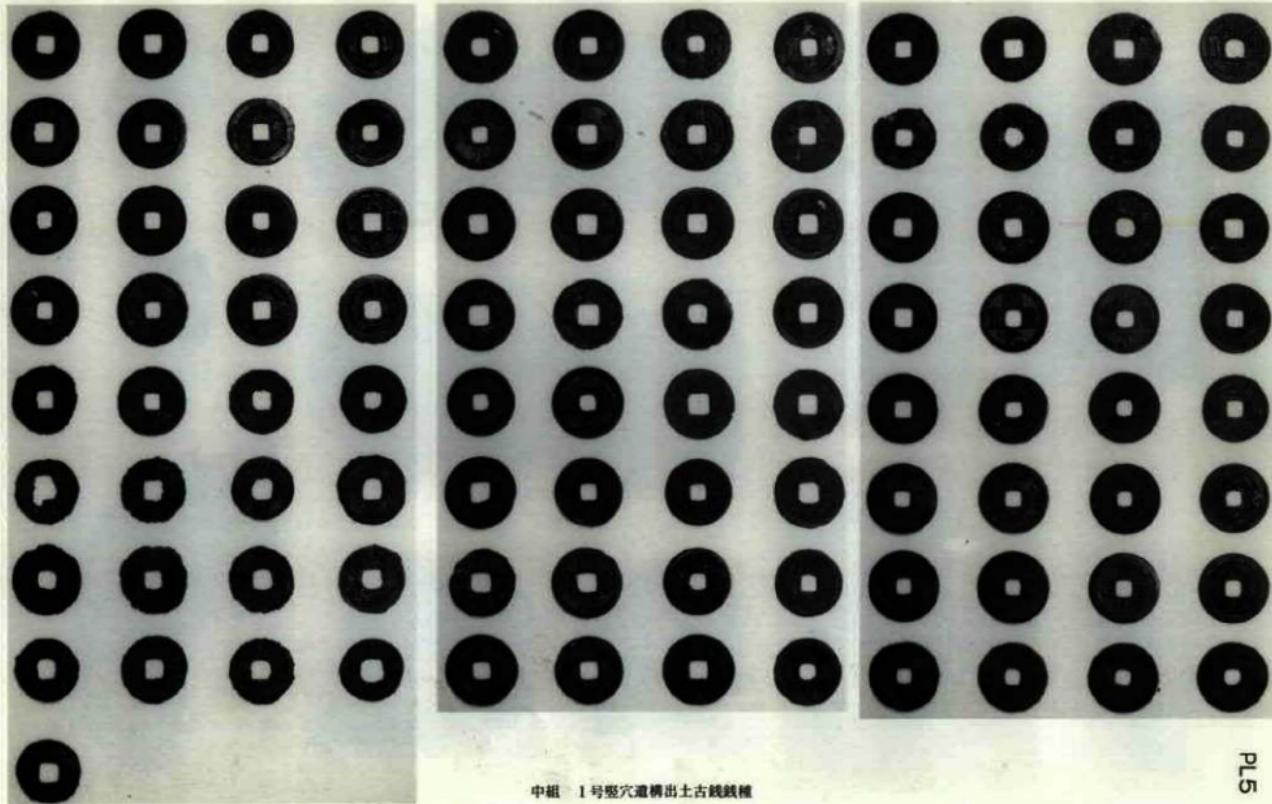
4 同3号竖穴遺構



5 同4号竖穴遺構·土坑



6 2号柱穴群石列



中組 1號堅穴遺構出土古錢錢種



40-1



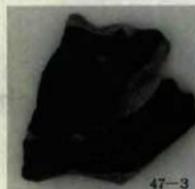
46-1



43-1



46-1



47-3



46-2 表



46-2 裏



47-5



49-1



49-2

中組遺跡出土遺物



1 天王山遺跡全景



2 同A調查区全景



3 同1~3号住居跡



4 同1号住居跡遺物出土状况

PL8



1 天王山B调查区全景



2 同4号住居跡



3 同5号住居跡



4 同6号住居跡全景



5 同住居跡遺物出土状况



6 同7号住居跡



1 天王山6号住居跡遺物出土状況



2 同8号住居跡



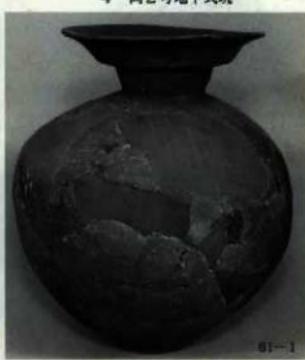
3 同1号地下式坑



4 同2号地下式坑



57-2



61-1

以下同遺跡出土遺物



57-4



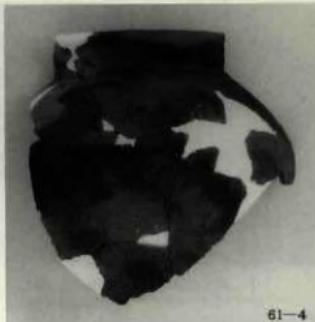
57-3



61-2



61-3



61-4



61-5



61-8



62-10



62-11

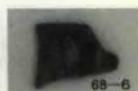


62-13



62-12

天王山遺跡出土遺物



天王山道路出土遺物

抄 錄

フリガナ	カミオオヤナンブイセキグン カミオオヤシモグミイセキ カミオオヤナカグミイセキ カミオオヤテンノウサンイセキ
書名	上大屋南部遺跡群「上大屋下組遺跡・上大屋中組遺跡・上大屋天王山遺跡」
副書名	「土地改良総合整備事業日光道東地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III
編著者名	山下歳信・藤坂和延
編集機関	大胡町教育委員会／〒379-0292 群馬県勢多郡大胡町大字堀越1115番地
発行機関	大胡町教育委員会／〒379-0292 群馬県勢多郡大胡町大字堀越1115番地
発行年月日	西暦1999年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上大屋下組遺跡	大胡町 大字上大屋字下組 310	10304		36°24'19"	139°10'15"	19971111 ～ 19971130	380 m <sup>2</sup>	土地改良
上大屋中組遺跡	大胡町 大字上大屋字中組 213-1、214-1、216-1、217	10304		36°24'22"	139°10'27"	19970512 ～ 19970716	2,237 m <sup>2</sup>	土地改良
上大屋天王山遺跡	大胡町 大字上大屋字天王山 243、244、248	10304		36°24'22"	139°10'31"	19971122 ～ 19971225	786 m <sup>2</sup>	土地改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上大屋下組遺跡	集落	縄文時代 古墳時代	包含層 堅穴住居跡 1軒	縄文土器・石器 土師器				
上大屋中組遺跡	集落	中世	堅穴遺構 4基 土坑 10基 柱穴群 2箇所	古銭、常滑焼・瀬戸焼 片、瓦片等		1号堅穴遺構より約1貫文 の古銭出土		
上大屋天王山遺跡	集落	古墳時代	堅穴住居跡 8軒 地下式土坑 2基 井戸 1基 溝 1条	土師器、青磁片、古銭等				

《追補》

群馬県立歴史博物館調査報告書 第7号で飯島義雄（1996）が「白欠用水と永井流養蚕」一開発による環境への悪影響とその克服ーと題する調査研究で「白欠用水は荒砥川上流の宮城村鼻毛石字元替戸に取水堰があり、宮城村と大胡町の境を流下し、千貫沼には本用水の中流部から引水して～。千貫沼は本用水の悪水抜きとして造られた」と記している。本文の第II章 第1節 遺跡の位置～西能溝寺川は千貫沼に注ぎ～と記しているが、神沢川に合流する河川名の能溝寺川と西能溝寺川は氏の記している「白欠用水」に該当しよう。

上大屋下組遺跡  
上大屋中組遺跡  
上大屋天王山遺跡

団体営日光道東土地改良総合整備事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 III

---

平成11年3月25日発行

編 集 群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発 行 群馬県勢多郡大胡町教育委員会

〒371-0292 群馬県勢多郡大胡町堀越1115

電話 027（283）1111

---

印刷製本 朝日印刷工業株式会社